自己点検評価報告書

1999年版

東海女子大学

はじめに

東海女子大学学長　三平和雄

人類の文化や世界情勢という大きく謎多き全体像のなかでも、地域性や時代の流れ、あるいは民族問題、人権問題等のあらゆる局面で、近代の人間は、現代を見据え、教育の可能性を梃子に、人間のあらゆる能力に期待する展望を追い求めてきた。本学では、現代的な文学部として、精神や行動をはじめ、人間本来の能力を探求し、危機的な人間社会の深刻な問題の証しともなっている歴史や文明、さらに文化財に現われる諸相を把握、認識しようとつとめている。さらに、科学文明の発達とその成果として、人間の意識や人間の叡知が、教育という大事業により今のこの世界、社会を創り出してきたことを顧慮すれば、人類全体の自己点検、人間社会構成員の自己評価の重要性は殊更強調する迄もないであろう。

教育にも、種類や段階があり、わが国では、以前は概して成果のあがっていた初等教育が誇らしく取り上げられ、諸外国に比し相対的に中等教育や高等教育に問題有りと指摘され、特に大学教育の大衆化に伴うレベルの低下、社会に対する影響や貢献度の不透明さが批判されているが、最近は、すべての段階の教育や社会教育においてもモラルの崩壊等がしばしば指摘されるところである。

大学を預かり、管理運営する当事者として、広い連帯意識のなかで、自らの教育機関のためにも、関連する地域や社会のためにも、強い反省に立って教育活動を常に点検し自己評価を継続し、教育研究の一層の発展充実を期することにより、永く教育経営の実をあげ続ける努力をすることが必要である。

本学の自己点検評価は、平成４年度より取り掛かり、同７年度の中間報告、関連する研究者一覧の編集、点検結果の運営における実施、改善等を行なってきたのであるが、平成９年度よりさらに点検評価作業を継続、１０年度末段階で、新たなる自己点検評価報告書を纏めることになった。

目　　次

I	自己点検評価実施について	3
II	東海女子大学、大学の理念と目的	6
III	学部各学科の現状と問題点	14
IV	学生受け入れ	23
V	教育課程	31
VI	教育研究組織	49
VII	図書・学習資源	76
VIII	学生生活	84
IX	管理運営組織	127
	あとがき	134

Ⅰ　自己点検実施について

神谷学園は、文化的薫りの浸透したこの美濃の地域に密着し、女性の国際社会への進出を目指した人材育成という教育理念を基礎に、女子の高等教育を創始し、特に東海女子短期大学での運営の経験を踏まえて、高度経済成長を経て国際化、情報化といわれる時代に、さらに求められる新時代の創造的な精神をもつ行動的な女性像を求めて、本格的な大学教育の開設が計画された。

昭和３８年に創設された「東海女子短期大学」では、女子教育としては、先進的な思想と、実践的で堅実な教育内容を設定し、この地域での女子高等教育の先駆的な役割を果たした。いわゆる戦後の衣食住の困窮、再建時代に女性の封建的因習からの開放、教養や生活の知恵の涵養が求められ、さらに学制の改革につれて、家政系の科学の教育研究が重視されたのは当然であるが、なお一層広い視野から女性の高等教育の在り方が注目されるに至った。一方では、女子教育の時流に即しての学校教育の整備に参加し、復興から高度経済成長という社会情勢の展開に応じて、文系、教育系、理系、家政系にわたる人材育成が要請されるなかで、本学は先ず文系の学部を整備し、社会に貢献しようとしたのである。

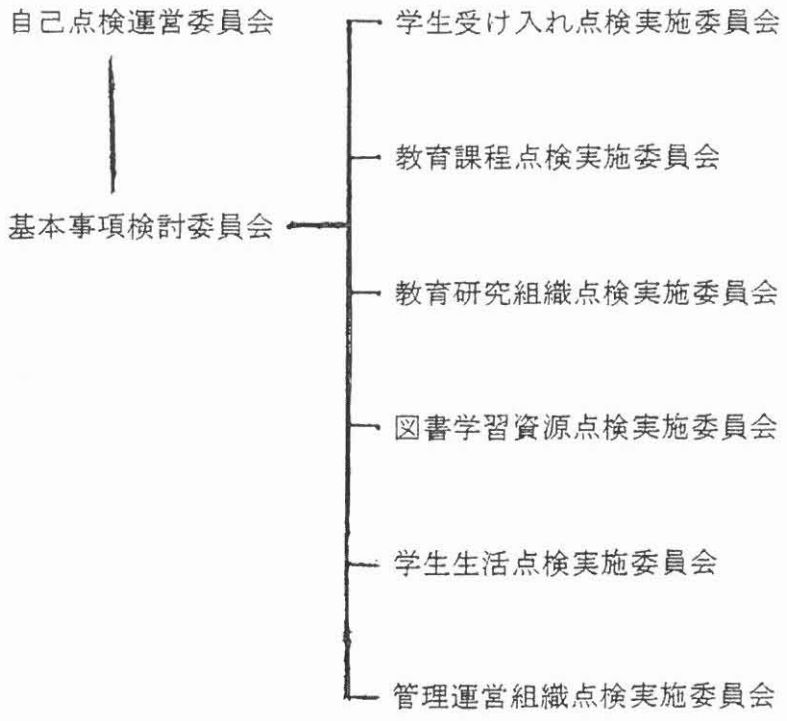
その上に、時代の精神からいち早く目を海外に向け、特に海外旅行が広く普及する以前に、昭和５０年には英国ケンブリッジに直営の分校 Cambridge Academy Of English を開設し、現地で外国人学生に交じっての語学留学の制度を開き、国際性、社会性、行動性、創造性の育成を具体化する実績を積んできたことは特記すべきである。その後、女子の大学進学傾向の高まり、教育内容の高度化の動向や地域社会からの要請に応えるべく、「国際的視野を備えた社会性、及び創造性と行動力豊かな女性の育成」という、女子短期大学以来の建学の精神を再確認し、文科系４年制の「東海女子大学」の設置が計画された。

関係者の努力により、昭和５６年４月より「東海女子大学」の設置が認可され「文学部」＜英米文化学科＞、同＜人間関係学科＞の２学科によって発足し、さ

さらに、諸般の条件の成熟をまって、平成４年度には、中京地域では勿論、全国でもユニークな＜美学美術史学科＞を増設し、新設大学としての基礎を固め、各学科の専攻や、コース分けによる内容の多様化、時世の進展に応じた教育研究内容の改善、工夫等に心掛け、充実発展を期してきた。

創設後約１０年を迎え、美学美術史学科設置を申請した平成３年、臨時教育審議会の答申や新しい大学審議会を経ての大学設置基準の大綱化が実施された。それを受けて、文部省や大学基準協会の示す「自己点検評価」の要綱、並びに指導書に従って、本学に於いても、自己点検・評価を実施することが計画された。

平成４年秋、理事長、学長以下、全教職員を挙げて自己点検・評価の体勢を整えることとし、全学的な「自己点検運営委員会」を組織し、具体的な方法を審議する「基本事項検討委員会」を先ず発足させ、その委員会の報告により、下図の様に各点検項目毎の「点検実施委員会」を設けて、各学科等と事務局職員から選出された委員を任命し、平成５年度から鋭意具体的検討を進めた。



１、平成８年度「自己点検・評価報告書」並びに改革実施事項

平成６年末には、各「点検実施委員会」からの答申が出揃ったので、その段階で「自己点検・評価報告書」を編集して、検討結果を明らかにし、中間報告の形で、一応検討結果を取り纏め学内に提示した。また、以上の第１段階の検討結果により、早速実施に移すことが望ましい事項で、運営上可能なものは、関係委員会を経て教授会の決定により、実施に移されたものがある。

入学試験方法やカリキュラムの改革等は、検討委員会の報告を踏まえ発展的に新しい審議委員会を構成して検討し、具体的に逐次必要な改革を実施している。

この間、自己点検評価に関連して実施された事項は次の通りである。

◎平成５年度：「学生受け入れ計画点検実施委員会」の提言により、「入学試験実施委員会」を設置し、機能させている。

◎平成６年度：「教育課程点検実施委員会」の提言により、「履修の手引き」をシラバスを含む形式に改善し刊行した。

◎平成６年度：新図書館の完成を機に、図書館の拡充、大学・短大の図書館統合と、電算機化、運営の刷新を行なった。

◎平成７年度：「研究者一覧」の作製が計画され、特別委員会を設けて編集を行い、同８年１月「東海女子大学・研究者一覧」を刊行した。

◎平成８年度：全学のカリキュラム改正の検討に着手し、同９年４月より、新カリキュラムを施行した。

２，今回の平成１０年度点検実施の特色

その後、大学院文学研究科の設置等の全学的な計画に従って、新たな課題への取り組みの要請もあり、平成９年度より、組織を改めて自己点検評価を続行し、平成１０年度各点検事項の報告書の作成を進めてきた。

今回は、特に教育研究について、平成９年度よりの「新カリキュラム」関連と、学生部並びに本学バイオ・サイエンス研究センターによる「学生生活」調査報告に多くの紙面を割くことになった。

II、東海女子大学、大学の理念と目的

1　神谷学園、東海女子大学の沿革

昭和：

３６、１１、８　学校法人神谷学園設立、理事長、神谷一三就任

３８、４、１２　東海女子短期大学開学、初代学長、神谷みゑ子就任

５０、４、１　Cambridge Academy of English 開設

５６、４、１４　東海女子大学開学式挙行　初代学長、高橋悌蔵就任

（文学部英米文化学科、人間関係学科、入学定員計 200）

５９、８、２２　ハワイ州立大学（ＵＨＨ）と姉妹大学協定締結

６２、８、１１　米国ゴールデン・ステート大学と姉妹大学協定締結

平成：

４、４、８　（美学美術史学科認可、既存学科と共に入学式・入学定員 100）

６、５、２７　情報コミュニケーション・ライブラリー・図書館　竣工

１０、４、１　東海女子大学大学院文学研究科・修士課程開設

（英米文化専攻、人間文化専攻、入学定員１５）

2　東海女子大学の理念

（1）大学設置の主旨

教育界での実績や経験から培った高等教育を志向する起業精神や、短期大学経営の学園の歴史の上に、地域との結びつきを基礎にし、教育基本法並びに学校教育法に則り、わが国並びに世界の社会情勢、教育状況を見据えて、女性の高学歴志向や女性開放、社会進出の趨勢に呼応するよう、大学の設置が企画された。当然、大学教育は専門の学術を教授研究し、高度の教養を備えて知的活動を行なう有為な女性を育成することを目的として、とくに、女性の国際舞台での活躍や自立的社会活動の広がりの情勢に即応した教育研究に着目し、「国際的視野を備えた社会性および創造性と行動力の豊かな女性の育成」という建学の精神を掲げて、昭和５６年に「東海女子大学・文学部」が創設された。

上記の理念を端的に表し、文化的、人間的諸問題を考究する教育研究が構想され、最も基礎的な伝統の上に、新しい理想を盛り込む形の文学部とし、言語文化の柱として世界語というべき英米語文化を対象とする学科と、人間精神とその所産である文化の本質を究め、人類の発達、行動、人間形成に視点を定めた内容の人間関係の学科を構築しようとしたのである。その線で、「英米文化学科」と、人間精神、社会活動、人間形成を包括する「人間関係学科」が設置された。両学科とも、それぞれの対象領域と内容に関わる専門分野を取り揃え、それらの学際的関連の重視と、全体把握の必要性が強調された。

（2）大学教育の編成

また、一般教養の重要性、基礎的訓練科目の重要性を考慮し、在来の大学設置基準に忠実に則り、両学科とのバランスを考慮した一般教育（後の全学共通）科目の整備にも最大限の配慮をした。また、ネイティブ・スピーカーの外人教師を積極的に採用し、英国や海外並びに国内の語学研修にも力を入れた。

一般教育に連携させて入学時から専門科目も漸次履修することとし、教員についても、一般教育と各学科の教員の相互協力態勢を取るように努めた。開学当初

から目標とされた、各学科の特色と開設後の学科運営は次の通りである。

「英米文化学科」は、わが国の近代化に重要な影響を及ぼした西洋文化のなかでも、特に関係の深い英米の文化をヨーロッパ全体の歴史、文化の諸領域の中で捉え、英米文化の基礎となる、英米語学、言語文化である英米文学、言語や文学の背景となる思想、宗教、歴史、文学、芸術等の関連諸文化領域、並びに英米の他の西欧言語、西洋文化領域等の関連分野について深く教育研究することを目的とした。

「人間関係学科」は、人間の発達と行動に関する人間科学を、特に人間関係の共通の視点を尊重し、人間に関わる哲学、思想科学、心理学、社会学、教育学等の諸科学の領域にわたり、人間に関する諸問題を総合的、科学的に把握することを基礎にし、さらに、心理学、社会学、教育学の３分野を重点に人間個人の行動、人間社会の形成、発達、人間性の陶冶等について総合人間科学として深く教育、研究をすることを目的とした。

その後、平成４年度より、「美学美術史学科」を新設し、上記２学科の運営の経験に鑑み、専門的研究精神に裏付けられた高度の教養を目指して、人間の創造性、感性の本質としての美の問題、並びにその行動所産である芸術、文化財を捉え、美や芸術の諸問題を深く、かつ多角的に教育研究する学科を構想した。美や芸術の文化を国際的に考究することと、わが国固有の文化をグローバルな視野から研究することは、人間文化の多様な側面を広くかつ専門的に深化させる教育研究であり、本学の建学の精神に直接呼応する分野として設けられたものである。

（３）大学院文学研究科の設置

女性の社会進出、大学への進学熱の高まりに伴う大学教育の量的拡大と、世界的に求められている高等教育の質的拡充は、学問の高度化、科学技術の進展に応じて、各大学が大学院教育を充実させる機運を生み出している。本学も、創立以来内容の充実に努めてきたので、時期を見て条件を整え、大学院を現存学部を基礎として設置することになり、平成８年度より計画を進め、９年度に申請し、同

年１２月に認可を受け、平成１０年４月「大学院文学研究科・修士課程」を開設した。高度な研究的職業に従事できる人材育成の目的で、〔英米文化専攻〕、〔人間文化専攻〕の２専攻を開設した。

３、理念と目的の自己点検と評価

（１）大学の理念と社会責任

大学の理念や建学の精神は、私学の場合は特色を発揮し、大学の教育研究内容や実態イメージを形成する上で極めて重視されされるものである。それ故、構成員や関係者間で常に意識され、発展的、前進的に理念や精神の実現に努力しつつ、一方では、法令の制定や改正に速やかに対応することは勿論、大学基準協会や地域の行政、教育関係機関の提言や助言に耳を傾け、他大学等の類例に鑑み、実践的教育理念の確立と適切な運営を自己点検し、さらに、社会情勢や歴史の趨勢に照らして客観的に把握、分析する等、絶え間なき検討が必要である。

また、最近特に強調される、第３者、学外者を交えた客観性の高い評価の必要性、学生による大学や、教員の授業に対する評価を自己点検に組み入れることは、大学自らが高く評価すべきであり、その種の評価が日常化できるよう条件整備や、関係者の相互理解を深める努力の必要性が痛感される。本学では、目下のところ、教育研究に関する一部教員、あるいは教員集団関の無理解、不信感の払拭も必要であり、昨年度より注目されている教職員服務規定、勤務時間に関する規則をめぐっても、研究促進とともに高い配慮が臨まれるところである。

本学では、研究活動を極端に重視し、研究に多忙である故に学生指導や教育、あるいは、管理運営を軽視する教員はごく少数であるが、他の機関の研究者や特定の研究環境を引き合いに出し、教員の服務義務に対する認識が薄い者も無い訳ではなく、目下改善を心がけているところである。

一方、自己点検に関わらず、社会の評価、特に受験産業やマスコミによる世評や、入学試験や就職活動等に際しての教育研究水準や目的達成度の外的評価は、

あるいはランク付けの形や類別等で厳しい第３者評価に準じたもの、あるいは、それ以上のものとなっている。

受験者数の消長や、受験学生の学力、合格者の入学手続きと辞退との割合等の原因は多様で複合的と考えられるが、教職員の努力の限界を越えたものがあるとも思われ、事態に対する分析、対応策の促進、大学の内容やイメージの改善、将来構想の実現あるいは、就職指導強化や学生の就職実績向上活動等、いわゆる生き残り策、危機緩和策の一層の研究が望まれる。

（２）学生の受け入れと学風

ところで、本学の場合、建学の精神の第１に挙げている国際的視野の涵養について、一貫して強調してきているが、英国分校ＣＡＥの運営、留学制度、研修旅行等で、きめ細かく教育実践し、学習や、就職活動に寄与していることは、いうまでもない。しかし、全国的に海外知識憧憬や海外旅行熱の高まりがみられるので、折角の先見的努力が実績の割りには影薄くなる虞れも無しとしない。

また、海外の大学との提携関係も早くから築かれている割りには、他校の例で留学や研修に出向く日本人学生の数が余りにも多くなったので、目立たなくなっている。留学生数の量的拡大より、質的保障という当然の反省はもとより、カリキュラムや教育態勢との関連で、一段の工夫が求められている。

また、外国からの留学生受け入れは、地域性、地理的条件、学部、学科の種類、女子大であること等から、大都会地の実学系の学部、学科並みの可能性は少なく、門戸は開いているが実績に乏しい現状であり、今後の研究課題であろう。その他の、社会性、創造性、行動性等の精神と理念は、随時、随所で教育研究に反映するよう配慮され、校風を形成する核となり、近代的女性像に即した教育内容と、将来を志向した望ましき人間形成が考慮されているが、学生の勉学意欲やモラルの問題、生活指導の方法等で、関係者の努力は大である。

建学の精神を具現する大学自体の努力による、学風や教育研究内容や存在意義の自己検証も自己点検・評価の精神として重要であるが、直接、間接の第３者評

価には、常に敏感であるべきであり、それらを謙虚に受け入れ、反省し熟慮し、積極的な学風の形成に資する努力が望まれる。

（３）教育研究の環境

本学は、戦前や昭和４０年代の大学紛争期の歴史は背負わないが、高等教育大衆化、わが国社会の惰性的推移、人間精神の競争的、功利的価値観形成の影響等のため、安易な気風に流されると同時に、元来の文学部的な自由学風に対して、実践的な取得資格を殊更意識する風潮の弥漫が目に付くことも否めない。従来の純粋な学問のみでは今や世の要請に応えられず、実学的技術や実践知識の取得も重要になり、今や文科系学部とても、学問方法論や、情報化社会の常で数理的、機構システム的技術と無関係ではありえないことはいうまでもない。

また、専門の細分化傾向に対して学際研究、総合学習や高度の教養教育の整備による教育研究を配慮すると同時に、社会の諸機関や企業、地域社会の活動等に連携した共同研究や協力態勢もとられている。学生の各種資格取得の制度的整備や公的資格試験受験の準備教育や便宜供与は、学部固有の性格や学風的特性と平行して大学像を形成しているといえよう。

さらに、平成 10 年度には、大学院・文学研究科、修士課程が設置され、研究教育の一層の高度化、発展、充実が期待される。一方、既存の学科も常に、内部的専攻や学習コースの区分や見直しを心掛け、時代の要請と、学問の複雑化、変化に即応する工夫もなされている。あるいは、図書館や建物、施設等の充実も図られており、電算化に応じて研究室単位の機器の整備、ネットワークに直結したＬＡＮの形成、ホームページの作製等が行なわれている。これらは、内容的にも、設備・器材的にも日常的に点検評価が行なわれ、改革への学内意思の形成と、それに対する協力態勢の成熟に待つところ大である。専攻やコースの検討、教育カリキュラムの改正、教職や福祉関係の資格等の課程認定、毎年の入学試験の見直しや学生募集活動等への精力的な取り組みは、近年ますます輻湊している。

４、教育研究の活性化と将来展望

（１）社会経済情勢と少子化の影響の克服

本学も、発足以来、人事や内容の充実、渉外広報活動の強化、教育研究成果の発揮等の努力により、昭和末期から平成の初期に掛けては、いわゆる右肩上がりの受験生、入学者の増加に対応し、むしろ改善充実を急ぐ状況も現出していたが、全国的に当面は１８才人口の減少は避けられないので、女子の大学進学率の多少の向上があっても、新入生の減少による大学の危機は、切実なものになりつつある。さらにまた、大学審議会の答申等によるまでもなく、わが国の高等教育全体のレベルに対する国際的な批判や、高等教育大衆化に伴う諸問題に対処することは際めて重要であり、それぞれの大学、機関が教育研究内容の充実向上を期しており、大学の自己点検の中心もそれらの点に置くべきであろう。

世界に通用する高度な教育研究、学位の内容の保障等、長期的に改善を図り、入学前、卒業後の教育や社会との連携、さらに、学生生活の指導等を含めて、点検評価すべき事項は非常に多く、たとえば、授業方式や学習評価に関して、厳しい見直しが求められているが、学生による授業評価、教師に対する評価等は、大学全体に対する第３者評価とともに、取り組みの非常にむずかしい問題である。特色のある教育等で、大学の良きイメージを作り上げることも重要であり、大学が、規定の枠での教育研究の実践に留まらず、創造的な発展も求められていることはいうまでもない。

しかし、学生数の減少傾向のなかで、大学存立の競争はますます激しくなり、現状維持の要素と、創造的な要素の背反は、社会全体の変化や、学問技術の革新、高度化に伴う充実と経営上の合理化という切実な問題を生じている。

その際、大学の設置形態の変更や新規学部、学科の開設等は誠に厳しく、それにも関わらず特定分野や、一定地域で新しい他大学の開設もあり、競合し得る内容の現在の学部、学科を維持していくだけでも、本学の長所を明らかにし、適切な広報活動を通じて進学希望者を獲得する必要があり、その裏付けとして教育研

究とその成果の一層の充実を期し、進学や就職等の実績を挙げ、大学のイメージも高めなければならない。

志願者を集めるために、資格取得の道を拡大したり、奨学制度を充実させることも考えられるが、他大学も同様な努力はするのであり、付加価値的なものや、小規模の経済的特典では及びつかないようである。

（2）新たな情勢への対応

本学でも、目下検討している、現代の需要の多い分野である、たとえば、福祉系教育の充実等は、人間関係学科の発展の形で、豊富な経験を生かせる訳であり、現有勢力を基礎にして新しい本学の長所を形成できると考えられる。あるいは、他の部門に関しても社会教育情勢を分析して、今の若者が求める道を把握し、時を移さず機敏に対応するべきであるが、何よりも、大学自体の魅力の向上、実質的な第３者評価に耐える特色の理解と地域社会の期待に対する対応が重要である。そのためには、学生の教育面の効率化や活性化と共に、大学の顔でもある教員の研究活動の活性化も重視すべきである。

また、本学の場合、短期大学卒業者の編入受け入れは継続しているが、社会人入学や外国人留学生の受け入れは、高齢の入学者が過去にあった例を除けば、殆ど実績はなく、それらの志望者の急な発生や増加も期待薄であろうが、将来に備えて受け入れ態勢を研究するべきであろう。

学部、学科の将来計画は設置者の意図や経営思想により、現状改善の施策、あるいは経営維持のための方策に負うところが大であることは否めないが、与えられた条件のもとに学内の世論の形成や、本学の置かれている諸環境や条件の深い理解を進めることは、大学の設置形態は何れであっても、大学構成員の責務にも繋がるといえよう。その意味での協力精神や、管理運営上のスムーズな意思決定や、あるいは事情が許せば、発展的な将来計画も立て得る企画力熟成や、積極的な業務改善や事務運営の工夫には継続的に努力すべきであろう。

III　学部各学科の現状と問題点

1、一般教育・全学共通科目

本学の設立は昭和５６年であるが、旧来の大学設置基準に示された、一般教養科目、外国語科目、保健体育科目の基準に従って、前半２年を専ら教養課程とし、後半２年を専門課程とする授業カリキュラム編成とし、２年次から３年次への進級こそ厳密にいわゆる横割りとしないまでも、履修単位数や必修科目単位取得の条件を設けて、一般教育関係の修得単位が不足する場合は、３年次の専門科目の履修を認めず、一般教育科目の履修を先行させる措置も取っていた。

その後、平成９年度より新カリキュラムを施行する際に、いわゆる楔形単位修得の原則を導入したので、一般教育科目を４ヵ年に亘って履修できるようになり、事情は変わったが、教養科目や基礎科目重視の精神は貫いている。

また、一般教育教員の組織を独立した形で運営するか、その教員を各学科に分属させるかについて、一時期論議されたが、急な変更を望まないゆえに、学科と別に独立の「一般教育担当」という集団、組織を現在も維持している。ただ、新しい学科の構想等の機会に、今後の在り方を検討する必要があるとの意見も可成りある。

また、平成９年の新カリキュラム制定に際して、特に留意した点は、次の通りである。①外国語科目の未修外国語を中国語やスペイン語を加えて増強し、さらに、英語はリーディング、コミュニケーションの科目を立て、かつ必修条件を軽減して履修形態を柔軟化した。②情報処理、情報リテラシイの基礎科目を全員必修とした。③保健体育科目を一般教育の講義科目とすると同時に、スポーツ実習の内容や運営を見なおした。④入学当初の学生に大学教育を受ける基本的な学習能力、学問方法論の基礎知識を涵養するための、少人数のゼミ形式の授業を設け、

基礎演習（後に総合演習）科目として、学科の枠を越えて必修科目とした。　全体として、教養教育の理念と学術基礎教育の精神を尊重し、専門の名において狭い分野に早くから専念する弊害を防ぎ、広い視野と学問的思考力の育成に資することを目差し、語学力や情報処理能力の向上を図った。

さらに、新カリキュラムにおいて全体の語学力の向上を図るよりも、意欲あり、可能性のある学生がより深く、より多様に語学授業を選択し、会話や実用的な言語使用能力を高める可能性を尊重する精神が強調された。しかし、一方では、外国語に興味の薄い学生は、単位数も少しで済み、安易な語学学習で通過してゆくかもしれない。国際性を建学の精神としている裏付けとして、全体の語学学習水準の向上が望ましいところである。

２、英米文化学科

平成５６年度発足当初は、入学者も少数であり、学科建設の過程で学習形式の多様化、ケンブリッジ、軽井沢、ハワイでの語学研修実施、昭和６３年度よりの（国際文科、英米文学、英米語学）３コース分け、英会話教育の改善等の創意工夫がなされ、昭和６３年度頃からの入学者の急増、教職免許法改正に伴う課程変更、科目の手直し等が、矢継ぎ早やにおこなわれ、国際感覚を標榜する大学、学科の方向と、学生受け入れと就職の取り組みは、やや慌ただしい印象を残したかもしれない。

昭和６２年～平成元年度にかけて教員の大幅な増員があり、また、平成３年には、新学科（美学美術史学科）申請に絡んで一般教育への移籍や、新任教員の採

用等の人事移動が目立った。それでも、入学学生の水準の向上や、大学の各施設の充実、学生生活の条件整備等がみられ、乙女の園の雰囲気は明るく、就職の実績も著しく向上した。当学科はわが国の女子高等教育において常に女性の資質、特に英語修得力、会話能力等が女性に有利とみられることから、定番的とされる国際英語教育の場としての揺るぎなき未来が予測され、言語文化、文化史を含む学科の特色を発揮し始めていたのである。

平成７年度から、新しいカリキュラムの検討が始められ、また、平成８年度からＣＡＥへの１年留学、後期の半年留学、夏期７週間研修が始まり、ＬＬ教室の更新、学内ＬＡＮの設置が進められた。

さらに、平成９年度からは、大学院文学研究科設置の構想が浮上し、関連する教員の新採用もあり、学部の新カリキュラム施行に伴い、教育研究環境は整備されたのである。

しかし、この頃から、全国的に女子の大学進学率の向上は、既存の伝統的名称や内容の学科に吸収されるのではなく、実学的、あるいは時世・社会迎合型の新設大学、学科に向けられるという傾向を生じ、女子大生のイメージに密接な教育の場やそれを取り巻く情勢が一変するに至ったのである。

卒業に伴う資格として、教員免許、中学、高校の英語教員は当然といえるが、最近では、英語能力の指標となる、英検やＴＯＥＦＬ，ＴＯＥＩＣが、就職の場合や留学の際に注目されるので、その取り組みが話題になっている。

３、人間関係学科

昭和５６～５９年度の歩みの総括として学科の代表者の記しているところによれば、創立当初より、心理学、社会学、教育学の３専攻を擁し、学生は入学試験時から専攻を選択していた。共通の専門科目、各専攻ごとの専門科目、関連科目からなるカリキュラムを編成し、それぞれの分野から人間関係学を考究する学科の性格を明確にしていた。

入学者数は、当初は多少少なかったが、昭和６１年度に定員を充たすようになり、その後、教員数、用意科目数は、種別の多様化とともに増加の一途をたどり、授業科目もそれぞれ専門性を強調するものが多くなり、また、女子学生の間での心理学ブームや、社会福祉への関心の高まりを反映するようになってきた。昭和６２年度以降は、概して許容される定員超過人数一杯の入学者を受け入れているが、競争率は他の２学科より次第に高くなり、学科として活況を呈しているといえよう。

なお、昭和６２年度から、入学時に専攻を決めず、２年間人間関係学の基礎である共通専門科目を相当単位数履修してから、学生の意志で専攻を決めるシステムに変更された。その後、社会学専攻に社会福祉コースを設け、社会福祉士の受験資格取得を可能にし、情報コミュニティー・コースと２本立てとした。さらに、平成４年度には教育学専攻に、学校教育コースとともに、生涯教育コースを新設し（平成９年度から社会教育コース）、平成５年度からは、認定心理士専門科目を設け、心理学専攻者が認定心理士資格を取得できるようになった。

上記の他、当学科は、教員免許として、中学社会、高校公民科の免許が取れるよう配慮し、図書館司書、学校図書館司書教諭免許取得も可能であるが、社会教育主事、精神保険福祉士受験資格（他学科でも可能）等の資格取得により注目され、時勢に適合した人材育成分野となり、資格を特に強調する受験産業や世間のの注目を浴びるようになったが、この面の社会意識には注意を払わねばならない

であろう。当然、学問本来の目的と実利的な資格獲得は大学教育の内容の保障の面で、相互的に両立すべきであるが、適切な指導、必要な制御が望まれる。

４、美学美術史学科

美学美術史学科は、本学の新たな分野への展開飛躍を期して、学園の歴史を語る建学の精神に呼応し、美や感性を主題とする文系高等教育として平成４年度から開設された。国際感覚とともに女性の感覚や繊細な感受性、器用な創造性等の資質を求め、単なる性格陶冶や優雅な生活感覚に留まらない、積極的な美意識の形成や、美的な芸術作品や文化財の深い理解、美的センスを活かした社会活動のできる人材育成を目的とするものである。

学科は、専攻やコースの細分化をせずに、広く、自由な学習を本旨とし、哲学、歴史を基盤とする分野に諸芸術論を加え、科学方法論や情報処理等の現代的な学術訓練も取りいれた、柔軟で多様な教育内容とした。

ところで、そのような精神や女性の新しい活動分野開拓の趣旨が活かされているかどうか、いままさに反省をこめて点検評価が求められている。現代において、功利的に走りがちな風潮を超越して、人類の最も輝かしい文化の所産を、文化創造の精神や人間能力の開発を軸としてし考究するという目的が直接活かされれば、学科の教育方針としてはある程度満足できるはずであるが、学問として、趣味的で厳密性を欠くかのごとき周囲の無理解や、あるいは、作品制作に比して魅力が無いとの偏見に悩まされることが多い。

開設以来、美学・芸術学、日本・東洋・西洋・比較の各美術史、建築・建築史、デザイン関連の人間工学、心理学に専任教員を配し、同類の他大学より豊富なス

タッフを揃えたはずであるが、その後、転出者が生じて弱体化したり、上述のように、芸術大学、美術学部との比較で十分理解されないという事情があり、芸術大学、美術学部の亜流、あるいは、作家志望でありながら自信の無い者が流れ込むとみられる懼れがあった。

卒業後の進路に関して、博物館学芸員資格取得が強調されたが、実際の就職実績は多くなく、就職指導もやや低調にならざるをえなかった。また、教員免許や図書館司書等の資格も取れるが、就職は困難が多いようであり、実際、学科の特色につき十分に世間の理解を得られないうちに、景気停滞による就職困難な時世となり、入学志願者も減少傾向になった。

上のような就職や学生募集の危機に対処するため、平成１２年度よりは美学芸術学理論、芸術史、芸術表現の３コースに分けて、理論と、歴史と、実技のいずれにも対応できる体制にすることが計画されている。

５、大学院文学研究科の運営

１）大学院設置に関して

大学学部発足以来の発展、充実の念願でもあったが、建学の精神をより一層発揮した特色ある女子教育の充実、高度化を図り、社会の要請にも応えるべく，現学部の専門領域の上に、高度の研究者的資質や専門的職業に適した人材養成を目的とした、大学院修士課程を設置する事が計画された。当然学部の３学科に連動することが望まれたが、内容的に条件を満たしながら、当面、英米文化専攻、人間文化専攻の２専攻からなる入学定員１５名の文学研究科修士課程を申請し、平成９年１２月に認可を受け、平成１０年４月、第１期生が入学して発足した。

2）大学院初年度の運営と将来の問題

大学院は、初年度こそ募集時期等の関係からか、定員を満たし得なかったが、大学院のスタッフとして補強された教員の参加もあり、同年４月より順調に運営されている。学部棟に連ねた大学院専用の建物も建て、情報関連の設備等も備えて、研究環境は良好である。

今後の課題は、設置の主旨を生かし教育研究が活性化するに足る学生数と質の確保と、修了生の進路も含めた実績と大学院の積極的なイメージ形成が中心となるであろう。研究科委員会による運営と学部との教育研究上の連携に意が注がれているが、目下のところ順調である。

さらに、社会学、福祉学関係の学科増設、再編成に合わせて新たな専攻を計画するか、人間文化専攻を、関係学科からの進学がスムーズに運ぶように再編成、あるいは強化を図るか等が今後の検討課題である。

６、学科等共通の問題

1）語学教育の問題

本学においては建学の精神から特に国際性が強調され、英国に自前の語学学校ＣＡＥを直属のケンブリッジ分校として運営しており、本学の学生は色々なレベルや期間により語学研修が受けられる。

英国留学生制度（英語特別奨学生制度）による派遣学生の成果は顕著なものがあり、また、英米文化学科の学生のみならず、全学科の学生が夏期の短期語学研修に参加でき、さらに授業料を免除あるいは優遇する、半年、一年の語学留学の道も開かれているので、本学の校風形成に大きく寄与しているのである。上記留学の出発前には、ネイティヴ・スピーカーの外人英語教師が事前の研修を行なう等の配慮もなされている。かつては、米国ハワイにおいても短期語学留学を行っ

ていたが、現在は休止している。

他に、軽井沢に研修会館を所有し、毎年主として夏期に外人教師とともに合宿形式の語学研修が実施されている。

従って、英語中心の現地学習の便宜は充実しているが、英米文化学科で意欲のある学生以外は、英語、あるいは外国語修得の環境が、現状で良いかどうか幾つかの問題があると考えられる。　また、英語は国際語としてあらゆる分野の国際学会や文化活動や商取引でも、専門的に活動するには不可欠であるから、学科の別なく語学力の教育が必要と思われる。

一般に女性は語学に強いといわれ、本学の建学の精神に照らしても、新カリキュラムで語学教育の活性化を図っている精神も理解され、全体的に外国語に強くなることが願望される。そうなれば、本学の特色が大いに発揮され輝かしい発展に繋がる訳であり、実践的にも、学術的にも語学力育成の一層の強化が本学の将来の鍵となるであろう。

２）教養教育と専門教育、教員の研究と教育

本学は、先にも述べたように、一般教育の単位数や、科目の配当等、昭和２４年以来の大学設置基準に忠実に従い、実質９人以上の担当教員を一般教育に配し、昭和５７年以降認められた一般教育の基礎的科目の専門基礎教育等への振り替えをせず、平成８年度まで、一般教育３領域計３６単位、外国語１２単位以上、保健体育４単位の基準を守ってきた。

このことが、ある程度教員人事を固定させ、教員数対学生数において余裕のある学科と運営の厳しい学科が存在することになり、教員の専門性と学科の科目の関連で、ある領域に教員の専門が偏り、一人の教員が多数の卒論指導生を指導する例もあった。さらに、教員の任務である管理運営の委員会等の活動に際しても、教員数の多い学科と、少ない学科との差が生じている。

平成９年からの新カリキュラムの検討に際して、専門領域の問題や、各教員の持ちコマ等は配慮し、外国語、情報処理関係、各種資格取得のための科目等は、取得資格の増加や、免許や資格毎の要求基準の高まりや、就職競争の激化の影響で強化された。その際、専門科目のレベルアップが求められると同時に、一方では、いじめの問題や宗教等の絡む人間性や人権の問題等が注目され、幅広い教養や柔軟な思考力を涵養することの必要性から、高度の教養教育が求められるようになった。本学でもその主旨を生かしたカリキュラムがつくられた。

また、福祉系の新学科の構想も練られているので、全学共通科目担当教員の帰属の問題や、専門教育と教養教育のバランスも考慮して、学部一体としての教育研究体制の、合理化、活性化が図られ、望ましい大学教育が築かれることが期待されている。

さらに、教員の専門の研究活動、学会等での実績は設置審査に際して重視されるので、大学として個々の教員の研究の活性化と、必要に応じて共同研究や対外協力も必要である。本学でも、地域との関係で研究協力の実績を上げている教員も相当あり、全国的な活動に参加している教員もある。しかし、文学部であり、地味な基礎的学問にかかわる教員が多く、どちらかといえば、教育熱心な教員の学生指導が生かされ、好ましい教育研究環境を築く傾向にある。教員の審査に際して、教育成果を審査すべきとの声もあるが、その点では憂慮すべき問題はないといえよう。

あるいは、大学生の学力低下が世間で問題とされているが、教養教育と結びついた言語能力や文化的基礎知識の教育は、今後ますます注意して努力せねばならないが、前述の教養と専門、研究と教育の両立という観点で、全学あげてレベルの向上、教育内容の充実を図るべきである。

大学院が開設され、ますます要求の高まる学術研究や、学際的研究の充実を図り、学風や特色を築かねばならないが、この際も、学部教育と大学院教育との一体化、基礎部門と応用部門の結びつきには特に留意すべきであろう。

ＩＶ．学生受け入れ

１．学生募集活動の経過、現状について

（１）学生募集活動の取り組み

学生募集活動は、センター試験を始めとする国公立大学の度重なる入試制度の影響や、私立大学の熾烈な新設、改組、生き残り競争という困難な社会状況の中で、本学の建学の精神を確認し、教育の理念や目的を確立するという観点から、関係者の情勢分析に基づいて適切で迅速な対応がなされてきた。具体的な学生募集活動として、大学見学会、大学展、進学説明会、高校訪問、受験雑誌や新聞などに対する渉外広報活動が実施されてきた。これらの募集活動は、創設初期の情熱や建学の精神を発揮することに対する意思統一に裏付けられたものと考えられる。

（２）入学試験の計画と実施

入学試験の実施について、受験生の動向や社会状況を分析し、適切な試験方法、試験科目、ユニークな選抜方法などを追求しながら、出題、採点、集計、試験監督、連絡事務のすべてに渡って、全学を挙げた協力体制をとり、動員人数の不足を克服して乗り切ってきた。しかし、入学試験そのものが複雑になり、また、秘密保持の必要もあって、一般教職員には、管理、運営の責任体制や各担当部局が周知されにくく、責任の所在がわかりにくいとの指摘があり、改善が図られた。

（３）入試実施委員会の設置

社会の激しい監視の下では、入学試験の円滑で公正な運営を図るためには、大

学の責任者による管理体制が不可欠であると共に、秘密を守るために入試問題や出題採点者は公表されないのは当然のことである。そこで、入学試験の実施を総括する責任体制を確立するため、学生部長を長とする入試実施委員会が設置されることが望ましいという提言を行い、その提言のもとに平成５年度から入試実施委員会が設置され、入試を総括することとなった。

（４）入学者選抜と合否判定の手続きについて

入学者の合格判定に際して、主任教授会における合否判定の審議、教授会での合否決定手続きや判定資料について、事前に学科やコースの情勢に応じた説明や検討の機会を持つことが望ましいとの意見が出された。これは、学科、コースに適した学生を入学させたいという教員からの強い要望によるものである。このような要望に基づき、各学科から選出された委員によって構成される入試実施委員会で合否の原案作成がなされることとなった。

２．最近の本学入学試験に関する諸問題

（１）学科、コースの専門性に関する問題

入学後に直接指導に当たる学科専任教員から出された要望である学科、コースの特色を生かした入学者選抜を行いたいという提言に基づき、学科の意向を重視した選考がなされている。平成６年度より実施された推薦試験Ａ方式の基礎テストにおいて、英語の得意な学生を集めたいという英米文化学科の意向で、英米文化学科では英語が必須、人間関係学科と美学美術史学科では国語と英語から１科目選択という形態が採られた。なお、平成１２年度から推薦入試に大幅な変更が行われるが、英米文化学科における基礎テストでは英語の必須は維持されている。

また、平成９年度より導入されたセンター試験利用入試でも、英米文化学科では外国語（英語）が必須とされている。今後、人間関係学科、美学美術史学科の両学科においても、学科の専門性を考慮に入れた選考を検討する必要がある。

（２）推薦入学制度の改善

推薦入試では、平成６年度より基礎学力テストを課すＡ方式、小論文と面接を課すＢ方式の２方式が採られてきた。しかし、いずれの方式とも評定平均値を点数化して合否の判定に用いられるために、出願基準ぎりぎりの受験生にとって出願を見合わせるケースがあり、出願数が頭打ちになることが危惧された。そこで、平成１２年度より評定平均値を点数化するＡ方式（評定平均値と面接の合計点で選考）、Ｂ方式（評点平均値と小論文）、Ｃ方式（評定平均値と基礎テスト）に加え、評定平均値を選考内容に加えないＤ方式（面接と小論文）、Ｅ方式（面接と基礎テスト）が新たに設けられた。

また、本学を第１志望とする優秀な受験生を確保するために、平成１０年度より英米文化学科と美学美術史学科では指定校推薦が導入され、平成１２年度入試からは人間関係学科でも実施されることとなった。さらに、平成１２年度より３学科共に自己推薦制度が導入され、特技や実績を重視した入試選考が検討されている。なお入学者の成績追跡調査も必要不可欠であり、実施が検討されている。

（３）面接を重視した選考

推薦入試において平成６年度から面接の点数化を始めたが、１２年度入試における一般推薦Ａ、Ｄ、Ｅの各方式、及び自己推薦、スポーツ推薦とも、面接を重視した選考ができるように、合否における面接の比重を５０％とした。今後、面接の点数化に加えて、面接の形態や内容に関して検討が必要であると思われる。

（４）推薦入試募集人数枠の再検討

平成１１年度まで推薦入試での募集人数は入学定員の３割とされていたが、文部省指導による推薦入学枠の規制変更で５割まで可能になった。この規制変更に伴い、本学では合格倍率の平準化を目指し、募集定員枠の見直しを行い、平成１２年度の一般推薦は募集定員全体の４割とした。また、出身高等学校長の推薦書を必要としない入試（推薦入試枠外）として、募集定員全体の１割を特別推薦（自己推薦、スポーツ推薦）枠として設定した。この各募集枠の設定が妥当であるかに関して、平成１２年度の入試結果と他大学の動向を踏まえての検討が必要であろう。

（５）入学試験の会場、試験回数並びに試験時期の問題

受験者数の動向や合格者に対する入学手続き者の比率などの推測による見通しは極めて流動的である。地方試験会場の設置や試験回数の増加などによる試験形態の多様化に対する計画は緻密に実行されている。しかし、１８歳人口の減少期に入り、実施計画を立てるのがますます難しくなっている。このような状況に対する対策として、受験生側の受験機会の複数化が必要である（平成１２年度入試で一部対応）。

（６）社会人入試、帰国子女と留学生の受け入れ

平成１０年度より、社会人特別選抜、帰国子女特別選抜、外国人留学生特別選抜試験が導入された。しかし、平成１０、１１年度ともこれらの特別選抜に対しては受験者がいなかった。今後、これらの特別選抜の試験方法や募集活動について検討、立案が必要である。

３．今後検討すべき問題

1）大学教育、高等教育に関する社会情勢の把握

大学側として入試のあり方や適切で効率的な入試の運営について検討する一方、市場調査的な観点と社会へのサービスの側面から、高校側や受験生の事象に関する適切な把握や分析も重視されなくてはならない。受験産業やマスコミのデータを利用することは、偏差値の問題などもあり、教育的に考慮すべきである。しかし、現在の日本の大学では、欧米と異なる学生募集の事情もあり、社会に責任のある大学の使命として、受験産業との節度ある協力を積極的に研究し実践すべきであろう。

（2）学生受け入れに関する将来構想と広報活動

１８才人口の減少期に入り、大学の生存競争は必至と考えられ、情勢の変動に対する機敏な対応が必要である。また、将来を予測した対策や将来の学園構想に関する検討を、本学の存在と社会への貢献の実績に裏付けられた形で示す必要がある。

特に、受験生や学生の求める大学のイメージに留意し、そのイメージに相応した内実を形成し、それを適切にＰＲする努力が大学存立の大きな要素となりつつあると言えよう。

（3）大学のイメージの形成と向上

大学のイメージは、ネーミング、設置形態、学部学科名、キャンパスの所在地、施設の実体、取得資格・免許、就職状況、学生活動の社会的評価、スポーツなどの実績、教授陣の充実度、研究体制などの総合的な観点から形成される。しかし、これらの要素をすべて満たした大学はそれほど多くはないであろう。したがって、大学に対する有効なイメージを形成するためには、社会の評価や評判、反応を注視する必要がある。また、高等教育を担う責任と将来への発展という視点を持っ

て、積極的にイメージの形成に努力することが必要である。

（4）本学の特色の発揮

今後、学部学科やコースなどの充実と将来の増設構想により、本学の特色がさらに発揮されることが望ましいことは言うまでもない。現状における教育と学生活動の活性化、建物や設備の充実、社会活動への協賛などによる特色の発揮は現在でも評価を得ているが、関係する委員会の整備などの学内的な合意が形成されることに対して一層の促進が望まれる。

本学のケンブリッジ校、語学研修制度は、早くから世間に知られて特色の発揮に貢献している。しかし、最近では競合する他大学でも、外国語教育の全体的充実、魅力的なカリキュラムの開発、国際的視野の育成に資する研修旅行などの行事は盛んになっており、本学のイメージを高めるためにもさらに工夫が望まれる。

（5）女子大学の存在意義と卒業後の進路についての検討

本学は、建学の精神やその歴史から女子教育の理想像を標榜してきた。国内的にも国際的にも女子大学は、盛衰こそあれ、依然として多数存在しているという事実を考えると、女子大学としての充実や実績の累積によって世間に貢献するための努力を続けることは当然のことである。その点で、女子の社会進出や職業の開拓をしないで、学内教育だけの女の園の維持では、女性にとっての魅力ある大学とはなり得ないであろう。創造性、社会性、感性を重視するという理念は適切なものである。本学が女子の特技や性格を発揮するのに有利な学科や科目が設けられていることから、語学、心理学、福祉、美学などの女性に適した専門性を追求し、理念や精神の一層の徹底を図るべきであろう。

（6）学生の取得資格・免許の可能性

現在、英米文化学科では英語科教員免許、図書館司書、人間関係学科では社会

科関係教員免許、社会教育主事、社会福祉士受験資格、図書館司書、美学美術史学科では社会科関係教員免許、学芸員、図書館司書などの資格・免許がそれぞれ取得ができる。これらの取得資格・免許について拡充や見直しが必要であるかどうかを検討すべきであろう。

（７）平成１１年度においては、筆記試験科目は国語、英語、社会科（日本史、世界史、地理）、小論文の中から設定され、推薦試験では面接も科されていた。平成１２年度からは、社会科の選択者が少ないなどの理由から、選択科目から社会科が削除されたが、受験科目数が適切であるか、受験者にとって受けやすいか、出題・採点体制に問題がないか、小論文が適切であるかなどについて29も検討が必要である。

また、本学でも平成１０年度入試より大学入試センター試験を導入したが、選考に用いる教科や科目数の是非についての検討も必要となろう。

（８）入学定員の確保と編入定員に関する問題

入学定員と実入学者数については、本委員会や入試実施委員会で決定する事項ではないが、理事長や学長から示された将来計画に基づいた円滑な実施検討方法について、必要であれば検討すべきであろう。さらに、退学者数や休学者数などに関連した総定員計画において、編入者数や編入定員の公示、編入試験のあり方についての継続的な検討も必要であると思われる。

（９）キャンパスライフの問題

現在でも、学生生活、健康管理、クラブ活動、イベント行事、生活指導などについて多様な便宜が図られている。キャンパスライフの享受や生活の便宜なども大学のイメージに関係する問題であるので、遠距離通学者が多いことや地理的な

条件も考え、人的に物的にもさらに充実させるように、全学挙げての取り組みが望まれる。

（１０）大学院 文学研究科の学生募集の問題

平成１０年度に開設した大学院 文学研究科 は、初年度は認可時期の関係で平成１０年２，３月に入学試験を実施した。平成１１年度は、９月と翌年２月に入学試験を行ったが、受験者、入学者は両年とも 定員よりやや少なく、今後の発展が望まれる。関係者は種々募集や広報活動を進めているが、大学全体の支援体制を確立するには、今一段の努力が必要であろう。

V、教　育　課　程

1，設置基準とカリキュラム

元来、大学設置基準に従って、必要カリキュラムが適正に定められているかの審査を受け、大学の学部、学科ごとに大学設置の目的が達成されるよう、教育課程が編成されてきた。本学における一般教育科目、外国語科目、及び保健体育科目は、開学時に示された設置基準と建学の精神や設置目的の整合を図るべく十分な内容を保つものであった。

しかし、平成３年度からの設置基準の大綱化に沿って教養教育の見直し機運が生じたまさにそのとき、美学美術史学科設置の申請が行われ，その完成年度、平成７年度までは改革の提言はあっても差し控えられていた。

その間、各学科で多少の手直しや、また充実改善を論議しても、学部全体の観点から、一般教育以外の各専門科目も互いに連動するところが多く、抜本的な改革は困難であった。

その後、大学教育をめぐる情勢の変化や、入学学生の志望、卒業後の進路等の変動を考慮した、カリキュラムの改革を急ぐ学内世論の高まりもあり、平成６年度より検討に着手し、まず、大学全体の「カリキュラム委員会」が組織され、さらに３学科と一般教育担当者からなる「カリキュラム小委員会」を設けて、改革の審議に入り、次節で示すようなカリキュラム改革が決定され、平成９年度から実施されることになった。

2，カリキュラム改革について

カリキュラムの改革にあたっては、それまでの一般教育科目の改変について、東海女子大学の建学の精神を、今日の社会が激しく変革するところに対応するべ

く大学教育の中でどのようにしたら実現することができるかについてもっとも心を砕きながら検討し、改革に取り組んだ。

3，全学共通科目の新カリキュラム

在来、一般教育と称されていた課程と教育内容は、新カリキュラムでは、全学共通科目と呼称されることになり、学科に並ぶ教員組織を維持し、専門教育との有機的な連携を尊重し、新たな体制を取ることになった。

まず、それまでの一般教育科目の中から、次の点を改革の中心にすえた。

1．　少人数教育の実現

2．　すべての科目を半期、２単位を基準にする

3．　開講年次の指定をのぞく

4．　全学共通科目を人間・社会、文化・芸術、自然・健康の３つの科目群にわける。

5．　基礎科目（基礎演習を含む）、外国語科目、自由科目をおく

１、については、受講生数を５０～６０人を上限として、学生と教員の心の通った授業のできる体制を目指した。実際には１００人を越える受講希望者が殺到する科目もあり、受講調整、あるいは講義のリピート開講で対応している。

２、については、半期１５コマで完結した講義を行うことによって、学生が自由な意志で選択し、受講の可能性をより広げることができるようにした。

３、については、学生は４年間の大学生活を設計し、ゆとりをもって講義を履修することができるようになった。また一つの教室に１～４年までの学生が混在し、教室の雰囲気に緊張感がまし、講義の質の向上につながった。

４、については、それぞれの科目群の４科目８単位以上を必修とし、幅広い履修を可能とした。

５、については、スポーツ実習Ａ，Ｂ、半期１単位を２単位必修とし、情報処理Ａ，Ｂ，Ｃを半期１単位の科目とし、２単位以上を必修とし、さらに基礎演習科目Ⅰ、Ⅱをそれぞれ２単位として４単位を必修とした。外国語科目はそれまでの英語、ドイツ語、フランス語の他に中国語、スペイン語を加え、現代の多様な可能性を実現した。８単位以上を必修とし、ゆとりのある授業体制の中で履修できるようにした。基礎演習は平成１１年度からは総合演習とし、人間としてさらに必要な教養全般と人間形成に必要な教育内容を充実させている。自由科目は学生のニーズに応じて、学生の個性をさらに磨くために開講し、卒業単位としては認めないこととしている。

同時に、各学科においても、抜本的なカリキュラム改正を審議し、受講学年指定の廃止または柔軟化、演習科目の拡充、低学年からの専門科目導入、授業科目の整理、統廃合、時勢に必要な新しい科目の取り入れ、資格関連科目の充実等の観点を生かして、合理化しつつ、かつ内容を高める新カリキュラム作成の取り組み、全学共通科目を基礎とする教養教育の理念と、専門教育の目的や理念との総合を図り、平成９年度から新カリキュラムを施行し、なお、旧カリキュラムからの移行措置を慎重に実施し、教育の質を高めるという大学の責務に応えようとしている。

平成８年度と平成１１年度の学生便覧から全学共通科目の項目を資料として添付する。

4　英米文化学科の新カリキュラム

英米文化学科のカリキュラム上の改正点とその改正理由は以下の通りである。

1）「専門科目」の中の「共通専門科目」を「専門基礎科目」と「専門関連科目」に二分した：

これまでの「共通専門科目」の中には「英作文」や「英会話」のような英語の学力を育成するための科目と、「西洋思想史」、「文化人類学」などのような専門に関連した教養系の科目が混在していたが、それらを各々の内容にしたがって明確に区分した。

2）「専門基礎科目」の中に新しい科目として「英文講読Ⅰ」、「英文講読Ⅱ」、「英文講読Ⅲ」、「英文講読Ⅳ」（以上４科目は半期制２単位の科目で他学科の学生には開放しない）、「発音・朗読・リスニング」、「英作文Ⅱ」、「時事英語」、「スピーチ・ディベイト」（以上はすべて通年制２単位の科目で他学科生にも開放）を設けた：

英米文化学科のどのコースを選択するにせよ、聞く・話す・読む・書くといった様々な英語の技能を高めることは不可欠な条件であり、これまで以上に学生たちが英語の力をつけることができるようにするため、以上の科目を増設した。

なお、従来の「英作文」は「英作文Ⅰ」に、また「英会話Ⅰ」、「英会話Ⅱ」、「英会話Ⅲ」、「英会話Ⅳ」は、より多彩な内容を盛り込めるよう、それぞれ「総合英語Ⅰ」、「総合英語Ⅱ」、「総合英語Ⅲ」、「総合英語Ⅳ」と名称を変更した。

さらに、「英文講読」以外は他学科の学生にも開放したので、これによって「全学共通科目」の「基礎科目」の中の外国語において開設されている英語の科目以外にも、他学科の学生たちが幅広い英語力を身につけることができるようになった。

3）「専門関連科目」には、従来の「共通専門科目」のうち専門に関連した教養系の科目を集め、すべて半期制の科目とし、前期・後期を「Ⅰ」・「Ⅱ」として２単位ずつ修得できるようにした：

「全学共通科目」（外国語を除く）が半期制となるため、それらと組み合わせて前期と後期で無駄なく受講できるよう、「専門関連科目」はすべて半期制の科目とした。

4）コース別専門科目では、まず従来の国際文化コースを英米文化コースという名称に変更した。また、従来の「国際文化概論」を「英米文化概論」と「現代英米事情」の二つに分けた。さらに、これまで国際文化コースにあった「西洋文化史」、「国際関係論」を、「専門関連科目」に移したが、逆にこれまで「共通専門科目」にあった「英国史」、「米国史」、「英米地域研究」を英米文化コースの「コース別専門科目」に移した：

英米文化学科の中に国際文化コースがあるのはおかしいという議論は以前からあったが、今回のカリキュラム改正を機に名称も改正することにした。それに伴って、これまでの「国際文化研究」と「国際文化演習」をそれぞれ「英米文化研究」と「英米文化演習」に改名した。また、「国際文化概論」は「英米文化概論」と改名しただけでなく、より現代の英米文化に密着した内容の講義として「現代英米事情」を新たに分離して開講した。

さらに、これまで国際文化コースにあった「西洋文化史」、「国際関係論」は、その内容から関連領域の科目とした方がふさわしいと判断されたため「専門関連科目」に移したが、反対に「英国史」、「米国史」、「英米地域研究」の３科目は、英米文化コースの専門科目に取り入れた方が、よりコースの専門性を高める事になるとの考えから、こちらに移した。

なお、従来の「英国史」と「米国史」は、より新しい視点からの講義内容にするため、それぞれ「イギリスの歴史と社会」と「アメリカの歴史と社会」に名称を変更した。

5）英米語学コースにおいては「言語学」を「専門関連科目」に移し、その代わりに「英文法特講」を新設した：

「言語学」も、やはり関連領域の科目とした方がふさわしいと判断されたため、「専門関連科目」に移したが、それに代わってより専門性の高い、新しい英文法の講義をするため「英文法特講」を設けた。

また、「英語学各論」はこれまで(1)、(2)と２講座開かれていたが、さらに多様な内容を取り入れてⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの４講座とした。

6）英米文学コースでは「英米文学史概論」と「英詩概論」を、それぞれ「英米文学史」と「英米詩」に名称を変更した:

これらはどちらも、これまでの概論的な位置づけからさらに一歩踏み込んだ専門的な講義内容にするためである。

また、「英米文学各論」はこれまで(1)、(2)と２講座開かれていたが、さらに多様な内容を取り入れてⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの４講座とした。

7）すべての「コース別専門科目」は、演習を除いて他学科の学生にも開放する：

今回の全学的なカリキュラムの改正方針である、「学科間の交流を図り、学際的分野等にも柔軟に対応できるよう」にするため、開放科目とした。

5　人間関係学科の新カリキュラム

平成９年度より実施された新カリキュラムは、平成６年より検討に着手され、ほぼ２年を要して議論し、その後実施された。まず大学全体の「カリキュラム委員会」（三平和雄委員長）が組織され、更に３学科からなる「カリキュラム小委員会」（岡本重温委員長）を設置し、ワーキング・グループ、学科会議、心理学・社会学・教育学の研究室会議で議論を重ね、それを全体会議へとフィードバックしていくという手法がとられた。

「カリキュラム小委員会」で審議される議題が取りまとめられ、人間関係学科としては、特に教養科目の改革、専門科目の改革、半期制、コースの改革が列挙された。

この「小委員会」（１９９５．５．３１）では、その共通認識として以下の意見が集約された。

①　各学科に共通する一般教育のカリキュラムの改革を審議し、それとの連動で、各学科で用意されている専門科目のカリキュラム改革を検討、審議する。

②　これまでの「一般教育」と「専門教育」と大別されてきたのを見直し、再編成し、合理化して、「教養教育」と「専門教育」にする。更に基礎専門、共通科目、語学などの少人数教育、情報処理などを包括する「基礎教育」部門を加え、「教養教育」、「基礎教育」、「専門教育」の３本建てとして編成する。

③　上記の３本の教育は、原則として１年次より４年次にわたってカリキュラムが編成される。各部門の垣根をできるだけ低くし、習得順序を除けば、履修学年の自由化、学科間の相互の乗り入れ、自由選択の単位数を多くする。また卒業単位数を抑え、意欲のある学生が目的に応じて外国語などを多様に、時間数も多く履修できるように配慮する。

④　「教養教育」のカリキュラムは、教養ゼミなどを導入し、これまでの一般教育のみならず、各学科の教員の専門性を活用し、広くバランスの取れた科目を構築する。学生がそれらの科目を自由に選択できることを基本とする。

これらの審議の議題と関連しながら、また人間関係学科の独自の議題をも加えながら、人間関係学科の審議事項として、以下の６点が挙げられた。

①　半期制の問題

②　人間関係学科の専攻決定の時期の問題

現在は、３年次から専攻決定を実施しているが、専門教育の繰下げ、専門意識の明確化のはかるため、２年次から専攻を決定させることが必要である。

③　専門教育科目の充実と一般教育科目の縮小の問題

大学教育における専門性を強化するために、専門教育科目の充実と一般教育科目の縮小もしくは切り替えの必要性は否定できない。

④　一般教育科目の専門教育科目への組み替えの問題

③の問題と関連するが、これまでの一般教育科目のうち、専門教育科目へる組み替え可能な科目の洗い出しを行う。

⑤　卒業に必要な単位数の問題

卒業単位数について、学習の自由度を確保するため、縮小の方向で検討する。科目の多様化を計るとともに、科目名称の平易化を試みる。科目選択範囲の拡大を計る。

⑥　人間関係学科の１年次の科目にゼミを新設する問題

２年次の専攻決定のための準備として１年次から専攻科目のゼミの新設について検討する。

これらの議題について、学科会議や専攻会議を繰り返すなかで結論に達した。それは以下のようである。

① 半期制について

どの科目もすべて半期制にするのか、半期制と通年制を併用するのかについては、議論がなされたが、結局社会福祉の国家試験受験資格取得のためには通年制が必要であり、半期制と通年制とを併用することとした。

② 人間関係学科の専攻決定時期について

専攻意識を明確にするため、これまでの３年次での決定を２年次に行う。そのために、専門教育科目を１年次においても開講する。

③ 専門教育科目の充実と一般教育科目の縮小について

一般教育科目（３６単位）、外国語科目（１２単位）、保健体育科目（４単位）で合計５２単位必修となっていたが、これを合計で４０単位に縮小する。（詳細は全学共通科目を参照のこと）

専門教育科目は、８６単位と充実する。

④ 一般教育科目の専門教育科目への組み替えについて

これまでの一般教育科目のうち専門教育科目へ組み込む科目としては、「医学一般」、「看護学」などである。

逆に、専門科目を１年次において開講する。たとえば従来の「人間関係各論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」はその名称を「心理学的人間関係論」、「社会学的人間関係各論」、「教育学的人間関係論」と変更し、１年次において開講する。

⑤ 卒業に必要な単位数について

従来の卒業単位１３６単位を１２６単位と１０単位少なくする。これによって学生の学習の負担を少なくし、自由度を高める。

⑥ 人間関係学科の専門教育ゼミを新設することについて

人間関係学科の専門教育の基礎教育として、「基礎ゼミ」を設ける。これによって、１年次から４年次までの一貫したゼミ教育が可能となる。

以上が人間関係学科の新カリキュラムの編成の過程である。その結果として、以下のような図表の資料として完成されることとなる。

6　美学美術史学科の新カリキュラム

美学美術史学科も全学共通科目の新カリキュラム編成、それを基礎にした他の２学科における新カリキュラムと同様に、つぎの通りの基本方針で、新カリキュラムの改正を計画し、全学の検討審議に合わせて平成９年度から実施した。

① 各学科に共通する一般教育のカリキュラムの改革を審議し、それとの連動で、各学科で用意されている専門科目のカリキュラム改革を検討した。

② これまでの「一般教育」と「専門教育」に大別されてきたのを見直し、再編成、合理化して、「教養教育」と「専門教育」にする。更に基礎専門、共通科目、外国語学などの少人数教育、情報処理などを包括する「基礎教育」部門を加え、「教養教育」、「基礎教育」、「専門教育」の３本建てとして編成する。

美学美術史学科は、平成４年に開設されたが、当初から、専攻やコースに細分化しないで、学生が自由に希望するテーマを選んで、美的現象や諸芸術について学習できることを主旨とし、特色を形成してきた。また、音楽関係の科目の他は一般教育とは全く独立にカリキュラムが編成されていたので、学科独自の観点による合理化、内容の高度化、融通の利く科目の導入等が求められた。

さらに、最近では、諸芸術や生活関連のデザイン等はますます複雑、多様化し、学生の学習、教員側の研究のいずれにおいても、よりいっそう柔軟な対応が求められるようになり、学習カリキュラムの編成の精神も運用の原則も社会現象や諸芸術の現状に従うことの必要性が痛感されるようになった。

その際、学科の専門科目編成の主要な観点は、基礎的な「概説科目」は必修として、１、２年次の履修とするが、多くの選択科目は２～４年配当として、学年

指定を外したことと、科目の名称を広い概念として種々な内容を盛り込みうるものにしたことにより、用意科目を多様にし、広い視野と専門性を両立させるよう配慮した。また、「演習科目」を２年次から導入し、一部の実技的内容の科目は実技指導との接点を考慮して名称は講義形式を守りつつも、学習の可能性や、扱う内容の多様化を図った。たとえば、情報化時代に対応して、コンピュータ・グラフィックスの比重を高め、内容を随時変更できる芸術論や、映像関連の授業やデザイン関係の授業を強化、多様化した。

本学科の卒業に必要な単位数は、以前は一般教育を含めて１３６単位であったが、今時の改正により、全学共通科目４０単位、学科専門科目８４単位（一部他学科の科目を加えることができる)、合計１２４単位とした。

また、平成９年の新カリキュラム実施と同時に、教員免許取得の課程認定を受け、中学校社会科、高等学校地理歴史科の免許取得に必要な関連科目を整備した。

その後、受験、入学者の減少、学生の学習意識の変化等が見られ、新カリキュラム運営上の工夫の限界が感じられ、さらなるカリキュラム改革の必要性が論議され、学科を３つのコースに分割することが論議された。従って、平成１２年度からは、「美学芸術学コース」、「芸術史コース」、「芸術表現コース」の３本立てとする方針が決まり、目下、カリキュラムの手直しに着手している。

本報告においては、平成９年度改訂の現行カリキュラムを添付する。

教育課程

平成　年度入学者対象

(1)　一般教育科目、外国語科目、保健体育科目

（各学科共通）

授業科目の名称			授業を行なう年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
一般教育科目	人文	哲学	1		4	
		倫理学・宗教学	1		4	
		文学	1		4	
		心理学	1		4	
		音楽	1		4	
		美術	1		4	
		生活美学	2		4	
	社会	憲法・法学*	1		4	*（日本国憲法2単位を含む） 3分野よりそれぞれ3科目12単位以上必修
		経済学	2		4	
		社会学	1		4	
		教育学	1		4	
		歴史学	1		4	
		地理学	1		4	
	自然	数学	1		4	
		統計学	1		4	
		物理学	2		4	
		化学	1		4	
		生物学	1		4	
		生活科学	1		4	
		医学一般	2		4	
		看護学	2		4	
		情報処理	2		4	

授業科目の名称			授業を行なう年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
外国語科目	第Ⅰ外国語	英語Ⅰa	1	2		
		英語Ⅰb	1	2		
		英語Ⅱa	2	2		
		英語Ⅱb	2	2		
	第Ⅱ外国語	独語Ⅰa	1		2	英米文化学科は独語Ⅰa, Ⅰb, Ⅱ又は仏語Ⅰa, Ⅰb, Ⅱの3科目6単位必修 人間関係学科および美学美術史学科は独語Ⅰa, Ⅰb, 又は仏語Ⅰa, Ⅰb, の2科目4単位必修
		独語Ⅰb	1		2	
		独語Ⅱ	2		2	
		仏語Ⅰa	1		2	
		仏語Ⅰb	1		2	
		仏語Ⅱ	2		2	
保健体育科目		保健講義	1	1		
		体育講義	1	1		
		体育実技Ⅰ	1	1		
		体育実技Ⅱ	2	1		

別表　教育課程

(1)　全学共通科目

		授業科目名	登録科目名	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
共通科目	人間・社会	日本文化論Ⅰ	歴史学A	1・2・3・4		2	8単位以上必修
		日本文化論Ⅱ	歴史学B	1・2・3・4		2	
		女性と法律Ⅰ	法律学A	1・2・3・4		2	
		女性と法律Ⅱ	法律学B	1・2・3・4		2	
		人間理解の心理学	心理学A	1・2・3・4		2	
		記憶の病理	心理学B	1・2・3・4		2	
		現代の社会学Ⅰ	社会学A	1・2・3・4		2	
		現代の社会学Ⅱ	社会学B	1・2・3・4		2	
		学校論	教育学A	1・2・3・4		2	
		治療教育	教育学B	1・2・3・4		2	
		くらしの中の経済学Ⅰ	経済学A	1・2・3・4		2	
		くらしの中の経済学Ⅱ	経済学B	1・2・3・4		2	
	文化・芸術	人生と哲学Ⅰ	哲学A	1・2・3・4		2	8単位以上必修
		人生と哲学Ⅱ	哲学B	1・2・3・4		2	
		倫理と宗教Ⅰ	倫理学A	1・2・3・4		2	
		倫理と宗教Ⅱ	倫理学B	1・2・3・4		2	
		ことばと人間	言語学A	1・2・3・4		2	
		ことばと社会	言語学B	1・2・3・4		2	
		イギリス文学Ⅰ	文学A	1・2・3・4		2	
		イギリス文学Ⅱ	文学B	1・2・3・4		2	
		音楽と人間	音楽A	1・2・3・4		2	
		音楽と社会	音楽B	1・2・3・4		2	
		近代絵画	美術A	1・2・3・4		2	
		現代彫刻	美術B	1・2・3・4		2	
		衣の生活美学	生活美学A	1・2・3・4		2	
		住の生活美学	生活美学B	1・2・3・4		2	
	自然・健康	生活と物理学	物理学	1・2・3・4		2	8単位以上必修
		環境汚染と人	化学A	1・2・3・4		2	
		エイズ・ガンの生化学	化学B	1・2・3・4		2	
		地球環境と生物進化	生物学A	1・2・3・4		2	
		遺伝子の行動	生物学B	1・2・3・4		2	
		身近な数学	数学	1・2・3・4		2	
		家庭の医学Ⅰ	医学A	1・2・3・4		2	
		家庭の医学Ⅱ	医学B	1・2・3・4		2	
		現代スポーツ論	運動・スポーツ論A	1・2・3・4		2	
		女性のためのスポーツ生理学	運動・スポーツ論B	1・2・3・4		2	

	授業科目名	登録科目名	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
基礎科目	スポーツ実習A	スポーツ実習A	1・2・3・4	1		2単位必修
	スポーツ実習B	スポーツ実習B	1・2・3・4	1		
	情報リテラシーA	情報処理実習A	1・2・3・4		1	2単位以上必修
	情報リテラシーB	情報処理実習B	1・2・3・4		1	
	情報リテラシーC	情報処理実習C	1・2・3・4		1	
	総合演習Ⅰ	総合演習Ⅰ	1	2		4単位必修
	総合演習Ⅱ	総合演習Ⅱ	1	2		
外国語科目	英語（リーディング）A	英語（リーディング）A	1・2・3・4		1	英米文化学科・美学美術史学科は外国語科目全体の中より8単位以上必修 人間関係学科は英語（リーディング）A～D 4単位必修、他の外国語科目の中より4単位以上必修
	英語（リーディング）B	英語（リーディング）B	1・2・3・4		1	
	英語（リーディング）C	英語（リーディング）C	1・2・3・4		1	
	英語（リーディング）D	英語（リーディング）D	1・2・3・4		1	
	英語（コミュニケーション）A	英語（コミュニケーション）A	1・2・3・4		1	
	英語（コミュニケーション）B	英語（コミュニケーション）B	1・2・3・4		1	
	英語（コミュニケーション）C	英語（コミュニケーション）C	1・2・3・4		1	
	英語（コミュニケーション）D	英語（コミュニケーション）D	1・2・3・4		1	
	ドイツ語Ⅰ	ドイツ語Ⅰ	1・2・3・4		2	
	ドイツ語Ⅱ	ドイツ語Ⅱ	2・3・4		2	
	フランス語Ⅰ	フランス語Ⅰ	1・2・3・4		2	
	フランス語Ⅱ	フランス語Ⅱ	2・3・4		2	
	中国語Ⅰ	中国語Ⅰ	1・2・3・4		2	
	中国語Ⅱ	中国語Ⅱ	2・3・4		2	
	スペイン語Ⅰ	スペイン語Ⅰ	1・2・3・4		2	
	スペイン語Ⅱ	スペイン語Ⅱ	2・3・4		2	
自由科目	ヨーロッパからの音楽	ヨーロッパからの音楽	1・2・3・4		2	卒業単位としては認められない
	頭の良い子に育てる条件	頭の良い子に育てる条件	1・2・3・4		2	
	（他）					

(2) 英米文化学科専門科目

	授業科目名	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
専門基本科目	英文講読Ⅰ＊	1	2		＊印は開放科目としない
	英文講読Ⅱ＊	1	2		
	英文講読Ⅲ＊	2	2		
	英文講読Ⅳ＊	2	2		
	総合英語ⅠA	1	1		
	総合英語ⅠB	1	1		
	英作文Ⅰ	2	1		
	英作文Ⅱ	2	1		
	発音・朗読・リスニングⅠ	1～2	1		
	発音・朗読・リスニングⅡ	1～2	1		
	総合英語ⅡA	2		1	6科目以上6単位以上必修
	総合英語ⅡB	2		1	
	総合英語ⅢA	3		1	
	総合英語ⅢB	3		1	
	総合英語ⅣA	4		1	
	総合英語ⅣB	4		1	
	英作文Ⅲ	3		1	
	英作文Ⅳ	3		1	
	時事英語Ⅰ	3～4		1	
	時事英語Ⅱ	3～4		1	
	スピーチ・ディベートⅠ	2～3		1	
	スピーチ・ディベートⅡ	2～3		1	
コース別専門科目 英米文化コース	アメリカの歴史と社会	1～2	4		専攻するコース別専門科目以外に、他コースのコース別専門科目（演習を除く）、専門関連科目、または他学科の専門科目演習を除く）の中より8単位以上を修得すること
	イギリスの歴史と社会	1～2	4		
	比較文化論	3～4	4		
	英米地域研究	3～4	4		
	英米文化概論	2～3	4		
	現代英米事情	2～3	4		
	英米文化研究	4	4		
	英米文化演習Ⅰ	3	4		ただし他学科の専門科目（演習を除く）は4単位まで専門科目の卒業に必要な単位として認めることができる
	英米文化演習Ⅱ	4	4		
	卒業論文	4	8		演習以外を他学科への開放科目とする

		授業科目の名称	授業を行なう年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
専門教育科目	国際文化コース	＊西洋文化史	2	4		さらに他コースの＊印の科目より、各コース2科目8単位、計4科目16単位以上必修
		＊比較文化論	3	4		
		＊国際関係論	3	4		
		＊国際文化概論	3	4		
		国際文化研究	4	4		
		国際文化演習(1)	3	2		
		国際文化演習(2)	4	2		
		卒業論文	4	8		
	英米文学コース	＊英米文学史概論	2	4		さらに他コースの＊印の科目より、各コース2科目8単位、計4科目16単位以上必修
		＊英米文学各論(1)	3	4		
		＊英米文学各論(2)	3	4		
		＊英米文学評論	3	4		
		英詩概論	4	4		
		英米文学演習(1)	3	2		
		英米文学演習(2)	4	2		
		卒業論文	4	8		
	英米語学コース	＊英語学概論	2	4		さらに他コースの＊印の科目より、各コース2科目8単位、計4科目16単位以上必修
		＊英語学各論(1)	3	4		
		＊英語学各論(2)	4	4		
		＊英文法概論	2	4		
		言語学	3	4		
		英語学演習(1)	3	2		
		英語学演習(2)	4	2		
		卒業論文	4	8		

(2) 英米文化学科専門科目

		授業科目名	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
専門基本科目		英文講読Ⅰ＊	1	2		＊は他学科への開放科目としない
		英文講読Ⅱ＊	1	2		
		英文講読Ⅲ＊	2	2		
		英文講読Ⅳ＊	2	2		
		総合英語ⅠA	1	1		
		総合英語ⅠB	1	1		
		英作文Ⅰ	2	1		
		英作文Ⅱ	2	1		
		発音・朗読・リスニングⅠ	1・2	1		
		発音・朗読・リスニングⅡ	1・2	1		
		総合英語ⅡA	2		1	6科目以上6単位以上必修
		総合英語ⅡB	2		1	
		総合英語ⅢA	3		1	
		総合英語ⅢB	3		1	
		総合英語ⅣA	4		1	
		総合英語ⅣB	4		1	
		英作文Ⅲ	3		1	
		英作文Ⅳ	3		1	
		時事英語Ⅰ	3・4		1	
		時事英語Ⅱ	3・4		1	
		スピーチ・ディベートⅠ	2・3		1	
		スピーチ・ディベートⅡ	2・3		1	
コース別専門科目	英米文化コース	アメリカの歴史と社会	1・2	4		専攻するコース以外に、他コースのコース別専門科目（＊を除く）、専門関連科目、または他学科の専門科目の中より8単位以上を修得すること
		イギリスの歴史と社会	1・2	4		
		比較文化論	3・4	4		
		英米地域研究	3・4	4		
		英米文化概論	2・3	4		
		現代英米事情	2・3	4		
		英米文化研究	4	4		
		英米文化演習Ⅰ＊	3	4		ただし他学科の専門科目は4単位まで専門科目の卒業に必要な単位として認めることができる
		英米文化演習Ⅱ＊	4	4		
		卒業論文＊	4	8		＊は他学科への開放科目としない

		授業科目名	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
コース別専門科目	英米文学コース	英米文学史	1・2	4		
		英米文学各論Ⅰ	1・2	4		
		英米文学各論Ⅱ	2・3	4		
		英米文学各論Ⅲ	2・3	4		
		英米文学各論Ⅳ	2・3	4		
		英米文学評論	3・4	4		
		英米詩	4	4		
		英米文学演習Ⅰ＊	3	4		
		英米文学演習Ⅱ＊	4	4		
		卒業論文＊	4	8		
	英米語学コース	英語学概論	1・2	4		
		英語学各論Ⅰ	2・3	4		
		英語学各論Ⅱ	2・3	4		
		英語学各論Ⅲ	2・3	4		
		英語学各論Ⅳ	4	4		
		英文法概論	1・2	4		
		英文法特講	3・4	4		
		英語学演習Ⅰ＊	3	4		
		英語学演習Ⅱ＊	4	4		
		卒業論文＊	4	8		
専門関連科目		言語学Ⅰ	2・3・4		2	6科目以上12単位以上必修
		言語学Ⅱ	2・3・4		2	
		西洋文化史Ⅰ	2・3・4		2	
		西洋文化史Ⅱ	2・3・4		2	
		西洋思想史Ⅰ	2・3・4		2	
		西洋思想史Ⅱ	2・3・4		2	
		西洋宗教史Ⅰ	2・3・4		2	
		西洋宗教史Ⅱ	2・3・4		2	
		西洋芸術史Ⅰ	2・3・4		2	
		西洋芸術史Ⅱ	2・3・4		2	
		国際関係論Ⅰ	2・3・4		2	
		国際関係論Ⅱ	2・3・4		2	
		文化人類学Ⅰ	2・3・4		2	
		文化人類学Ⅱ	2・3・4		2	
		フランス文学Ⅰ	2・3・4		2	
		フランス文学Ⅱ	2・3・4		2	
		ドイツ文学Ⅰ	2・3・4		2	
		ドイツ文学Ⅱ	2・3・4		2	
		日本文学Ⅰ	2・3・4		2	
		日本文学Ⅱ	2・3・4		2	

(3) 人間関係学科専門科目

	授業科目名	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
共通専門科目	心理学的人間関係論＊	1	2		☆より2科目以上4単位以上必修
	社会学的人間関係論＊	1	2		
	教育学的人間関係論＊	1	2		＊は他学科への開放科目としない
	人間関係特論Ⅰ☆＊	3		2	
	人間関係特論Ⅱ☆＊	3		2	
	人間関係特論Ⅲ☆＊	3		2	
	人間関係講読演習Ⅰ＊	2	2		
	人間関係講読演習Ⅱ＊	2	2		
	心理学概論※	1		4	他学科の開放科目を含め、4科目以上16単位以上必修
	社会学概論※	1		4	
	教育学概論※	1		4	ただし、※印の科目のうち2科目以上8単位以上を含むこと
	日本国憲法	2・3・4		2	
	法学	2・3・4		2	
	法律学概論(国際法を含む)	2・3・4		2	
	日本史概論	2・3・4		2	
	外国史概論	2・3・4		2	
	経済学概論(国際経済を含む)	2・3・4		2	
	人文地理学概論	2・3・4		2	
	自然地理学概論	2・3・4		2	
	地誌	2・3・4		2	
	哲学概論	2・3・4		2	
	宗教学概論	2・3・4		2	
	医学一般	2・3・4		4	
	介護概論	2・3・4		2	

心理学専門科目

	授業科目名	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
必修科目	心理学研究法＊	2	4		＊は他学科への開放科目としない
	心理学演習＊	3	4		
	心理学実験＊	2	4		
	卒業論文＊	4	8		
選択科目	実験心理学	1・2・3・4		2	選択科目より9科目以上20単位以上必修
	生理心理学	2・3・4		2	
	発達心理学	1・2・3・4		2	社会学専門の開放科目より2科目以上8単位以上必修
	比較心理学	2・3・4		2	
	精神衛生	2・3・4		2	
	犯罪心理学	2・3・4		2	教育学専門の開放科目より2科目以上8単位以上必修
	性格心理学	1・2・3・4		2	
	データ解析法	2・3・4		2	＊は他学科への開放科目としない
	認知心理学	2・3・4		2	
	社会心理学	2・3・4		2	
	グループ・ダイナミックス論	2・3・4		2	
	幼児心理学	2・3・4		2	
	児童臨床心理学	2・3・4		2	
	青年心理学	2・3・4		2	
	教育心理学	2・3・4		2	
	学習心理学	2・3・4		2	
	学校教育相談	2・3・4		2	
	生徒指導論	2・3・4		2	
	心理療法	2・3・4		2	
	臨床心理診断法	2・3・4		2	
	心理学特殊実験＊	3		2	
	心理学課題研究＊	～4		4	

社会学専門科目

		授業科目名	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
コース共通	必修科目	社会学研究法＊	2	4		＊は他学科への開放科目としない
		社会学講読演習＊	3	4		
		社会調査演習＊	2	4		
		卒業論文＊	4	8		
コース共通	選択科目	家族社会学Ⅰ	2・3・4		2	共通選択科目より4科目以上8単位以上必修
		地域社会学	2・3・4		2	
		産業社会学	1・2・3・4		2	
		社会病理学Ⅰ	1・2・3・4		2	
		女性学Ⅰ	2・3・4		2	
コース別選択科目	情報・コミュニティコース	家族社会学Ⅱ	2・3・4		2	自コースのコース別専門科目より2科目以上8単位以上、他コースのコース別専門科目より1科目以上4単位以上必修 心理学専門の開放科目より2科目以上8単位以上必修 教育学専門の開放科目より2科目以上8単位以上必修 ＊は他学科への開放科目としない
		コミュニティ論	2・3・4		2	
		日本的経営論	2・3・4		2	
		社会病理学Ⅱ	1・2・3・4		2	
		情報社会論	2・3・4		2	
		マスコミ論	2・3・4		2	
		女性学Ⅱ	2・3・4		2	
		情報・コミュニティ実習Ⅰ	2・3・4		2	
		情報・コミュニティ実習Ⅱ	2・3・4		2	
		情報・コミュニティ実習Ⅲ	3・4		1	
	社会福祉コース	社会福祉原論	2・3・4		4	
		老人福祉論	2・3・4		4	
		障害者福祉論	2・3・4		4	
		児童福祉論	2・3・4		4	
		社会保障論	2・3・		4	
		公的扶助論	2・3・		2	
		地域福祉論	2・3・4		2	
		社会福祉援助技術総論	2・3・4		4	
		社会福祉援助技術各論Ⅰ	3・4		4	
		社会福祉援助技術各論Ⅱ	3・4		4	
		社会福祉援助技術演習＊	3・4		4	
		社会福祉援助技術現場実習Ⅰ＊	3		3	
		社会福祉援助技術現場実習Ⅱ＊	4		3	

教育学専門科目

		授業科目名	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
コース共通	必修科目	教育学研究法＊	2	4		＊は他学科への開放科目としない
		教育学講読演習＊	3	4		
		教育調査演習＊	2	4		
		卒業論文＊	4	8		
コース共通	選択科目	教育哲学	2・3・4		2	共通選択科目より4科目以上8単位以上必修
		教育史	2・3・4		2	
		教育社会学	2・3・4		2	
		教育本質論	1・2・3・4		2	
		生涯学習論	1・2・3・4		2	
		教育制度論	1・2・3・4		2	
		障害児（者）教育論	2・3・4		2	
		視聴覚教育メディア論	2・3・4		2	
コース別選択科目	学校教育コース	教育課程論	2・3・4		2	自コースのコース別専門科目より3科目以上8単位以上、他コースのコース別専門科目より2科目以上4単位以上必修 心理学専門の開放科目より2科目以上8単位以上必修 社会学専門の開放科目より2科目以上8単位以上必修 ＊は他学科への開放科目としない
		教育方法論	2・3・4		2	
		学校組織論	2・3・4		2	
		教育経営論	2・3・4		2	
		学校文化論	2・3・4		2	
		教師論	2・3・4		2	
		特別活動論	2・3・4		2	
		道徳教育論	2・3・4		2	
		学校教育課題研究＊	4		4	
	社会教育コース	社会教育論	2・3・4		2	
		社会教育計画論	2・3・4		4	
		社会教育施設論	2・3・4		2	
		学習情報論	2・3・4		2	
		家庭教育論	2・3・4		2	
		幼児教育論	2・3・4		2	
		社会教育課題研究＊	4		4	

(4) 美学美術史学科専門科目

	授業科目名	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
必修科目	美学概論	1・2	4		＊は他学科への開放科目としない
	日本美術史概論	1・2	4		
	東洋美術史概論	1・2	4		
	西洋美術史概論	1・2	4		
	比較美術史概論	1・2	4		
	建築芸術概論	1・2	4		
	専門演習Ⅰ＊	2	2		
	専門演習Ⅱ＊	2	2		
	研究演習Ⅰ＊	3	4		
	研究演習Ⅱ＊	4	4		
	卒業論文＊	4	8		
選択科目〔A〕	美学特講	2・3・4		4	選択科目〔A〕より24単位以上必修
	建築デザイン特講	2・3・4		4	
	日本美術史特講Ⅰ	2・3・4		4	
	日本美術史特講Ⅱ	2・3・4		4	他学科への開放科目とする
	東洋美術史特講	2・3・4		4	
	西洋美術史特講Ⅰ	2・3・4		4	
	西洋美術史特講Ⅱ	2・3・4		4	
	比較美術史特講	2・3・4		4	
	芸術論Ⅰ	2・3・4		2	
	芸術論Ⅱ	2・3・4		2	
	絵画論Ⅰ	2・3・4		2	
	絵画論Ⅱ	2・3・4		2	
	彫塑論Ⅰ	2・3・4		2	
	彫塑論Ⅱ	2・3・4		2	
	染織論Ⅰ	2・3・4		2	
	染織論Ⅱ	2・3・4		2	
	人間工学Ⅰ	2・3・4		2	
	人間工学Ⅱ	2・3・4		2	
	コンピュータグラフィックスⅠ	2・3・4		2	
	コンピュータグラフィックスⅡ	2・3・4		2	
	文芸論Ⅰ	2・3・4		2	
	文芸論Ⅱ	2・3・4		2	
	映像論Ⅰ	2・3・4		2	
	映像論Ⅱ	2・3・4		2	
	音楽論Ⅰ	2・3・4		2	
	音楽論Ⅱ	2・3・4		2	
	デザイン論Ⅰ	2・3・4		2	
	デザイン論Ⅱ	2・3・4		2	
選択科目〔A〕	工芸論Ⅰ	2・3・4		2	
	工芸論Ⅱ	2・3・4		2	
	考古学Ⅰ	2・3・4		2	
	考古学Ⅱ	2・3・4		2	
	色彩論Ⅰ	2・3・4		2	
	色彩論Ⅱ	2・3・4		2	
	視聴覚教育メディア論	2・3・4		2	
	博物館学Ⅰ	2・3・4		2	
	博物館学Ⅱ	2・3・4		2	
	博物館学Ⅲ	2・3・4		2	
選択科目〔B〕	日本史概論	2・3・4		2	選択科目〔B〕及び他学科の開放科目よりあわせて16単位以上必修
	外国史概論	2・3・4		2	
	人文地理学概論	2・3・4		2	
	自然地理学概論	2・3・4		2	
	地誌	2・3・4		2	
	哲学概論	2・3・4		2	
	地理学特講	2・3・4		2	
	地誌特講	2・3・4		2	
	宗教学概論	2・3・4		2	
	生涯学習論	2・3・4		2	

ＶＩ　教育研究組織

１，教員組織

［１］教員組織について

（１）教員の配置

ａ）全学共通科目（旧；一般教育科目）

平成３年の大学設置基準一部改正によると、一般教育専任教員数は従来のように各分野で特定されず、専門学科専任教員の兼担による授業が可能になった。本学では、平成９年度から新しいカリキュラムが導入され、それにともない共通科目（旧；一般教育）の専任教員数は表１に見られるように平成８年度から１０年度にかけて、定年退職や専門学科への移動の結果漸次減少することとなった。大学でのいわゆる“教養教育”は決して軽視すべきではないという観点から、この減少を補充するため平成９年度より専門学科教員による共通科目担当授業の時間数が増加した。

［表　１］　全学共通科目科専任教員数（各年度始めの人数）

		人間・社会（人文）	文化・芸術（社会）	自然・健康（自然）	外国語	基礎科目（体育）	計
平成8年度	教授	3	3	3	1	1	14
	助教授	0	0	1	0	2	
	講師	0	0	0	0	0	
平成9年度	教授	3	2	3	0	1	13
	助教授	0	0	0	0	3	
	講師	0	1	0	0	0	
平成10年度	教授	2	2	3	0	1	12
	助教授	0	0	0	0	3	
	講師	0	1	0	0	0	

［表　２］専門所属教員の教養教育担当教員数

	英米文化学科	人間関係学科	美学美術史学科
平成８年度	6	3	1
平成９年度	１１	6	2
平成10年度	１０	5	1

表２は、専門教員の“教養教育” 兼担教員数の内訳である。旧教育課程の平成８年度では、計１０名であったが、平成９年度では計１６名が共通科目の授業を担当している。

b）英米文化学科

英米文化学科は入学定員１００名（収容定員４００名）で、設置基準では教員数６名（内３以上教授）が必要である。表３のとおり、平成８年度の配置教員数は１４名（内教授７）、平成９年度は配置教員数１６名（内教授９）、平成１０年度は配置教員数１８名（内教授１１）でいずれも基準を満たしている。

［表　3］　　英米文化学科専任教員数

	平成８年度	平成９年度	平成１０年度
教授	7	9	11
助教授	4	5	5
講師	3	2	2

c）人間関係学科

人間関係学科は、「大学設置審査要覧」の「特定学部及び、特定学部の学科についての申し合わせ・人間関係学科の審査方針について」（昭和４０、１０、１１）によれば、「学科の内部を心理学専攻、社会学専攻、教育学専攻に分けることを原則とする」とあり、さらに、「専門教育科目の専任教員数は、各専攻を１学科とした場合に要する教員数の６０％以上とする」とある。当大学には３専攻が置かれていないがそれ相当として、各専攻６Ｘ０，６の４名、（内教授２）、３専攻で、１２名（内教授６）の専任教員の配置が求められる。

平成８年から１０年までの人間関係学科の教員配置は、表の通りである。通常の文学部の学科（定員１００）で求められる専任教員数６はもちろん、前記申し合わせの条件もほぼ満たしている。

〔表　４〕　人間関係学科専任教員数

	平成８年度			平成９年度			平成１０年度		
	心理	社会	教育	心理	社会	教育	心理	社会	教育
教授	4	5	2	3	5	2	3	5	3
助教授	1	1	0	2	1	0	2	1	0
講師	1	0	1	0	0	1	0	0	1

ｄ）美学美術史学科

美学美術史学科の専任教員数は表の通り、平成８年度、８名（内教授７）、９年度、８名（内教授６）、１０年度、７（内教授６）であった。

〔表　５〕　美学美術史学科専任教員数

	平成８年度	平成９年度	平成10年度
教授	7	6	6
助教授	0	1	0
講師	1	1	1

主要学科目は、平成９年度の改訂により、必修の概論科目は８科目となり、原則として専任教員が担当している。その他の選択科目、資格関連科目は。多様になり、選択の自由度が大きくなり、専任教員の他、１名の教育補助者、外部からの非常勤講師により、適切に運用されている。

［２］教員の年齢構成、出身大学

（１）年齢構成

教員の年齢構成は、若年層より高年者まで均等な分布が望ましい。本学の平成８年度より１０年度までの専任教員の年齢構成は表６に見られる。

平成８年より１０年までの３か年とも各学科を通じて２９歳未満の専任教員は不在である。３０歳以上について展望すると、平成８年度は一般教育では、５０～５９歳で、英米文化と人間関係学科では、７０歳以上で、美学美術史学科では、３９歳未満のそれぞれで専任教員が不在である。平成９年度では英米文化で７０歳以上、人間関係学科で５０～５９歳と７０歳以上で、美学美術史学科では３９歳以下で専任教員が不在である。平成１０年度では全学共通科目で６０～６９歳が、英米文化学科では７０歳以上で、美学美術史学科は３９歳未満でそれぞれ専任教員が不在である。

全教員及び各科毎の平成１０年度末での年齢分布比率は表７に見られる。全教員５１名の年齢分布を見ると、４０歳代が１／３を占めその前後の３０歳代と５０歳代が低率になっている。特に５０歳代は全教員の１０％に満たない。

各科毎の比率を見ると、全学共通科目では４０歳代が半数以上を占め、かなり不均衡な分布になっている。英米文化学科では６０歳代が４４％と高い比率を占めているのが目立つ。人間関係学科では、教員数１５名で比較的多人数の学科であるが、５０歳代の不足が顕著である。美学美術史学科は教員数７名（平成１０年度）の少数であるが、３９歳未満が皆無となっており４０歳以上で一応均一な分布を示している。

年齢は年とともに移ろい教員の人事はその学科に不足する専門領域の補充が一義的に重要であるが、今後の人事異動の際に均衡のとれた年齢構成になるよう各科の配慮が望ましい。

〔表　6〕専任教員の年齢分布　　（各年度とも年度末現在）

		20～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60～69才	70～79才
平成8年度	共通		36	43, 44, 46 46, 47, 49		60, 67, 69	70, 70, 72, 72
	英米		33, 35, 35 36, 39	43,, 44, 47, 48	51	60, 61, 61, 67	
	人間		30, 34 36, 39	41, 45, 47 47, 48	53	60, 67, 67 67, 68	
	美学			42, 42 45	53	65, 66 69	72
平成9年度	共通		37	44, 45, 46 47, 47, 48	50	68	70, 71, 73, 73
	英米		34, 36, 36, 37	40, 44, 45 48, 49	52	60, 61, 62 62, 63, 68	
	人間		31, 35 37	40, 42, 46 48, 48, 49		61, 68, 68 68, 69	
	美学			43, 43 46	54	63, 66	70, 73
平成10年度	共通		38	45, 46, 47 48, 48, 49	51		72 , 74, 74
	英米		35, 37, 37, 38	41, 45, 46, 49	50, 53	61, 62, 63 63, 63, 64 68, 69	
	人間		32, 36 38	41, 43, 47 49, 49	50	62, 68, 69 69, 69	70
	美学			44, 47	55	64, 67	71, 74

［表　7］　平成１０年度全教員及び各学科の年齢分布比（%）

	20代	30代	40代	50代	60代	70代
全教員	0	15.7	33.3	9.8	29.4	11.8
共通	0	9.0	54.5	9.0	0	27.3
英米	0	22.2	22.2	11.1	44.4	0
人間	0	20.0	33.3	6.6	33.3	6.6
美学	0	0	28.6	14.2	28.6	28.6

（２）出身大学

専任教員の年度始めの総数は平成８年度と平成９年度はともに５３名（助手２名を含む）平成１０年度は５４名（助手２名を含む）である。平成８年度より１０年度までに出身大学別教員数が３名以上の大学名と人数を年次別に示すと表８のとおりである。その他の大学は１～２名である。

［表　８］　出身大学別教員数

	平成８年度	平成９年度	平成１０年度
京都大学	9	8	8
名古屋大学	8	7	9
筑波大学	5	5	5
早稲田大学	3	3	3
東京大学	3	2	2
東京教育大学	2	3	3

［３］教員配置等の長期計画

大学の将来像と教員の配置計画等を長期的に展望し、教育研究活動の向上・活性化を図る組織的対応が要求される。また、最近の入学試験応募傾向を考慮した長期計画の立案が必要であろう。

［４］教員の採用等

教員の採用・昇格の審査のための具体的な基準・手続きの設定が望まれる。

２、教育研究活動について

［１］教育研究活動

（１）調査書

教員の研究業績を「設置認可申請書」の様式に準じて作成されている。

（２）研究結果の公表・出版

教員の研究業績はそれぞれ所属する学会誌上、あるいは成書として出版または、年１回発行の東海女子大学紀要で公表されている。なお、毎回、本学の紀要の巻末には、専任教員による著書、翻訳、調査報告、学会報告、その他について掲載している。

［２］研究活動の活性化

（１）共同研究

学外（本学短大も含む）との共同研究は平成８年度は６件、平成９年度は８件、平成１０年度は９件である。

（２）科学研究費の受給状況

文部省科学研究費申請を採択された件数は：

平成８年度	個人研究	２	件
平成９年度	同	１	“
平成１０年度	同	１	“

（３）研究交流

ａ）国外への研修等

学内給費または公的給費を受けた学会、研修（引率は除く）は平成８年度は４件、平成９年度は５件、平成１０年度は現在のところ１件である。

ｂ）他大学の教員受け入れ状況

バイオサイエンス研究センターでは、東京大学、岐阜大学の医学部、三重大学の教育学部他，椙山学園，聖徳学園等の中部地区私立大学より研究者を受け入れ学会発表、講演、論文集発行など活発な研究が行われている。

（４）本学の公開講座、地域の共同講座等への参加

平成８年度より「東海女子大学公開講座」として夏・秋季に、毎年約４講座を開設し、聴講料無料で、統一テーマを設け、１年あたり４人の本学教

員が講師となって実施している。１回あたり参加者平均約６０名

また、岐阜市等が主催する地域の各大学共同の講座にも講師を派遣し協力している。「岐阜市リカレント課程・大学公開講座」、「長良川大学」

さらに、岐阜県主催の「国際ネットワーク大学コンソーシアム」が、平成１１年度より開始され本学も参加。

３、教授方法と勤務条件

［１］教授方法の工夫・研究

平成９年度より全学共通科目が一新され、学生の自主的学習を重視して、卒業までの必要単位数を４０単位に減少させ、４年間にわたって修得することを可能にした、また、新しく基礎演習科目が設けられ、少人数教育と学生主体によるゼミ形式の授業が導入された。この科目は入学生全員が前・後期各２単位が必修で担当教員はクラスの指導教員として学生の相談に対応することになっている。一方専門教科になかに入学１年次より修得可能なものをつくり、自発的な学習意欲の向上を図った。

［２］教育活動に対する評価の工夫

学生に対する教育指導が望ましい状況に保たれるための評価の方法として、学生の授業に対するアンケート調査や教員相互による授業の参観等が考えられるが、当大学では実施されていない。

［３］教員の授業担当時間

平成１０年１０月までは専任教員の担当時間数は１０～１２時間（５～６コマ）を標準としていた。この基準で平成１０年度の担当時間数を見ると、ほぼ妥当な範囲内にある。平成１０年１１月より新しい「教員の勤務に関する細則」が施行され、出勤日数については原則として週４日以上、授業時間

数は原則として週６コマを下らないものとされ、授業時間数は本学大学院及び短大の授業を含み役職を兼務するものは軽減できることになっている。

［４］兼職の方針と状況

平成１０年１１月の上記細則により教員が兼職を希望する場合は事前に学科主任が学長を経て学園長に申請書を出し承認されることが必要になった。

４、今後検討すべき課題

・教員組織の適切性

・教育課題編成の実現にかかわる教員間の連絡調整

・教員の人数及び人員の適切な配置

・教員の採用、任免、昇格等の規約

・他大学との単位互換（コンソーシアムを含む）や放送大学利用の是非

・教員の評価方法（年齢、業績、時間割関係）

・専任教員の研究費　：　個人研究費、教員研究旅行費、共同研究費

・　研究室

・研究活動の活性度を検出するシステムの検討

・活性化の方法

・活性化を受け入れる諸条件の整備状況

５、資料

１，平成１０年度教員名簿

２，平成１０年度開講表

３，平成１０年度専任教員の担当授業時間

平成10年度　教職員名簿

全学共通担当

教授	永田　幸雄
〃	川口　豊
〃	近藤　益郎
〃	神谷　和孝
〃	天沼　香
〃	内貴　信夫
〃	大森　正英
〃	高野　卓哉
助教授	川島　大司
〃	關　和真
〃	鈴木　眞理
講師	原田　幸子
兼任	小澤　克彦
〃	井道　玉温
〃	大井　修三
〃	増栄　敦子
〃	安藤　雅夫
〃	山森　姫路
〃	森屋　裕治
〃	片岡　正雄
〃	福住　幸代
〃	野村　敏郎
〃	祖父江　美穂
〃	片岡　由美子
〃	竹中　みち
〃	吉本　和子
〃	棚橋　一雄
〃	日高　意三
〃	王　進生
〃	張　祥国
〃	武藤　祐子
〃	原田　勇彦

英米文化学科

教授	家田　義隆
〃	藤田　一夫
〃	牛島　秀彦
〃	神谷　哲郎
〃	大野　昭英
〃	堀　素子
〃	原田　純
〃	ジョン　ウィリアムズ
〃	樋口　時弘
〃	中尾　祐治
〃	岩崎　宗治
助教授	大野　意一
〃	濱田　美佐子
〃	北山　眞理子
〃	北山　長貴
〃	ジョセフ　スタボイ
講師	富田　理恵
〃	バーバラ　ジョンストン
兼任	枝村　茂
〃	河地　忍
〃	弓削　繁
〃	野元　世紀
〃	廣田　則夫
〃	佐藤　延子
〃	小林　隆夫
〃	國安　昌平
〃	長谷川　渭

司書・その他

兼任	加藤　三郎
〃	佐橋　兼夫
〃	首藤　良一
〃	森下　忠雄
〃	星　融
〃	河崎　博

人間関係学科

教授	宮本　邦雄
〃	生田　純子
〃	矢澤　久史
〃	藤田　弘人
〃	柳生　和夫
〃	校條　善夫
〃	神戸　博一
〃	酒向　一次
〃	白幡　富夫
〃	大西　信行
〃	太田　祐周
助教授	長谷川　博一
〃	小高　良友
〃	大平　英樹
講師	松永　由弥子(育休)
助手	増井　幸恵
兼任	今井　秀周
〃	森田　政裕
〃	小林　月子
〃	楊　良治
〃	林　篤
〃	山田　昭
〃	原　範明
〃	高田　礼子
〃	阪尾　隆司
〃	佐賀　徹哉
〃	加藤　直樹
〃	白幡　久美子
〃	長尾　裕子
〃	小川　克正
〃	森　幸雄
〃	森川　士朗
〃	真栄城輝明
〃	富田　規武
〃	山崎　浩夫
〃	服部　環
〃	梶山　雅史

美学美術史学科

学長	三平　和雄
副学長	岡本　重温
教授	中山　功
〃	清水　善三
〃	藤澤　隆子
〃	岡本　真理子
講師	横山　勢津男
助手	楊本　美代子
兼任	神谷　み柔子
〃	遠藤　恒雄
〃	竹原　誠文
〃	ピーター B. ハーイ
〃	高田　直彦
〃	横井　茂樹
〃	鈴木　基治
〃	高橋　春子
〃	小西　信之
〃	渡辺　利昭
〃	林　英光
〃	山脇　佐江子
〃	丸山　竜平
〃	井上　雅之
〃	古田　真一
〃	宮崎　慎也

事務系

兼	酒向　一次
兼	大西　信行
兼	神谷　和孝
	土屋　陽児
兼	白幡　富夫
兼	矢澤　久史
	後藤　路広
	磯辺　和正
	藤田　秀弘
	丹羽　明美
	村井　善司
	井深　和正
	内田　晩穂
	松尾　美江
	野田　由美子
	村井　千恵
	藤井　智夫
	丹羽　圭子
	佐藤　寿子
	領木　文男
	森　美津子
	辻　圭子
	竹内　瑞枝
	三船　良子
	田上　一夫
	田中　渭一
非	藤原　亜紀
非	高井　琴江
非	伊藤　千明
非	山本　由美
非	堀江　二美子
非	和田　紀子
非	山森　姫路
非	高橋　好信
派	安田　孝司
派	山田　次子

	専任	兼任
全学共通担当	12	20
英米文化学科	18	9
人間関係学科	16	21
美学美術史学科	8	16
司書・その他	0	6
事務系	21	5(8)
計	75	77(8)

大学院文学研究科

英米文化専攻

研究科長	原田　純
教授	堀　素子
〃	樋口　時弘
〃	中尾　祐治
〃	岩崎　宗治
兼任	山本　節
〃	藤平　育子

人間文化専攻

教授	宮本　邦雄
〃	生田　純子
〃	矢澤　久史
〃	白幡　富夫
〃	太田　祐周
〃	中山　功
〃	清水　善三
〃	藤澤　隆子
兼任	上倉　鷹敬
〃	辻　敬一郎

平成１０年度　開講表（平成９年度以降入学者対象）
（１）全学共通科目

区分		授業科目名 ※1	登録科目名 ※2	学年度の時間割補Ⅱ	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前	開講期間 後	開講期間 通	備考
共通科目	人間・社会	日本文化論Ⅰ	歴史学A	○	天沼	1・2・3・4		2	○			8単位以上必修
		日本文化論Ⅱ	歴史学B	○	天沼	1・2・3・4		2		○		
		女性と法律Ⅰ	法律学A	○	神谷（和）	1・2・3・4		2	○			
		女性と法律Ⅱ	法律学B	○	神谷（和）	1・2・3・4		2		○		
		人間理解の心理学	心理学A	○	生田、長谷川（博）	1・2・3・4		2	○			
		記憶の病理	心理学B	○	大井	1・2・3・4		2		○		
		現代の社会学Ⅰ	社会学A	○	神戸	1・2・3・4		2	○			
		現代の社会学Ⅱ	社会学B	○	小高	1・2・3・4		2		○		
		学校論	教育学A	○	大西	1・2・3・4		2	○			
		治療教育	教育学B	○	小川	1・2・3・4		2		○		
		くらしの中の経済学Ⅰ	経済学A	×		1・2・3・4		2				
		くらしの中の経済学Ⅱ	経済学B	×		1・2・3・4		2				
	文化・芸術	人生と哲学Ⅰ	哲学A	○	小澤	1・2・3・4		2	○			8単位以上必修
		人生と哲学Ⅱ	哲学B	○	小澤	1・2・3・4		2		○		
		倫理と宗教Ⅰ	倫理学A	○	井道	1・2・3・4		2	○			
		倫理と宗教Ⅱ	倫理学B	○	井道	1・2・3・4		2		○		
		言葉と人間	言語学A	○	堀	1・2・3・4		2	○			
		言語と社会	言語学B	○	堀	1・2・3・4		2		○		
		イギリス文学	文学A	○	ｳｲﾘｱﾑｽﾞ	1・2・3・4		2	○			
		フランス文学	文学B	○	篠田	1・2・3・4		2		○		
		音楽と人間	音楽A	○	川口	1・2・3・4		2	○			
		音楽と社会	音楽B	○	川口	1・2・3・4		2		○		
		近代絵画	美術A	○	近藤	1・2・3・4		2	○			
		現代彫刻	美術B	○	近藤	1・2・3・4		2		○		
		衣の生活美学	生活美学A	○	神谷（み）・増栄	1・2・3・4		2	○			
		住の生活美学	生活美学B	○	神谷（み）・増栄	1・2・3・4		2		○		
	自然・健康	生活と物理学	物理学	○	安藤	1・2・3・4		2		○		8単位以上必修
		環境汚染と人	化学A	○	永田	1・2・3・4		2	○			
		ｴｲｽﾞ・ｶﾞﾝの生化学	化学B	○	永田	1・2・3・4		2		○		
		地球環境と生物進化	生物学A	○	内貴	1・2・3・4		2	○			
		遺伝子の行動	生物学B	○	内貴	1・2・3・4		2		○		
		身近な数学	数学	×		1・2・3・4		2				
		家庭の医学Ⅰ	医学A	○	原田（勇）	1・2・3・4		2	○			
		家庭の医学Ⅱ	医学B	○	原田（勇）	1・2・3・4		2		○		
		世界のスポーツ	運動・スポーツ論A	○	高野	1・2・3・4		2	○			
		生涯スポーツ論	運動・スポーツ論B	○	高野	1・2・3・4		2		○		

※1　時間割表・成績表には授業科目名で表記される。
※2　成績証明書には登録科目名で表記される。

区分	授業科目名 ※1	登録科目名 ※2	今年度の開講の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
基礎科目	スポーツ実習	スポーツ実習A	○	鈴木（眞）、蘭、武藤	1・2・3・4	1		○	※3		
	スポーツ実習	スポーツ実習B	○		1・2・3・4	1		※3	○		
	ワープロ・表計算	情報処理実習A	○	川島	1・2・3・4		1	○			
	概論・基礎統計	情報処理実習B	○	川島、森屋	1・2・3・4		1	○	○		2単位以上必修
	データベース・CG&CAD	情報処理実習C	○	川島、森屋	1・2・3・4		1	○	○		
	基礎演習Ⅰ	基礎演習Ⅰ	○	※4	1	2		○			
	基礎演習Ⅱ	基礎演習Ⅱ	○	※5	1	2			○		
外国語科目	英語(リーディング)	英語(リーディング)A	※6	大野（憲）、富田（理）、片岡（正）廣田、福住、野村	1・2・3・4		1	○	○		英米文化学科・美学美術史学科は外国語科目全体の中より8単位以上必修
	英語(リーディング)	英語(リーディング)B	※6		1・2・3・4		1	○	○		
	英語(リーディング)	英語(リーディング)C	○		1・2・3・4		1	○	○		
	英語(リーディング)	英語(リーディング)D	○		1・2・3・4		1	○	○		
	英語(コミュニケーション)	英語(コミュニケーション) A	※7	北山（長）、スタボイ、ジョンストン福住、祖父江、片岡（由）、竹中、吉本	1・2・3・4		1	○	○		人間関係学科は英語(リーディング)A～D4単位必修、他の外国語科目の中より4単位以上必修
	英語(コミュニケーション)	英語(コミュニケーション) B	※7		1・2・3・4		1	○	○		
	英語(コミュニケーション)	英語(コミュニケーション) C	○		1・2・3・4		1	○	○		
	英語(コミュニケーション)	英語(コミュニケーション) D	○		1・2・3・4		1	○	○		
	ドイツ語Ⅰ	ドイツ語Ⅰ	○	大野（昭）	1・2・3・4		2			○	
	ドイツ語Ⅱ	ドイツ語Ⅱ	○	大野（昭）	2・3・4		2			○	
	フランス語Ⅰ	フランス語Ⅰ	○	篠田	1・2・3・4		2			○	
	フランス語Ⅱ	フランス語Ⅱ	○	篠田	2・3・4		2			○	
	中国語Ⅰ	中国語Ⅰ	○	王、張	1・2・3・4		2			○	
	中国語Ⅱ	中国語Ⅱ	○	王	2・3・4		2			○	
	スペイン語Ⅰ	スペイン語Ⅰ	○	日高	1・2・3・4		2			○	
	スペイン語Ⅱ	スペイン語Ⅱ	○	日高	2・3・4		2			○	

※1　時間割表・成績表には授業科目名で表記される。
※2　成績証明書には登録科目名で表記される。
※3　半期に2科目を履修する場合、または前期の科目をスポーツ実習Bとして、後期の科目をスポーツ実習Aとして単位を認定する場合は91ページを参照すること。
※4　永田、川口、近藤、天沼、内貴、高野、大森、蘭、大野（昭）、原田（幸）、岡本（重）
※5　永田、川口、近藤、天沼、内貴、高野、大森、蘭、神戸、大野（昭）、原田（幸）
※6　今年度は前期C、後期Dとして開講されるため、AまたはBとして単位認定する場合、あるいは半期に2科目以上履修する場合は98ページを参照すること。
※7　今年度は前期C、後期Dとして開講されるため、AまたはBとして単位認定する場合、あるいは半期に2科目以上履修する場合は98ページを参照すること。

区分	授業科目名 ※1	登録科目名 ※2	今年度の開講の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
自由科目	ヨーロッパからの音楽 頭の良い子に育てる条件 （他）	ヨーロッパからの音楽 頭の良い子に育てる条件	○ ○	川口 永田	1・2・3・4 1・2・3・4		2 2	○ ○	○		卒業単位としては認められない

※1　時間割表・成績表には授業科目名で表記される。
※2　成績証明書には登録科目名で表記される。

（2）英米文化学科専門科目

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講の有無	他学科への開放科目の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間			備考
								諷	觀	薺	
専門基本科目	英文講読Ⅰ	○	×	大野（憲）、北山（眞）、片岡（正）、河地	1	2		○			
	英文講読Ⅱ	○	×	家田、富田（理）、国安、片岡（正）、河地	1	2			○		
	英文講読Ⅲ	○	×	家田、堀、濱田、富田（理）、国安	2	2		○			
	英文講読Ⅳ	○	×	家田、堀、大野（憲）、北山（眞）、濱田	2	2			○		
	総合英語ⅠA	○	○	ウイリアムズ、スタボイ、ジョンストン	1	1		○			
	総合英語ⅠB	○	○	ウイリアムズ、スタボイ、ジョンストン	1	1			○		
	英作文Ⅰ	○	○	ウイリアムズ、スタボイ、ジョンストン	2	1		○			
	英作文Ⅱ	○	○	ウイリアムズ、スタボイ、ジョンストン	2	1			○		
	発音・朗読・ﾘｽﾆﾝｸﾞ Ⅰ	○	○	大野（憲）、北山（長）、ジョンストン	1・2	1		○			
	発音・朗読・ﾘｽﾆﾝｸﾞ Ⅱ	○	○	大野（憲）、北山（長）、ジョンストン	1・2	1			○		
	総合英語ⅡA	○	○	ウイリアムズ、スタボイ、ジョンストン	2		1	○			
	総合英語ⅡB	○	○	ウイリアムズ、スタボイ、ジョンストン	2		1		○		
	総合英語ⅢA	×	○		3		1				
	総合英語ⅢB	×	○		3		1				
	総合英語ⅣA	×	○		4		1				
	総合英語ⅣB	×	○		4		1				6科目以上　6単位以上必修
	英作文Ⅲ	×	○		3		1				
	英作文Ⅳ	×	○		3		1				
	時事英語Ⅰ	×	○		3・4		1				
	時事英語Ⅱ	×	○		3・4		1				
	スピーチ・ディベートⅠ	○	○	篠田	2・3		1	○			
	スピーチ・ディベートⅡ	○	○	ウイリアムズ	2・3		1		○		

区分		授業（登録）科目名	今年度の開講の有無	他学科への開放科目の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前期	開講期間 後期	備考
コース別専門科目	英米文化コース	アメリカの歴史と社会	○	○	北山（眞）	1・2	4			○	専攻するコースのコース別専門科目以外に、他コースのコース別専門科目（演習を除く）専門関連科目、または他学科の専門科目（演習を除く）、の中から8単位以上を修得すること ただし他学科の専門科目（演習を除く）は4単位まで専門科目の卒業に必要な単位として認めることができる
		イギリスの歴史と社会	○	○	富田（理）	1・2	4			○	
		比較文化論	×	○		3・4	4				
		英米地域研究	×	○		3・4	4				
		英米文化概論	○	○	北山（眞）	2・3	4			○	
		現代英米事情	○	○	富田（理）	2・3	4			○	
		英米文化研究	×	○		4	4				
		英米文化演習Ⅰ	×	×		3	4				
		英米文化演習Ⅱ	×	×		4	4				
		卒業論文	×	×		4	8				
	英米文学コース	英米文学史	○	○	岩崎、濱田、国安	1・2	4			○	
		英米文学各論Ⅰ	○	○	国安	1・2	4			○	
		英米文学各論Ⅱ ※	×	○		2・3	4				
		英米文学各論Ⅲ	○	○	片岡（正）	2・3	4			○	
		英米文学各論Ⅳ	○	○	岩崎	2・3	4			○	
		英米文学評論	×	○		3・4	4				
		英米詩	×	○		4	4				
		英米文学演習Ⅰ	×	×		3	4				
		英米文学演習Ⅱ	×	×		4	4				
		卒業論文	×	×		4	8				
	英米語学コース	英語学概論	○	○	中尾、大野（憲）	1・2	4			○	
		英語学各論Ⅰ	○	○	北山（長）	2・3	4			○	
		英語学各論Ⅱ	○	○	廣田	2・3	4			○	
		英語学各論Ⅲ	○	○	河地	2・3	4			○	
		英語学各論Ⅳ	×	○		4	4				
		英文法概論	○	○	河地	1・2	4			○	
		英文法特講	×	○		3・4	4				
		英語学演習Ⅰ	×	×		3	4				
		英語学演習Ⅱ	×	×		4	4				
		卒業論文	×	×		4	8				

※3年生開講の英米文学各論（1）で読み替える。

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講の有無	他学科への講義科目の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
専門関連科目	言語学Ⅰ	○	○	大野（昭）	2・3・4		2	○			6科目以上　12単位以上必修
	言語学Ⅱ	○	○	大野（昭）	2・3・4		2		○		
	西洋文化史Ⅰ	○	○	家田	2・3・4		2	○			
	西洋文化史Ⅱ	○	○	家田	2・3・4		2		○		
	西洋思想史Ⅰ	○	○	小澤	2・3・4		2	○			
	西洋思想史Ⅱ	○	○	小澤	2・3・4		2		○		
	西洋宗教史Ⅰ	○	○	枝村	2・3・4		2	○			
	西洋宗教史Ⅱ	○	○	枝村	2・3・4		2		○		
	西洋芸術史Ⅰ	○	○	近藤	2・3・4		2	○			
	西洋芸術史Ⅱ	○	○	近藤	2・3・4		2		○		
	国際関係論Ⅰ	○	○	小林（隆）	2・3・4		2	集	中		
	国際関係論Ⅱ	○	○	小林（隆）	2・3・4		2	集	中		
	文化人類学Ⅰ	○	○	長谷川（清）	2・3・4		2	○			
	文化人類学Ⅱ	○	○	長谷川（清）	2・3・4		2		○		
	フランス文学Ⅰ	○	○	篠田	2・3・4		2	○			
	フランス文学Ⅱ	○	○	篠田	2・3・4		2		○		
	ドイツ文学Ⅰ	○	○	棚橋	2・3・4		2	○			
	ドイツ文学Ⅱ	○	○	棚橋	2・3・4		2		○		
	日本文学Ⅰ	○	○	弓削	2・3・4		2	○			
	日本文学Ⅱ	○	○	弓削	2・3・4		2		○		

（3）人間関係学科専門科目

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講の有無	他学科への開放科目の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
共通専門科目	心理学的人間関係論	○	○	生田	1	2		○			
	社会学的人間関係論	○	○	校條	1	2		○			
	教育学的人間関係論	○	○	太田	1	2		○			
	人間関係特論Ⅰ＊	×	○		3		2				＊印の科目より２科目以上４単位以上必修
	人間関係特論Ⅱ＊	×	○		3		2				
	人間関係特論Ⅲ＊	×	○		3		2				
	人間関係講読演習Ⅰ	○	○	宮本、柳生、太田、校條、神戸、大西、白幡（富）長谷川（博）、大平	2	2		○			
	人間関係講読演習Ⅱ	○	○	生田、矢澤、柳生、太田、校條、神戸、白幡（富）長谷川（博）、松永	2	2			○		
	心理学概論※	○	○	宮本	1		4			○	ただし、※印の科目のうち２科目以上　８単位以上を含むこと
	社会学概論※	○	○	藤田	1		4			○	
	教育学概論※	○	○	太田	1		4			○	
	日本国憲法	○	○	神谷（和）	2・3・4		2		○		他学科の開放科目を含め、４科目以上　１６単位以上必修
	法学	○	○	神谷（和）	2・3・4		2	○			
	法律学概論	○	○	佐賀	2・3・4		2	○			
	国際法	○	○	佐賀	2・3・4		2		○		
	日本史概論	○	○	天沼	2・3・4		4			○	
	東洋史概論	○	○	今井	2・3・4		2		○		
	西洋史概論	○	○	家田	2・3・4		2	○			
	経済学概論	○	○	神谷（哲）	2・3・4		2	○			
	国際経済論	○	○	神谷（哲）	2・3・4		2		○		
	人文地理学概論	○	○	横山	2・3・4		2		○		
	自然地理学概論	○	○	横山	2・3・4		2	○			
	地誌	○	○	横山	2・3・4		2	○			
	哲学概論	○	○	富田（規）	2・3・4		4			○	
	倫理学概論	○	○	富田（規）	2・3・4		2	○			
	宗教学概論	○	○	井道	2・3・4		2	○			
	医学一般	○	○	大森	2・3・4		4			○	
	介護概論	○	○	山森	2・3・4		2	○	○		

心理学専攻科目

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講の有無	他学科への横断科目の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
必修科目	心理学研究法	○	○	宮本	2	4				○	
	心理学演習	×	○		3	4					
	心理学実験	○	○	宮本、矢澤	2	4				○	
	卒業論文	×	○		4	8					
選択科目	実験心理学	○	○	矢澤	1・2・3・4		2	○			
	生理心理学	○	○	山崎	2・3・4		2		○		
	発達心理学	○	○	宮本	1・2・3・4		2	○			
	比較心理学	○	○	宮本	2・3・4		2		○		
	精神衛生	○	○	真栄城	2・3・4		2		○		
	犯罪心理学	×	○		2・3・4		2				
	性格心理学	○	○	長谷川（博）	1・2・3・4		2	○			
	心理測定・検査法	○	○	服部	2・3・4		2	集中			選択科目より９科目以上
	データ解析法	○	○	服部	2・3・4		2	集中			２０単位以上必修
	認知心理学	○	○	大平	2・3・4		2		○		
	社会心理学	○	○	大平	2・3・4		2	○			社会学専門の開放科目より
	グループ・ダイナミックス論	○	○	大平	2・3・4		2		○		２科目以上　８単位以上必
	幼児心理学	○	○	生田	2・3・4		2	○			修
	児童臨床心理学	○	○	生田	2・3・4		2		○		
	青年心理学	○	○	橋	2・3・4		2		○		教育学専門の開放科目より
	教育心理学	○	○	矢澤	2・3・4		2	○			２科目以上　８単位以上必
	学習心理学	○	○	矢澤	2・3・4		2		○		修
	家族心理学	○	○	真栄城	2・3・4		2	○			
	学校教育相談	○	○	生田	2・3・4		2	○			
	心理療法	○	○	長谷川（博）	2・3・4		2		○		
	臨床心理診断法	○	○	長谷川（博）	2・3・4		2	○			
	心理学特殊講義	×	○		3・4		2				
	心理学特殊実験	×	×		3		2				
	心理学課題研究	×	×		4		4				

社会学専攻科目

区分		授業（登録）科目名	今年度の講義の有無	他学科への開放科目の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 調	開講期間 開	開講期間 薛	備考
コース共通科目	必修	社会学研究法	○	×	神戸	2	4				○	
		社会学講読演習	×	×		3	4					
		社会調査演習	○	×	小高	2	4				○	
		卒業論文	×	×		4	8					
コース共通	選択科目	家族社会学Ⅰ	○	○	神戸	2・3・4		2	○			共通選択科目より4科目以上　8単位以上必修
		地域社会学	○	○	神戸	2・3・4		2		○		
		産業社会学	○	○	神戸	1・2・3・4		2	○			
		社会病理学Ⅰ	○	○	藤田	1・2・3・4		2	○			
		女性学Ⅰ	○	○	天沼	2・3・4		2	○			
		社会学特殊講義	×	○		3・4		2				

区分		授業（登録）科目名	今年度の講義の有無	他学科への開放科目の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 調	開講期間 開	開講期間 薛	備考
コース別選択科目	情報・コミュニティコース	家族社会学Ⅱ	○	○	神戸	2・3・4		2		○		
		コミュニティ論	○	○	神戸	2・3・4		2	○			
		日本的経営論	○	○	神戸	2・3・4		2		○		
		社会病理学Ⅱ	○	○	藤田	1・2・3・4		2		○		
		情報社会論	○	○	校條	2・3・4		2		○		
		マスコミ論	○	○	校條	2・3・4		2	○			自コースのコース別専門科目より2科目以上　8単位以上、他コースのコース別専門科目より1科目以上　4単位以上必修
		女性学Ⅱ	○	○	天沼	2・3・4		2		○		
		情報・コミュニティ実習Ⅰ	○	○	小高	2・3・4		2			○	
		情報・コミュニティ実習Ⅱ	○	○	小高	2・3・4		2			○	
		情報・コミュニティ実習Ⅲ	×	○		3・4		1				
	社会福祉コース	社会福祉原論	○	○	藤田	2・3・4		4			○	心理学専門の開放科目より2科目以上　8単位以上必修
		老人福祉論	○	○	林（斎）	2・3・4		4			○	
		障害者福祉論	○	○	山田	2・3・4		4			○	
		児童福祉論	○	○	柳生	2・3・4		4			○	
		社会保障論	○	○	酒向	2・3・4		4			○	教育学専門の開放科目より2科目以上　8単位以上必修
		公的扶助論	○	○	柳生	2・3・4		2	○			
		地域福祉論	○	○	柳生	2・3・4		2		○		
		社会福祉援助技術総論	○	○	藤田	2・3・4		4			○	
		社会福祉援助技術各論Ⅰ	×	○		3・4		4				
		社会福祉援助技術各論Ⅱ	×	○		3・4		4				
		社会福祉援助技術演習	×	○		3・4		4				
		社会福祉援助技術現場実習Ⅰ	×	×		3		3				
		社会福祉援助技術現場実習Ⅱ	×	×		4		3				

教育学専攻科目

区分		授業（登録）科目名	今年度の開講の有無	他学科への提供科目の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
コース共通	必修科目	教育学研究法	○	×	梶山	2	4				○	
		教育学講読演習	×	×		3	4					
		教育調査演習	○	×	大西	2	4				○	
		卒業論文	×	×		4	8					
コース共通	選択科目	教育哲学	○	○	太田	2・3・4		2		○		
		教育史	○	○	梶山	2・3・4		2	○			
		教育社会学	○	○	森田	2・3・4		2	○			
		教育本質論	○	○	白幡（富）	1・2・3・4		2		○		
		生涯学習論	○	○	原	1・2・3・4		2	○			
		教育制度論	○	○	大西	1・2・3・4		2	○			
		障害児（者）教育論	○	○	小川	2・3・4		2	○			共通選択科目より4科目以上　8単位以上必修
		教育学特殊講義	○	○	森	2・3・4		2		○		
コース別選択科目	学校教育コース	教育課程論	○	○	阪尾	2・3・4		2		○		自コースのコース別専門科目より3科目以上　8単位以上、他コースのコース別専門科目より2科目以上　4単位以上必修
		教育方法論	○	○	阪尾	2・3・4		2	○			
		授業論	○	○	白幡（富）	2・3・4		2		○		
		学校組織論	○	○	大西	2・3・4		2		○		
		教育経営論	○	○	大西	2・3・4		2		○		
		視聴覚教育論	○	○	加藤（直）	2・3・4		2		○		
		視聴覚教育メディア論	○	○	加藤（直）	2・3・4		2	○	○		心理学専門の開放科目より2科目以上　8単位以上必修
		学校文化論	○	○	森田	2・3・4		2		○		
		教師論	○	○	梶山	2・3・4		2		○		
		学校教育課題研究	×	×		4		4				
	社会教育コース	社会教育論	○	○	原	2・3・4		2		○		社会学専門の開放科目より2科目以上　8単位以上必修
		社会教育計画論	○	○	松永	2・3・4		4		○		
		社会教育施設論	○	○	原	2・3・4		2	○			
		学習情報論	○	○	森	2・3・4		2	○			
		家庭教育論	○	○	白幡（久）	2・3・4		2	○			
		幼児教育論	○	○	白幡（久）	2・3・4		2		○		
		社会教育課題研究	×	×		4		4				

（3）美学美術史学科専門科目

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講の有無	教科への単位数の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
必修科目	美学概論	○	×	岡本（重）	1・2	4				○	
	日本美術史概論	○	×	藤澤	1・2	4				○	
	東洋美術史概論	○	×	古田	1・2	4				○	
	西洋美術史概論	○	×	中山	1・2	4				○	
	比較美術史概論	○	×	清水	1・2	4				○	
	建築芸術概論	○	×	岡本（真）	1・2	4				○	
	専門演習Ⅰ	○	×	三平、横山	2	2		○	○		
	専門演習Ⅱ	○	×	岡本（真）、古田	2	2		○	○		
	研究演習Ⅰ	×	×		3	4					
	研究演習Ⅱ	×	×		4	4					
	卒業論文	×	×		4	8					
選択科目〔A〕	美学特講	○	○	岡本（重）	2・3・4		4			○	選択科目〔A〕より24単位以上必修
	建築デザイン特講	○	○	岡本（真）	2・3・4		4			○	
	日本美術史特講Ⅰ	○	○	藤澤	2・3・4		4			○	
	日本美術史特講Ⅱ	○	○	山脇	2・3・4		4			隔	
	東洋美術史特講	○	○	古田	2・3・4		4			○	
	西洋美術史特講Ⅰ	○	○	中山	2・3・4		4			○	
	西洋美術史特講Ⅱ	○	○	遠藤	2・3・4		4			隔	
	比較美術史特講	×	○		2・3・4		4				
	芸術論Ⅰ	○	○	小西	2・3・4		2	○			
	芸術論Ⅱ	○	○	小西	2・3・4		2		○		
	絵画論Ⅰ	○	○	竹原	2・3・4		2	○			
	絵画論Ⅱ	○	○	竹原	2・3・4		2		○		
	彫塑論Ⅰ	○	○	井上	2・3・4		2	○			
	彫塑論Ⅱ	○	○	井上	2・3・4		2		○		
	染織論Ⅰ	○	○	高橋	2・3・4		2	○			
	染織論Ⅱ	○	○	高橋	2・3・4		2		○		
	人間工学	○	○	三平	2・3・4		2	○			
	図学	○	○	三平	2・3・4		2		○		
	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｰｸﾞﾗﾌｨｯｸｽⅠ	○	○	宮崎	2・3・4		2	○			
	ｺﾝﾋﾟｭｰﾀｰｸﾞﾗﾌｨｯｸｽⅡ	○	○	横井	2・3・4		2		○		
	文芸論Ⅰ	○	○	原田（純）	2・3・4		2	○			
	文芸論Ⅱ	○	○	原田（純）	2・3・4		2		○		
	映像論Ⅰ	○	○	ハーイ	2・3・4		2	集中			
	映像論Ⅱ	○	○	ハーイ	2・3・4		2	集中			
	音楽論Ⅰ	○	○	川口	2・3・4		2	○			
	音楽論Ⅱ	○	○	川口	2・3・4		2		○		
	デザイン論Ⅰ	○	○	林（英）	2・3・4		2	○			
	デザイン論Ⅱ	○	○	林（英）	2・3・4		2	○			

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講の有無	他学科への開放科目の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 集中	備考
選択科目〔A〕	工芸論Ⅰ	○	○	高田（直）	2・3・4		2	○			
	工芸論Ⅱ	○	○	高田（直）	2・3・4		2		○		
	考古学Ⅰ	○	○	丸山	2・3・4		2	○			
	考古学Ⅱ	○	○	丸山	2・3・4		2		○		
	色彩論Ⅰ	○	○	林（英）	2・3・4		2		○		
	色彩論Ⅱ	○	○	林（英）	2・3・4		2		○		
	視聴覚教育論	○	○	加藤（直）	2・3・4		2		○		
	視聴覚教育メディア論	○	○	加藤（直）	2・3・4		2	○	○		
	博物館学Ⅰ	○	○	横山	2・3・4		2	○			
	博物館学Ⅱ	○	○	横山	2・3・4		2		○		
	博物館学Ⅲ	○	○	藤澤、古田、中山	4		2	集	中		

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講の有無	他学科への開放科目の有無	担当教員	開講年次	単位数 必修	単位数 選択	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 集中	備考
選択科目〔B〕	日本史概論	○	○	天沼	2・3・4		4			○	
	東洋史概論	○	○	今井	2・3・4		2		○		
	西洋史概論	○	○	家田	2・3・4		2	○			
	人文地理学概論	○	○	横山	2・3・4		2		○		
	自然地理学概論	○	○	横山	2・3・4		2	○			
	地誌	○	○	横山	2・3・4		2	○			選択科目〔B〕及び他学科開放科目よりあわせて16単位以上必修
	哲学概論	○	○	渡辺	2・3・4		4			○	
	人文地理学特講	○	○	横山	2・3・4		2		○		
	自然地理学特講	○	○	野元	2・3・4		2		○		
	地誌特講	○	○	野元	2・3・4		2	○			
	倫理学概論	○	○	富田（規）	2・3・4		2	○			
	宗教学概論	○	○	井道	2・3・4		2	○			
	生涯学習論	○	○	原	2・3・4		2	○			

平成１０年度　開講表（平成９年度以降入学者対象）
（４）資格関連科目
１　教職（教職に関する科目）

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講有無	担当教員	開講年次	単位数	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
教職	英語科教育法Ⅰ	×		3	2				英米文化学科
	英語科教育法Ⅱ	×		3	2				英米文化学科
	社会科教育法Ⅰ	×		3	2				人間関係学科・美学美術史学科
	社会科教育法Ⅱ	×		3	2				人間関係学科・美学美術史学科
	公民科教育法	×		3	2				人間関係学科
	地理歴史科教育法Ⅰ	×		3	2				美学美術史学科
	地理歴史科教育法Ⅱ	×		3	2				美学美術史学科
	道徳教育論	×		3	2				
	特別活動論	○	阪尾	2・3・4	2	○	○		
	教育実習セミナー	×		3・4	2				
	教育実習	×		4	1				

２　精神保健福祉士

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講有無	担当教員	開講年次	単位数	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
精神保健福祉士	精神医学	○	星	2・3・4	4			○	
	精神保健学	○	星	2・3・4	4			○	
	精神科リハビリテーション	×		2・3・4	4			○	
	精神保健福祉論	○	河崎	2・3・4	6			○	
	精神保健福祉援助技術概論	×		2・3・4	4			○	
	精神保健福祉援助技術各論	○	山田	2・3・4	4			○	
	精神保健福祉援助技術演習	×		2・3・4	4			○	
	精神保健福祉援助技術実習	○	山森・酒向	2～4	9			○	

３　学芸員

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講有無	担当教員	開講年次	単位数	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
学芸員	博物館実習	×		4	3				

3　図書館司書

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講有無	担当教員	開講年次	単位数	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
図書館司書	図書館概論	○	校條	1	2	○			
	図書館サービス論	○	佐橋	2	2		○		
	図書館資料論	○	加藤（三）	2	2	○			
	専門資料論	○	加藤（三）	2	1		○		
	資料組織概説	○	首藤	2	2	○			
	資料組織演習	○	首藤	2	2			○	
	児童サービス論	○	森下	2	1		○		
	図書館経営論	×		3	1				
	情報サービス概説	×		3	2				
	レファレンスサービス演習	×		3	1				
	情報検索演習	×		3	1				
	図書及び図書館史	○	加藤（三）	1	1		○		
	資料特論	○	佐橋	1	1		○		
	図書館特論	×		3	1				

4　学校図書館司書教諭

区分	授業（登録）科目名	今年度の開講有無	担当教員	開講年次	単位数	開講期間 前期	開講期間 後期	開講期間 通年	備考
	学校図書館通論	×		3	1				
	学校図書館の利用指導	×		3	1				

平成１０年度開講表（平成８年度以前入学者対象）一般教育・外国語・保健体育科目（各学科共通）

区分		平成８年度以前入学者対象の科目名	今年度開講の有無	今年度開講の読替科目（授業科目名）	学期	時限	担当教員	授業を行なう年次	単位数 必修	単位数 選択	備考
一般教育科目	人文	哲学	×	人生と哲学Ⅰ、人生と哲学Ⅱ	前後期 前後期	土１限 土２限	小澤 小澤	1		4	平成８年度以前の入学者は平成９年度以降のカリキュラムの読み替え科目で履修する時は、必ずこの開講表の今年度の読替科目に記されている該当科目を全て履修しなければならない。
		倫理学・宗教学	×	倫理と宗教Ⅰ、倫理と宗教Ⅱ	前後期	土２限	井道	1		4	
		文学	×	イギリス文学、フランス文学	前後期	金３限	ｳｨﾘｱﾑｽ、篠田	1		4	
		心理学*1	×	人間理解の心理学	前後期	金１限	生田、長谷川	1		4	*1　前後期とも同じ授業科目を履修すること
		音楽	×	音楽と人間、音楽と社会	前後期 前後期	水１限 水２限	川口 川口	1		4	
		美術	×	近代絵画、現代彫刻	前後期	木２限	近藤	1		4	
		生活美学	×	衣の生活美学、住の生活美学	前後期	金３限	神谷（み）・増栄	2		4	
	社会	憲法・法学	×	女性と法律Ⅰ、女性と法律Ⅱ	前後期	月２限	神谷（和）	1		4	人文、自然、社会の３分野よりそれぞれ３科目１２単位以上必修
		経済学	×	くらしの中の経済学Ⅰ、くらしの中の経済学Ⅱ	前後期	金３限	神谷（哲）	2		4	
		社会学	×	現代の社会学Ⅰ、現代の社会学Ⅱ	前後期	木１限	神戸、小高	1		4	
		教育学	×								
		歴史学	×	日本文化論Ⅰ、日本文化論Ⅱ	前後期	木１限	天沼	1		4	
		地理学	×								
	自然	数学	×								
		統計学	×								
		物理学	×								
		化学	×	環境汚染と人、ｴｲｽﾞ・ｶﾞﾝの生化学	前後期	火１限	永田	1		4	
		生物学	×	地球環境と生物進化、遺伝子の行動	前後期	月３限	内貴	1		4	
		生活科学	×								
		医学一般	○	医学一般*2	前後期	月３限	大森	2		4	*2　人間関係学科専門科目

平成10年度 専任教員の担当授業時間

990423

教員名	月				火				水				木				金				土		小計
	1限	2限	3限	4限	1限	2限	3限	4限	1限	2限	3限	4限	1限	2限	3限	4限	1限	2限	3限	4限	1限	2限	
【全学・専任】																							
永田					○	○								○									3
川口									○	○					○	○		◎		○			6
神谷(和)		○		○			○																3
天沼								○		○			○		○	○							5
内貫		○	○												○	○							4
大森	◎	◎	○										◎	◎		○	◎						7
川島	○	○			○			○	○	○							○		○				8
藺						○	○		○	○			○	○	◎								7
原田(幸)		○				○										○							3
後藤														○									1
【英米・専任】																							
篠田							○	○	○	○									○	○			6
牛島					○	○		○	○														4
神谷(哲)				○															○				2
大野(昭)									○	○					○	○		○	○				6
堀													☆		☆	○		○	○	○			6
原田(純)	○	○							☆	☆			☆										5
ｳｲﾘｱﾑｽﾞ		○		○					○	○	○							○	○	○			8
樋口					☆	☆	○	○		○													5
中尾														○	○	○	☆	☆					5
岩崎								☆		○				☆	○	☆							5
大野(憲)	○		○		○		○								○	○							6
濱田						○	○		○	○				○	○								6
北山(眞)					○	○	○			○							○	○					6
北山(長)													○	○	○	○	○	○					6
ｽﾀﾎﾞｲ		○	○			○		○	○		○						○	○					8
富田(理)			○	○	○	○		○					○										6
ｼﾞｮﾝｽﾄﾝ	○		○		○	○			○		○							○		○			8
【人間・専任】																							
宮本					○	○	☆		○	○				○							☆	☆	8
生田						☆	☆	☆		○			○				○						6
矢澤	○	☆								○				☆	○	○		○					7
藤田(弘)		○		○						○	◎							○		○			6
柳生		○							○	○								○	○				5
校條			○						○	○									○				4
神戸	○			○	○		○		○	○			○										7
酒向								○					○									○	3
白幡(富)									○	○						☆	○	○	☆				6
大西		○	○		○				○	○							○	○					7
太田			☆	☆			○	○	○														5
長谷川		○	○	○	○	○	○		○	○													8
小高			○	○											○	○		○		○			6
大平			○	○		○	○		○	○													6
松永						○	○			○					○	○			○				6
【美学・専任】																							
三平								○							○					○			3
岡本(重)					○	○	○			○					○								5
中山				○	○				☆	○			○	○		☆							7
清水			○	☆	○		☆		○	○													6
藤澤			○	○		○		○		○				☆	☆								7
岡本(真)									○	○							○	○	○	○			6
横山		○		○	○	○	○		○	○			(集中講義 1)										8
遠藤										○				○	○			○	○				5

○は大学　☆は大学院　◎は短大

平成10年度 非常勤講師の担当授業時間　　990423

【全学・非常勤】							
小澤				○ ○ ○			3
井道						○	1
大井		○ ○					2
神谷・増栄					○		1
安原							0
山森						○ ○	2
森屋						○ ○	2
片岡(正)		○ ○		○ ○			4
福住	○ ○			○ ○			4
野村			○ ○ ○				3
祖父江	○ ○ ○						3
竹中				○ ○ ○			3
日高			○ ○ ○				3
千			○ ○	○ ○	○ ○		6
武原		○ ○	○ ○				4
原田(勇)						○	1
隈	○ ○ ○						3
神谷・若杉							0
【英米・非常勤】							
技村	○						1
河地			○ ○				2
弓削				○			1
野元						○ ○	2
廣田	○ ○					○ ○	4
佐原					○ ○		2
小林(隆)	(集 中 講 義		1)				1
国安					○ ○		2
一篠	(集 中 講 義		1)				1
家田	○			○		○	3
【人間・非常勤】							
今井							0
森田		○					1
小林(月)				○			1
楢							0
林(商)					○		1
山田		○	○	○			3
原			○			○	2
高田(礼)			○ ○				2
阪尾	○ ○						2
佐賀				○			1
加原(直)				○ ○			2
白幡(久)						○	1
小川	○						1
森川		○ ○		○			3
真栄城	○						1
宮田(規)				○ ○			2
山崎							0
梶山		○ ○					2
阿部	(集 中 講 義		1)				1
小山田							0
加原(文)						○	1
別府							0
【英学・非常勤】							
神谷(み)			○				1
竹原				○ ○			2
ハーイ	(集 中 講 義		1)				1
高田(直)	○						1
横井							0
鈴木				○			1
高橋					○		1
渡辺		○					1
林(英)						○ ○	2
山脇	(集 中 講 義		1)				1
丸山(竜)				○			1
井上			○ ○				2
宮崎	○ ○						2
高畠					○ ○		2
林(尚)							0
丸山(弥)				○ ○			2
原田(伸)		○ ○					2
【大学院・英米・非常勤】							
山本						☆	1
原平	(集 中 講 義		1)				1
辻							0
上倉	(集 中 講 義		1)				1
【司書等・非常勤】							
加原(二)		○ 0.5					1.5
佐藤							0
首原				○ ○			2
安田			○				1
小林(純)	○			○			2
星		○ ○					2
花井			○	4.5	○ ○		5

○は大学　　☆は大学院　　◎は短大

ＶＩＩ．図書・学習資源

１．経過と現状

本学図書館は、東海女子大学と東海女子短期大学の蔵書と一部備品を引き継ぎ共用施設として、平成５年１月 22 日に起工式、同６年３月 31 日に竣工式、同６年９月５日に仮オープンとそれぞれ行われた。敷地面積は、3,200 平方メートル、地上４階の鉄筋コンクリート造りで建物全体の床面積は 4,775 平方メートルである。この規模は、文部省の「平成９年度大学図書館実態調査結果報告書」による図書館１館当たり平均 4,235 平方メートルを上回っている。

設計者は環境計画（株）、施工者は安藤建設(株)と大日本土木(株)で、「中世の僧院」を建築イメージして設計しており、建物は、三つの理念、即ち、「学ぶ」「集う」「語らう」を具現化したものとなっている。この理念を表現する新図書館の館名として当初「東海情報コミュニケーションライブラリー」でスタートしたが、平成８年４月から現在の「東海女子大学・東海女子短期大学附属図書館」を名称とした。

（１） 施設・設備

「学ぶ」ためのスペースは３階と４階を中心に展開しているが、利用者がこの階への入退出時には、３階のカウンター前に設置されているブック・ディテクション・システム（図書持出磁気感知装置）をクリアすることとなっている。

３階には、貸出・返却、レファレンスサービス等、図書館の全てのサービスを行うカウンターと、参考図書や一般図書(一部)の開架書架スペースと閲覧席３０席が配置されている。このスペースを中心にカード目録やOPAC 検索ができるパソ

コン６台等の他に AV 資料の再生装置を装備した AV ブースを設けた AV コーナーなどを備え、図書館におけるメインフロアとしての役割を果たすフロアとなっている。また、生活・婦人雑誌等の一般雑誌を備えた談話室や、各種の新書版を継続的に整備している新書版コーナーを整備するなど、気軽に読書を楽しめる環境を整えている。

４階の中心スペースは、３階から連続している開架閲覧スペースである。ここには、一般図書(和書の一部と洋書)と製本雑誌が配架され、９８席の閲覧席がある。このスペースとは別室になっている雑誌閲覧室 と学習室があり、前者には、学術雑誌約５００種の最新号を収納し、後者は、教職員が講義や会議等に、学生が学習等に利用できる多目的な部屋となっている。

また、２階には、不要不急の資料等を保管する集密書庫と 講義・会議や学習等、多目的に使う中小セミナー室が備えられている。

「語らう」「集う」の中心スペースが、大ホールである。ここは、５６席分の洗練された家具等を配備した豊かな空間を提供している。このスペースを中心に、吹き抜けの広々としたコンコースがあり、このコンコースから自由にアクセスできるラウンジには、各種の新聞と 11 席分の長椅子等が備えられている。また、大ホールの南側には芝生を敷き詰めた庭園を設け、椅子を配して、おしゃべりを楽しむ空間となっている。これらのスペースとは別棟に大セミナー室（130 席）があり、ここは、視聴覚機器や学内 LAN に接続した階段教室で、講義や研修会・講演会等に広く利用されている。

全館の総閲覧席数は、334 席（大セミナー室の席を含まない）で、学生数の 13.4%を確保しており、同規模他大学の 10.3%と比較しても恵まれた利用環境になっている。

また、当初の館名が示しているように、館内は、フリーアクセスの床構造や LAN ケーブルなど、情報化の基盤整備がされており、開館以来、順調に情報化が進められている。

以上の施設・設備が、利用者からの理解を得ながら効率的に運用していけるよう、

各施設・設備の利用関係規程の整備を行っている。

（2）資料の整備

図書と雑誌の受入状況の推移（過去４年間）をみると＜表１＞のとおりで、図書については、新設大学院用資料を受け入れた平成９年度が突出しているが、平成10年度には減少している。また、雑誌についても、同様の理由で平成９年度が突出しているが、平成１０年度に激減している。

収集した雑誌は、図書館に集中管理し、共同利用を図っている。視聴覚資料については、教員が研究・教育用として購入した分も、図書館が、学生の学習用とし購入した分も図書館に集中管理して、３階の AV ブースで利用に供している。

また、情報化の進展に伴って電子媒体の資料の収集に留意しているが、特に、２次資料の収集に重点を置いており、利用度の高い CD-ROM は、サーバ方式によりLAN利用ができるシステムになっている。

＜表１＞ 図書及び継続雑誌受入状況(短大を含む)

年度別	本学の受入状況		同規模大学との平均	
	図書（冊）	雑誌（種）	図書（冊）	雑誌（種）
平成７年	5,246	1,537	5,042	881
平成８年	5,360	1,286	4,875	885
平成９年	6,533	1,940	－	－
平成10年	4,810	677	－	－
平均	5,487	1,360	－	－

（3）資料の整理と保管

ア．整理

本学で受け入れる図書は、短大受入れ図書とともに全て図書館が窓口になり、閲

覧用図書として整理され、図書館の蔵書として保管されている。平成 9 年 3 月 19 日から図書館業務の電算化を開始し、文部省の学術情報センターの NACSIS-CAT に加入し、蔵書のデータベース化を行っている。平成 11 年 5 月 24 日現在、入力件数は 26,713 件となっている。図書館の電算システムを構築し、そのシステムをトータルに機能化するためには、基本的には、全蔵書の書誌的事項のデータベース化を行うことが必要条件である。このため、平成 9 年度から新たに受入れる分については全て電算化することとし、既蔵分については、年次計画により遡及入力を行っており、現在、継続して遡及入力作業を行っている。

イ. 保管

本学で受け入れた図書、雑誌、視聴覚資料は、短大分を含めて全て図書館に集中配置されることとなっている。平成 11 年 3 月末現在、蔵書数 185,234 冊、所蔵雑誌数 3,890 種、視聴覚資料 4,435 タイトル、電子出版 84 タイトルとなっている。図書の過去 4 年間の平均年間受入冊数が 5,487 冊であるので、本館の収納能力 206,900 冊には、4 年後に到達することとなる。雑誌の利用頻度の高いものについては、製本処置をして 4 階の開架書架に排架している。館内の収納スペースの 85%を開架方式による 3 階と 4 階の開架閲覧スペースが占めている。

(4) 利用状況

ア. 開館状況

平成１０年４月から開館時間を月曜日から金曜日までは午前９時から午後６時まで、土曜日にあっては、午前９時から午後３時までとし、前者を１時間、後者を２時間、それぞれ開館時間の延長を図り、現在に至っている。

イ. 館外貸出利用状況

最近３年間の本学学生の館外貸出利用状況は、＜表２＞のとおりで、１日平均で見ると僅かではあるが増加の傾向である。しかし、本学図書館の利用状況のデータに相応する同規模大学の利用水準を示すデータが不十分なため確認できないが、恐らく本

学図書館の利用状況は、後者のそれより下回っていると思われる。

＜表２＞　学生の館外貸出利用状況

(単位:冊)

区	分	８年度	９年度	１０年度
本　学	貸出冊数	14,085	14,218	14,158
	１日平均	49.0	49.4	49.9
同規模大	１校平均	12,169	－	－
	１日平均	49.8	－	－

ウ．参考事務

大学図書館の参考事務は、学生が要求する資料や情報を直接提供するのではなく、学生が自らの力で探し出し、より適切な情報を入手できるように、図書館の利用方法や文献の検索方法について、指導･助言することに重点が置かれる。本学の図書館でも、日常業務における参考事務とは別に、利用者教育の一環として「図書館オリエンテーション」「卒業論文作成のための図書館利用指導」「OPAC 検索・インターネット利用説明会」を毎年、定期的に実施している。

参考事務のなかで、最も利用度の高い特定文献の所蔵及び所在調査は、本学図書館でも、文部省の学術情報センターの NACSIS-CAT に加入しているため、迅速・的確に処理できる体制になっている。

エ．相互利用

本学図書館に求める資料がない場合、他の大学等の図書館等を利用することになるが、本学図書館では、三つの方法で対応している。

① 本学図書館長の紹介状を発行し、他大学等の図書館等を直接利用させる。

② 資料を所蔵する図書館から、相互貸借により直接借り受ける。

③ 複写依頼をして、複写物の形で文献を入手する。

本学図書館における相互協力の状況は、＜表３＞に示すとおりで、本学図書館の情報化前の平成８年度時の利用件数に対して、情報化後の平成 10 年度の利用件数が飛躍的

に伸びている。特に、他大学図書館へ依頼する件数が特段に多くなっており、学外から依頼がくる件数を遥かに上回る状況となっている。

情報化の進展に伴い、一つの大学図書館だけでは、利用者からの多様な情報要求を満たすことは不可能であるという認識から、「情報資源共有」の理念を根底に、相互協力の考え方にたって、文部省の学術情報システムは構築されている。本学図書館においても、このような背景を十分認識し、文部省の学術情報センターに参画している。

＜表３＞　相互協力の状況

（単位:件）

区　分		8年	10年
紹介状	発行	140	37
	受理	17	19
相互貸借	借受	4	26
	貸出	3	46
文献複写	依頼	315	794
	受付	55	344

２．今後検討すべき課題

（１）資料収納スペースの拡充と適正な蔵書構成の構築

本館の蔵書数は、収納可能冊数にほぼ到達しており、資料の収納スペースが著しく狭隘化してきている。このため早急に対応策を講じる必要があるが、「限りなく増加する資料に対応して限りなく書庫スペースを増設する」ことはできない。「情報資源の共有化」と電子メディア等のメディアの多様化を前提に、常に不要不急の資料を weeding することと、学部学科目等の構成等を反映した特色ある蔵書構成の構築を指向した重点的な資料の収集に努めることが必要である。

「情報資源共有」の目指すところは、「相互利用を前提にそれぞれの図書館が特色あるコレクションを構築し、購入・保存等の分担によって資源予算を削減し、保存スペースを効率的に使用する」ことにある。

（2）情報化の拡充に伴う計画

ア．利用者教育の充実

開架閲覧スペースには6台のパソコンを分散配置し、OPACやCD-ROM等の検索の利用に供している。しかし、これらとは別に、電子メディアを使いデータベース検索の基礎能力を育成する環境整備（集合教育と個人利用の場を兼ねたスペース）が必要である。

また、将来の課題として、既に一般化しつつある大学図書館の公開事業の一環として図書・雑誌類の利用とともに、この種の教育サービスを提供することも考えられる。

「情報化時代における質の高い教育とは、学生を情報の賢い消費者に育て、日常生活や職業生活に必要とする適切な情報を探しだせるようにすること」と、アメリカのある著名な教育者（E.G.Gee）が言及している。このような情報リテラシー教育は、時代の趨勢に合わせますます重要になってこよう。

イ．図書館パッケージシステムの更新

本学図書館の電算化は、文部省が推進する学術情報システムに参加することにより全国的なコンピュータネットワークに参画し、図書館業務のトータルシステムの構築を目指して進めている。したがって、本学図書館の電算システムは、学術情報センター対応のパッケージソフトをベースにして構築している。しかしながら、学術情報センターは、サーバ主導型の閉じた世界の現システムを廃止し、ダウンサイジング、インターネット時代に対応できるクライアントサーバ方式の新システムへの移行を開始している。このため、本学図書館でもこの新システムに対応できる現パッケージソフトの新システム対応版への移行について早急に検討を進めていく必要がある。

なお、新システムにおいては、幾つかの優れた機能があるが、その中に次のようなWebサービス機能がある。

① 予約

② ILL依頼申込

③ 購入申込

④ 予算照会

⑤ 新着図書紹介

⑥ レファレンスサービス

（3）図書館職員の専門性の充実･強化とルーチン業務の機械化

高度情報社会に伴い、今後、高度で多様な情報サービスを提供する業務が拡大する。このような状況に対応していくために例えば、貸出業務などは、利用者自身の手で借出・返却の手続ができる自動貸出返却装置(一部の大学で導入済みまたは計画中)の導入など、ルーチンワークを機械化等により効率化、省力化し、その余力を新しい業務にシフトしていくことが望まれる。このような状況の中では、職場内教育等の機会を設け、この新たな業務に対応できる資質の向上を常に図っていくことが必要であろう。

[注]
文中でデータ比較の対象とした同規模大学とは、単科大学の私立大学で、
データは、文部省学術国際局学術情報課編「平成９年度大学図書館実態調査
結果報告」によった。

VIII　学生生活

1、　点検実施の目的と方法

大学は、教職員と学生により構成される。両者はともに基本的には真理の探求を目指しているが、学生が実際に求める内容や方法は多様である。すなわち、学生は大学生活を通じて「専門知識の習得」をはじめ「自由時間の活用」「課外活動での自己表現」「自己に適した職業の模索」などを求めている。今日の大学には、このような学生の多様な期待や要求を組み込んだプログラムをいかに提供するかが求められている。

学生生活の充実を図ることは、これからの大学づくりに欠かすことのできない観点である。学生生活を支援するサービス業務を向上させることは、大学の教育目的達成を円滑に進める上で有効なだけでなく、本学の学風やイメージを形成する大切な要素にもなり得る。その点では外部から本学の現状を把握する必要もあるが、今回、委員会が取った方法は「教職員による自己診断」と「学生自身による評価」である。以下の叙述は「教職員による自己診断」を主とし、「学生自身による評価」については、学生に対するアンケートの結果を資料として添付する。

2．学生の居住状況（生活基盤の経済的側面）

学生が全国各地から集まっていることもあって、自宅外通学生の割合は、平成１０年度で約３２％であった。そのうち約７割が大学紹介のアパート、約１５％が学寮に、残り約１５％が民間業者斡旋のアパートに居住している。大学周辺のアパートには、本学学生と、併設の女子短大の学生が多く居住している。アパートの形態は昔風の間借り部屋から、近代的エアコン、バス・トイレ、キッチン付ワンルームマンションまで様々で、部屋代も月額２万円前後から５万円超まで幅が広い。最も多いのは４万円前後である。しかし、中には女子学生に不向きなも

のもあり、安全面や経済面で適切で望ましいものを学生部で情報提供している。

学生寮は、第1寮が月額 14,000 円、第2寮は月額 22,000 円であるが、少々設備に差がある。入寮の選考は入学時の遠隔地出身者を優先している。

資料1は本学学生寮の案内および寮則等を記したものである。

3．奨学金制度

（1）日本育英会奨学金制度

現在、日本育英会奨学生は平成 11 年6月現在 205 名であり、全学生数 1,373 人の約 14.9%に相当する。年々少しずつ増加しているが、希望者と採用者との差は依然大きい。

この制度の問題点は、その年の推薦内示数の通知が日本育英会よりあってから推薦締切りまでの日数が短い（約2ヶ月足らず）ことで、学生への制度説明、学生より提出を求める書類の準備、審査、選考、学長決裁を短期間に行うための作業にはかなりの困難が伴う。

以下に平成 11 年度における日本育英会の奨学生数を示す。

平成 11 年度　　日本育英会奨学生数

	1年生	2年生	3年生	4年生	小　計
既採用者		40	45	42	127
新規採用者	56	7	13	0	76
合　　計	56	47	58	42	203

（他に大学院生採用者　2名）

（2）地方自治体による奨学生制度

岐阜県奨学生の該当者数は、平成 11 年5月現在4年生5人、3年生1人、2年生1人、1年生6人、計 13 人である。保護者が岐阜県在住であることが条件であるが、募集期間が 4 月末で入学後間もないため、書類が整わず辞退する者が毎年数名出ている。

岐阜県以外の奨学生制度については岡山県、茨城県、福島県、石川県、富

山県、熱海市の各奨学会、広田奨学会、電通育英会、交通遺児育英会などに奨学生としての採用者がおり、制度の内容はそれぞれ異なっている。かつてはロータリー協会等の民間の奨学金を受けた例もあった。、

その他、本学では特別奨学生制度があり、学生生活に対する様々な支援体制をとっている。家庭の経済事情急変などにより、勉学の継続に困難をきたした学生等に対しては、学生部では常に学生生活の実情に応じた対応が可能となるよう、関係者との情報交換を行っている。学生に対する奨学と救済制度の必　要性は今後も減じることはないものと思われる。

4. 学生アルバイトと学生部の業務

学生アルバイトを巡る情勢には予断を許さないものがある。アルバイトに対する学生の意識と希望、需要等については、入学時の身上調査書に記入する欄があり、ある程度の情勢を把握することは可能であるものの、アルバイトの実態、学費・生活費と親からの仕送りとの関連、就労の勉学への影響、負担などに関する詳細は必ずしも明らかではない。

アルバイトを常時必要とする者については、必要金額を明示する率が高いこと、1年の後期から直ちに従事するものが多いこと（本学では1年生前期の学生のアルバイト就業を認めていない。）、アルバイトの目的として学費・生活費補助をあげていることが特徴である。修学上あるいは生活上、かなり差し迫った事情からアルバイトを必要としていることがうかがえる。これらの学生の就労については、修学上の負担を考慮し、優良なアルバイトを優先的に斡旋できるような配慮が必要となる。

アルバイトを常時必要としている学生の割合は自宅外居住者に高いが、実際のアルバイト従事者の割合は自宅居住者とほとんど変わりがない。これは、自宅居住者においても、親からの給付のみでは修学上あるいは生活上の困難さや不自由

さを感じていることが多いためと思われる。

学生アルバイトに関する業務は本学では学生部が行っており、業務の中心は求人側からの条件等を学生に掲示する求人紹介にある。紹介率の高い業種はサービス業であるが、これらの職種は塾講師、医院等の受付および診療補助、スイミングスクールの指導員等であり、比較的「堅い」業種が目立つ。その他では、大手デパートと大手ホテルである。なお、求職者を登録させて、学生を求人側に紹介するような斡旋業務は行っていない。

本学の学生はアルバイトをする際、大学の紹介であるか否かを問わず、学生部に届け出ることになっている。しかし、必ずしも励行はなされず、就労状況の実態把握は困難である。就業に関しては大学が関与することはないものの、学生からトラブル解決等の依頼があれば、ある程度の仲介は行う。ただし、最近4年間で特に問題となった例はない。大学としては女子学生にふさわしいと思われる職種を選んで紹介しているが、中には届け出なしに接客業などに従事する者もいる。そうした状況が判明した場合は就労中止を勧告する等の指導を行っている。経済的理由からやむを得ずアルバイトを必要とする学生が少なくないことは事実で、本学では原則的に紹介はしないが、飲食店等における接客業務を希望する例は多い。

アルバイト就労が修学上悪影響を及ぼしたりすることを避けるために、大学としては学生の就労状況を常時把握するとともに、授業への出席、単位の修得状況等の情報を即時検証できるようなシステムを作ることが必要と考えられる。ただし、現状ではアルバイト就業届の徹底など、解決を要する問題は多い。

5．学内における日常生活（厚生面）

（1） 学生食堂

学生食堂は、業者委託により運営されており、席数230、1日平均約300食

（弁当を含む）が供されている。1,300名を超える学生数を考えれば、約700名分の食事と300の席数がほしいところである。人気メニューとしては三色丼(400円)、オムライス(390円)、そぼろ丼(380円)などがあり、メニュー、価格およびその他の営業内容については、徐々にではあるが、学生の要望に沿った改善がなされつつある。

また、学内には学生食堂の他、寮の食堂、売店、自動販売機等の施設、設備があり、それらの営業や配置、内容改革等は理事会を含む管理機関、教育に関する運営機関等による協議のもとに行われている。

大学の食堂は学生・教職員のための食事の場としてだけでなく、学生や教職員間のコミュニケーションの場であり、憩いの場でもあることが望ましい。そのための環境整備は今後一層必要とされよう。

（2） 健康診断と保健業務

①健康診断

定期健康診断は毎年4月に行われている。受診率は年々高くなっており、検尿、胸部検査、内科検診とも約9割の学生が受診している。健康診断や保健管理については、これまで検討が遅れていたが、最近、健康診断の項目、血液検査や心電図検査の必要性、検査データの管理等について専門家の見解を求め、体制を強化すべきとの提言がなされている。

②日常的な保健業務

保健室は、事務兼業の職員および看護婦の資格を持つ非常勤職員が担当しており、その対応は概ね適切といえよう。学生の来室の主要な理由は腹痛、生理痛、頭痛、感冒、健康相談（不眠症、月経異常、ダイエット等）、病院の紹介依頼などである。怪我の処置等に関しては体育時の捻挫、擦り傷および寮における火傷などが日に2～3人程度ある。

③学生相談

学生相談室には、非常勤の人生経験豊かな女性が配され、学生の悩み事相談に応じている。主な相談項目は将来の進路、勉学上の悩み、恋愛問題、自己の性格や能力に関するものなどで、日常生活に関連した相談ごとが多い。専門的なカウンセリングを必要とする例に対しては、臨床心理学を専門とする教員、その他の専門家を紹介し、対応している。

学生の抱える悩みや問題は多方面に渡っていることが多い。そのため、プライバシーを守りつつ、指導教員、学生部、教務部、就職相談室、保健室等が連携を図ることが必要となろう。また、カウンセリング専門の心理学者を配することも検討課題のひとつである。

6．学生の自主的活動

（1） 学生会活動

学生会は年２回(６月、１２月)総会を開き、学生活動に関する取り決めや意思決定を行っている。具体的な議題は役員の選出、前年度決算報告、今年度予算承認、サークルの公認、解散、昇格、サークルへの助成金支給などで、学生会の活動は以前と比べ、活発化している傾向が見られる。現在、学生会役員は３５名、学生会が関与する行事として入学式、卒業式、新入生歓迎会、謝恩会、学園祭等が、また、主催するものとして５月の新入生歓迎遠足、６月の球技大会がある。

学生会活動は、基本的には学生自治の問題であるので、学生自身の自覚と意識を重んじることは当然であるが、組織全体のあり方やその権限等に関しては厚生委員会による検討、指導も必要となろう。

（２） 大学祭実行委員会

目標が限定され、趣旨が明確であるため、毎年、春から半年ほどにわたって準備が進められる。しかし、活動の中心はほとんど実行委員のみに限られ、一般学生の関心や参加の度合いは高いとは言い難い。大学祭期間を休業日とみなして、旅行に出かけたり、アルバイトに勤しむ学生も少なくないようである。厚生委員会による指導、教職員自身の参加等も含めた改善策が望まれる。

（３） サークル活動

本学におけるサークル活動は、近年の学生の意識や関心の多様化を反映して、現象的に多種多様化している。平成 11 年現在のサークル数はクラブ 18，同好会 8、研究会 10 で、その一覧は資料２のとおりである。各サークルは毎年活動計画書を提出することになっており、活動状況には年毎に多少の変動がある。併設の短大所属のサークルに加入する学生もおり、全学では、サークルに加入している学生数は 400 を超える。

一部に休眠状態の団体もあるものの、スポーツ系、文科系とも活動の実績は上がってきているといえよう。特にスポーツ系のサークルの中にはインカレ優勝や地区優勝を飾ったり、国際大会のメンバーに選出されて海外遠征する学生もいるなど、大学の名を高めるのに貢献している。そのため表彰される学生も少なくない。ただし、対外試合への遠征のための講義出席日数不足、サークル数の増加による諸施設利用の調整、部室の配分といった問題も生起している。サークル活動に関しては学生会と教育後援会より助成金が出されているが、サークル数や対外試合の増加により、年間予算の配布に困難をきたすに至っており、補助金制度を見直すべき時期にきているといえよう。

なお、各サークルの顧問に関しては、教員の公平負担の原則と、責任の明確化の点から、でき得る限り重複担当を避ける等の措置が必要であろう。

7. 就職指導と就職状況

（1） 就職指導体制

就職状況は経済動向と労働市場の需給関係に依存しており、バブル経済崩壊およびその後の景気低迷の影響を被り、近年の就職状況は非常に厳しいものがある。しかし、地道な就職活動によって活路が開かれることも少なくないし、雇用の需給関係の逼迫など、危機意識を醸成するようなマスコミ報道が逆に学生の就職に対する目的意識を高めたり、明確にさせた側面も見落とせない。こうした情勢の中にあって学生に対する就職指導の重要性はますます高まっており、担当職員の体制強化、事務機構の改善等による対応を図ることはもとより、教職員の理解と協力が一層必要とされる事態となっている。

本学における就職指導は 3 年生時の始めより就職説明会（ガイダンス）、面談、各種講習会、就職に関する集中講義、模擬試験等の手段、方法を用いて行われている。就職指導室担当職員の他、企業からの講師、卒業生（OG）などによる指導、講習を取り入れ、万全を期している。資料３に就職指導の年間予定を示す。また、資料４は就職に関する配布説明資料の一部である。

就職に関する学生の意識は微妙に変化している。専門職や総合職への希求、およびそのための専門技能・資格の取得等への要望、また、大学院進学、留学を含む一層の高学歴志向などに近年の女子学生の職業観、人生観の変化をうかがうこともできよう。晩婚化、少子化、結婚忌避等の現象もこうした傾向と無関係ではあり得ない。

もとより、就職に対する学生の意識には個人差が大きい。入学時より卒業後の進路を展望しているもの、入学後、専門の勉強を進める課程で進路を見出すもの、周囲の動きを見ながら漠然と事務職への就職を考えるものなど、様々である。在学中に取得できる資格についても、将来の仕事に生かすことを考えるものもいれば、とりあえず取っておくといった域を出ないものもい

る。また、都会にあこがれたり、企業名やイメージだけで就職先を選んだりする学生も少なくない。特に、就職活動の早期においては、自己の能力や適性についての把握が不充分な学生も見られる。むろん、与えられた機会を最大限に活用し，意欲的に行動して望む資格を手に入れ、在学中に獲得した知識、技術を生かして実社会に羽ばたこうとする学生も数多い。就職指導の困難性は、こうした学生間の格差の中にもあるのである。大学における勉学が必ずしも就職を目的としたものばかりではないことは自明であるが、学生にとって就職が重大な関心事であり、意味を持つこともまた明らかな事実で、就職指導の重要性はもっと強調されてよい。

（２）就職の状況

就職氷河期といわれる状況が、特に女子大生に強く影響を与える中、女子大生自身の就職観もまた大きく変わろうとしている。かつては「結婚までの腰掛け」として事務職を、といった安易な就職観が多かったとしても、近年は始めから専門職、総合職を目指す女性も少なくないのである。とはいえ、長引く構造不況のために、男女雇用機会均等法の精神は、建前はともかく、正しく実施されているとはいいがたいのが現状であろう。学生の方にも問題がないわけではない。親のすねをかじり続けようとするもの、確たる自覚を持たず、アルバイトやいわゆるフリーターの気楽さを求めるものなど、当今の学生の意識や若者気質そのものに由来すると思われる面も否定できない。ただし、全てを未熟な学生の責任とすることもまた、不可能である。

一方、若者の就職後の早期転職や自己の意思による辞職の例も数多いというが、企業や生活環境に問題がある場合もあって、一概に若者側の忍耐心や道義的良心の欠如として片付けていい問題ではない。女子大卒業者が全て結婚退職を前提に就職しているわけではないし、いまや社会が女性の力を真に

必要としている時代であるという認識は、雇用者、経営者のみならず多くの人々に正しく理解されねばなるまい。

大学教育においては、就職に関する実務的指導、斡旋の他に、道義心や人権意識などの人間教育が必要といわれる。これは教育の根源にも係わる問題であり、その内容や実施法等については多くの議論が必要であろう。

本学の学生においては、就職に関して、大学自体の歴史が浅く、伝統を誇るまでには至っていないこと、単一学部であること、地元の岐阜が経済的に恵まれているとは必ずしもいえないこと、留学経験や取得資格を生かす好例はあるものの、専門性の関係で機会に恵まれない事態もあること、その他、建学の精神や学風を生かせる職場は必ずしも多くはない、といった実情の影響は否定できないものがあると思われる。

それにもかかわらず本学は、就職指導担当者の熱意あふれる努力や指導のもとに、新設大学としては異例の、全国平均を大幅に上回る高い就職率を達成してきたという誇るべき実績がある。本学卒業生が各地で所を得て大活躍している例は枚挙に暇がなく、現在でも状況の極めて悪い中、就職戦線において善戦している。

また、教員の中には、時間外の奉仕活動として、就職に有利となる国家試験の準備教育を熱心に行っている例があり、その大いなる熱意と人柄は尊敬を集めている。当該国家試験に関して本学は現在、全国一の合格率を達成してきている。巷間で大学生の学力不足が指摘されている時、入学後の補助教育という観点もさることながら、卒後の進路に向けて望ましい実力を強化することは非常に重要な点であろう。

本学の学生における最新の具体的就職先や就職率に関しては、本報告書編集時には整理が完了していないため省略するが、上記のように、悪条件のもとでも優れた就職実績をあげているといえよう。

以下に、本学バイオサイエンス研究センター、大森正英教授による学生生活に関するアンケート調査の結果の一部を示す。資料５，６はここで用いた調査表である。

（１）住居状況

（２）生活時間

（３）食生活、健康状態

（４）ストレス状況

（５）喫煙、飲酒状況

（６）体格、体重観

学生の学内における日常生活に関しては、学生部で行った別種のアンケート調査について、その調査項目および集計結果を資料７に示す。

（１）住居状況

本学の学生は約６８％が自宅から通学しており、寮・下宿住まいが５％、アパート等に１人暮しが約２７％であった。男子学生と比べて、自宅からの通学者が多く、１人暮しは少ないのが特徴である。

女子の自宅通学生は、ストレスを感じているものの割合が他より高かった。親の庇護の元にいる安心感と、親からの独立や不干渉を望む心の表れなどが様々に関連しているものと分析される。

（２）　生活時間

女子学生の生活時間帯は、男子学生に比べて早い時刻にあり、男子より早寝早起きの傾向が見られる。ただし、女子学生の平均睡眠時間は約７時間で、特に長いわけではない。睡眠時間が５時間以下、あるいは９時間以上の例ではストレスを感じているものの割合が高かった。一般に、男子学生よりも女子学生の方が生活リズムは整っているといえよう。

（３）　食生活、健康状態

女子学生の食生活は、朝食摂取率が高いなど、男子に比べ、平均的には概ね健全といえる。ただし、個別に見ると、摂取食品数が極端に少ない例や、間食の多すぎる例、ストレス下に食欲が大きく変化する例（極端な増減）など、問題がないわけではない。間食に関しては、ストレス状況、体重観との関連が大きく、ストレス感および痩身願望の強いものほど、間食後の不満足感、後悔感が大きい傾向が観察された。

健康状態に関しては約９割の学生が「健康」あるいは「普通」と回答しており、「あまり良くない」、「悪い」と答えたものは１割にすぎなかった。自覚症状として上げられたものの中では、立ちくらみ、起床時の不快感、目の疲れ、肩こり、疲労感等が目立った。

（4）　ストレス状況

約８割の学生が何らかのストレスを感じている。健康状態とストレスとの関連をみると、ストレス感が高くなるほど健康状態の不良な例が増える傾向にあるなど、ストレスは日常の生活行動や健康状態といった、ほとんどあらゆる面に大きな影響を及ぼしていることがわかった。例えば、ストレスを多く感じているものは間食をする率、飲酒、喫煙者率がそれぞれ高く、不定愁訴の自覚も多い。また、こうした傾向は、男子学生に比べて女子学生により多く見られることもわかった。ストレスに関する知識、理解、解消法、対処法を含む適切なストレス対策を、大学としても講じる必要があろう。

（5）　喫煙、飲酒状況

本学女子大生の常習的な喫煙者は約７％、飲酒者は約７％で、男子学生のそれぞれ約２４％，１５％と比べ、いずれも有意に低値であった。女子大生の喫煙者率は、母親、姉妹、友人が喫煙者の場合、高くなり、周囲の影響を受けやすいようである。大学入学後、友人の影響などにより、さしたる理由もなく喫煙を開始するもの、および「すぐにでも喫煙をやめられる」と回答している例が多いことから、依存の程度はあまり高くないものがほとんどであるとしても、健康や母性への影響を考えれば、適切な禁煙教育は必要である。

本学においては、定められた喫煙場所においてのみ喫煙するよう指導がなされているが、喫煙者に対する非喫煙者からの苦情はしばしば寄せられており、一層の対策が必要であろう。ちなみに、学内の会議、事務局等は禁煙である。

本学の女子大生においては、大量飲酒などの問題飲酒行動はほとんど見られないといってよい。ただし、コンパなどにおいて、酔うことのみを目的とした飲酒形態や、飲酒の強要などが行われることのないよう指導、注意を行うことは重要であろう。

（６）　　体格、体重観

若い女性の一般的傾向の例に漏れず、本学においても学生の痩身願望は顕著である。８割以上の学生が「やせたい」と答えているが、実際にやせる必要のあるものは、6%足らずである。現在の体重が「標準」であるものの約６８％がさらに細い「るいそう」を望み、現在「るいそう」の体格にある学生の実に９９％が現体格あるいはそれ以下の「るいそう」を望んでいる。希望体格の設定が適切である例は、ごくわずかで、大半がやせ過ぎの体格を理想としていることがわかる。また、希望体重の設定が甚だしく不適切である例（著しいるいそうを希望する、など）では、食生活、生活リズム、ストレスの状況、不定愁訴などに偏り、乱れが大きく、生活習慣そのものに重大な欠陥がある可能性が高い。

興味深いことに、「やせたい」と望むものは、一般にストレス時に食欲が増加するなど、太りやすい状況にあり、「太りたい」と望むものは逆にストレス時に食欲が減退するため、さらにやせてしまう、といった本来の希望に反するような現象が見られた。

青年期女子にとって大学在学期は、心身の成熟期および母性の準備期として、大変重要な時期である。いたずらに痩身願望に振り回されることなく、健康保持・増進をもたらす生活習慣、特に食生活の確立が切に望まれる。なお、本学においては、総合演習、医学一般、看護学、家庭の医学などの演習、講義でこれらの問題を取り上げ、適切な知識と理解の浸透を図っている。

資料 1

平成10年度

◆ 東海女子大学　若鮎寮案内 ◆

本学には、自宅通学が困難な方（通学時間に片道 2 時間 30 分以上を要する方）を対象にした学生寮が２棟あります。寮ならではの安心感のもとに、勉学に、サークル・クラブ活動に励み、寮友と共に協力し合い、充実した学生生活を過ごせます。

寮ってどんな感じ?

	第１若鮎寮	第２若鮎寮
収容人数	４０名	４２名
部屋の広さ	２２．０㎡	２０．０㎡
定員	１室　２名	
設備	洋室・シングルベッド・ロッカー 机・椅子・冬季暖房完備	洋室・シングルベッド・ロッカー 机・椅子・ユニットバス・ 冷暖房完備
その他	浴室・洗濯場・洗面所・休養室 自炊室（コイン式ガス）　等 **共同利用**	洗濯場・洗面所・面談室 自炊室（コイン式ガス）　等 **共同利用**
食堂	東海女子短期大学と共同	
入寮費	入寮時のみ　３０，０００円	
寮費	半期　８４，０００円	半期　１３２，０００円
食費	朝夕の２食　２０，０００円 程度（毎月集金）	
在寮期間	上限　２年間　（２年次終了まで）	

※半期分の寮費を前納して頂きます。途中で退寮されても残額は返還できませんので、あらかじめご承知おき下さい。

資料 2

サークル一覧表

サークル名	顧問名	サークル長	
		学年・学科	氏名
〈クラブ〉			
バドミントン	藺和真	4年・人間	湯田絵里子
テニス	宮本邦雄	4年・美学	中村あつ子
馬術	校條善夫	3年・美学	松井麻衣
ソフトボール	矢澤久史	4年・美学	吉田美穂
少林寺拳法	神谷和孝	2年・人間	神林渚
競技スキー	川島大司	4年・人間	森下奈穂
弓道	大西信行	3年・人間	泉亜希子
ホッケー	小林和典（短大）	4年・英米	山下敬子
バレーボール	桑原信治（短大）	4年・人間	松田千鶴
ソフトテニス	藤井良恵（短大）	4年・人間	大北直子
手話	酒向一次	3年・人間	大川内恵
詩舞	長谷川博一	3年・美学	牧野内愛
ボランティア	白幡富夫	2年・人間	金山さや香
漫画＆アニメーション	中山功	2年・美学	鈴木理香子
軽音楽	北山長貴	3年・人間	瀬山香織
マイコン	篠田秀弘	3年・人間	戸川美奈子
メヌート混声合唱	大野昭英	2年・英米	深谷真穂
野球	大西信行	3年・人間	徳井幸恵

〈同好会〉			
ブラスバンド	川口豊	3年・英米	林真奈美
心理学研究	生田純子	3年・人間	田中祥子
東海女声合唱団	川口豊	2年・人間	工藤祐子
美術	中山功	3年・美学	寺田陽子
バスケットボール	中山功	2年・美学	岡崎梨絵
学生放送	校條善夫	3年・英米	船崎藍
柔道	天野博江（短大）	3年・人間	吉川志緒玲
DANCE	岡本真理子	4年・美学	伊藤香織

〈研究会〉			
フィールドイベント	校條善夫	3年・人間	加藤麻起子
映画	神戸博	2年・英米	長坂尚美
華道	松永由弥子	4年・人間	八木恵美
リボン・クラッセ	岡本重温	4年・英米	佐野仁美
English Newspaper	ジョセフ・スタボイ	4年・人間	酒井典代
ラクロス	長谷川博一	3年・英米	海道浩子
バレエダンス	富田理恵	2年・人間	川端恵里佳
着付け	岡本重温	3年・人間	川上浩子

資料3

平成11年度

就職関係年間スケジュール（予定）

【３年生対象】

〔平成11年６月〕

就職指導室

平成11年　４月　５月　６月　７月　８月　１０月　１１月　１２月

就職活動例

- 就職意識の醸成
- 自分発見・自己分析
- 職種研究・企業研究

就職指導

- 3年生へ進級
- ○4/9（金）第１回就職ガイダンス
- ○面談（随時）
- ◎6/24（木）第２回就職ガイダンス「総合ガイダンス（就職活動を始める前に）」
- ①7/10（土）ガイダンス講座「キャリアガイダンス」
- ②7/20（火）～21（水）早期合宿プログラム「BP活動合宿」
- ③7/22（木）～30（金）公務員試験対策及び一般企業就職試験対策のための「教養科目集中講座」
- ④10/2（土）ガイダンス講座「自己分析」※ガイダンステキスト配付
- ⑤10/9（土）模擬試験対策「一般常識テスト－Ⅰ」
- ⑥10/30（土）～31（日）早期合宿プログラム「自己分析・自己PR合宿」
- ⑦11/6（土）ガイダンス講座「業界研究」
- ⑧11/13（土）模擬試験対策「一般常識テスト－Ⅱ」
- ⑨11/20（土）ガイダンス講座「自己表現・小論文」
- ⑩11/27（土）模擬試験対策「自己表現力テスト」
- ⑪12/4（土）直前集中講座「小論分・エントリーシート対策」

平成12年　１月　２月　３月　４月　５月　６月　７月　８月　９月　１０月

就職活動例

- 選社条件検討
- 会社訪問・ＯＧ訪問
- 面接・テスト期間
- 資料請求期間（書籍・インターネット等）
- 仮内定・内々定獲得
- 内定
- （企業展・会社説明会）企業セミナー参加期間

就職指導

- ⑫1/22（土）ガイダンス講座「面接対策・マナー」
- ⑬2/21（月）ガイダンス講座「面接強化対策」
- ⑭2/26（土）～27（日）直前集中講座「面接強化対策」
- 4年生へ進級

資料４

就職に関する説明資料

就職協定が廃止され３年が経過しました。この経過の中での特色は採用活動の一段の早期化と厳選化があげられます。

一方、雇用環境は、終身雇用制度・年功序列賃金制の崩壊や、失業率は史上最悪を記録し、これらが新規学卒者の就職難に直結するなど、従来には見られない厳しい状況にあります。

また、就職難の要因には、不況・リストラ等だけでなく、雇用のミスマッチ（企業の求めている能力・資格がない）があるとも言われています。。

本学では、このような状況の中、学生指導の方針として「社会に役立つ学生」「企業の求める人材作り」を重点に、４年生は勿論、１年生から３年生まで、全学生を対象に徹底指導しています。

本学の就職状況と方向

我が国の産業構造は、戦後経済発展の中で概略、下記のようにシフトしています。

＊ 製造業（二次産業）主体から非製造業（三次産業）へ

＊ 大企業中心から、中堅･中小企業へ（含むベンチャービジネス）

従来、学生の就職先選びは、どちらかと言えば、大企業（有名企業）に偏向していた傾向が強くありましたが、前記のように産業構造が変化している以上、その状況にマッチした対応が必要となります。

また、特に大企業は過剰雇用という問題を抱え、当面採用面で明るい材料は見込めない状況です。

一方、中堅・中小企業、ベンチャービジネスには元気で多くの人材を必要とする企業が多くあると言われています。

本学では、この社会の動きの中で各企業等との連携を深め、あらゆる情報を集めつつ、就職指導を成し、そして、自分の能力を遺憾なく発揮出来る元気な中堅・中小企業・ベンチャービジネスや、今後一段と拡大が見込まれる福祉市場を最重点に進め本年度も多くの実績を挙げています。

最近における就職先動向

１．全体的動向

産業構造の変化を反映し、非製造業分野の流通、サービス等が増加傾向にあります。職種別の動きは、男女雇用機会均等法改正の流れの中、男性と同じ営業・販売を選ぶ学生が非常に多くなっています。

また、最近の傾向として、英検、情報処理、社会福祉士、司書、学芸員、教員等各種資格を軸に就職する学生が多くなっています。

2．地域的動向

全体的には、女子学生という要因もあって出身県に戻るUターンケースが多いが、就職の不利な地域、企業立地の少ない地域等の要因から、本学に近い愛知・岐阜等で定着するケースも多くあります。

3．学科別傾向

最近の不況・リストラ等の要因から、殆ど採用が見込めない業種もあるため、従来ほど学科別の強い特色（特に英米・美学）はなくなってきています。

本学の学生指導のポイントは、自分の持つ能力・資格を活かしつつ、どんな時代にも、どんな業種にも幅広く対応出来る人材作り。（多様化した就職先選び）
これが本学の指導のテーマであります。

（1）英米文化学科

語学力を活かした航空、旅行、教員の他、銀行等の一般企業が多くあります。

（主な就職先）　全日空、名古屋国際サービス、名古屋国際エアラインサービス、ＪＴＢ、近畿日本ツーリスト、日通旅行、東海銀行、あさひ銀行、十六銀行、日興證券、津地方法務局、陸上自衛隊、郵便局、愛知県庁、その他各地学校教員

（2）人間関係学科

心理学専攻の卒業生の多くは、各病院のカウンセラー、ケースワーカー、言語療法士として活躍しています。

（主な就職先）　各務原病院、森ｸﾘﾆｯｸ、青樹会病院、大府病院、豊明病院、岐阜市社会福祉事業団、岐阜第三老人ホーム、掛川市役所、大府市役所、西尾市立図書館

現代社会学コースの卒業生は福祉関係施設の他は、一般企業が大半を占めています。

（主な就職先）　あさけ学園、檜の里、八楽児童寮、はまなこ荘、奥飛観光開発、ホテルセンチュリーイカヤ、リゾートトラスト、JA 可児、JA 海部、岐阜市職員労働組合連合会

社会福祉コースの卒業生は社会福祉士の国家試験合格率６７％（前年度７５％）の実績により全国の病院施設等で専門職として能力を発揮しています。

（主な就職先）　各務原病院、湖山病院、八幡青樹会病院、豊川病院、野依福祉村病院、慈恵中央病院、西濃病院、小泉病院

教育学専攻の卒業生は、高校・中学校・小学校の教員の他はほとんど一般企業で占められています。

（主な就職先）　沼宮内高校、港中学校、松枝小学校、岐阜県庁、陸上自衛隊、十六銀行、南都銀行、日本特殊陶業、大鵬薬品工業、日本グラクソ、大日本土木、N.T.T、東海テレビ、ユニー

（3）美学美術史学科

学芸員として美術館に専門性を活かす。また、印刷関係に就職する卒業生の他は、ほとんど全業種に及ぶなど、就職先は多岐にわたっています。

（主な就職先）　中仙道みたけ館、大阪人権博物館、岐阜県美術館、飛騨高山美術館、雪梁舎美術館、ティファニー美術館、システィー美術館、でんきの科学館、新日本印刷、岐阜製版、三晃印刷、西川印刷、幸栄印刷、東京法令出版、常陽銀行、岐阜銀行、富士信用金庫、大塚家具、ツーリスト愛知、アルペン、日建設計、イビデン

企業における卒業生の動向

卒業生は大企業を始め、中堅・中小企業、福祉関係等の分野で活躍しています。特に仕事に対する取り組み姿勢、積極性については高い評価を得ており、毎年多くの求人票が送られてくる要因にもなっています。

この点は、本人の努力はもとより、先生方の日頃の学生達への情熱指導がいかに大きいかが物語っております。

就職指導の特色

学生の本分は、学力をつけること。そして自己の成長に役立つ資格を取得する。そして、社会人としての常識を身につける。この観点に立って大学を挙げて指導をしています。就職指導は３年生だけでなく、１～２年生を含め機会あるごとに、更に採用活動の早期化に合わせるべく、本年は７月から（従来は１０月～）開始予定です。

大企業との関係は東海４県を中心に強力な連携の中、情報収集と折衝により採用に結びつけています。

４年生の保護者に対しては、４月の就職セミナーを通じ、就職指導の内容、学生の企業選択等について説明し、万全を期しています。

公務員志望者に対する指導

全体的には民間企業不振の中、安定志向の強い公務員志望者は激増し、現状、超難関の狭き門となっている。この対策のため春・夏に各１週間程で２・３年生対象の公務員対策集中講座を実施しています。

更に、自衛隊、警察、家庭裁判所調査官等によるセミナー開催で、面接・筆記試験対策指導を願うなど、万全の体制で臨んでいます。

ＯＧの支援体制

卒業生の中で人気の高い企業に勤務しているＯＧにも来学願い、各セミナーを開催しています。

特に、元全日空の客室乗務員によるグループ別面接・マナー講座は評価が高く、大きな効果を発揮しています。

ハード・ソフトの充実

就職情報の収集は、今インターネットが主流となりつつあるが、その対策としてパソコン１００台の設置と図書館には日経テレコン導入により素早く情報を入手できるよう、ハード・ソフト両面で充実を図っています。

資格取得指導について

厳しい時代の就職難を乗り切るためには、最低限の資格取得は必要です。
このため各先生のご指導によりシステムアドミニストレータ試験、英検、社会福祉士、秘書技能検定、ビジネス文書検定等の受験対策講座を実施しています。

就職を確実にするには、学生自身が社会が要求する武器を持つことが重要です。
また、強い武器があれば企業にとっても必要な人材と評価され、期待されます。
今後、このような学生を社会により多く送り出せるよう、大学を挙げて努力し、本年度もより高い就職率達成に向け、全学一丸となって頑張って参ります。

文責：山田就職指導室長

資料５

食生活と喫煙に関する調査

学籍番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 氏　名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

年　齢 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 性　別 ＿＿＿＿＿＿＿＿

通学方法（１．自宅通学　　２．学　寮　　３．下　宿）

あなたの現在の食生活や喫煙に対する考え方などをお尋ねしますので、ありのままを答え、該当するものを○で囲んで下さい。

I　日常の起床及び就寝時刻と睡眠時間をお尋ねします。

(1) 起　床　1．6時以前　2．6時台　3．7時台　4．8時台　5．9時台
6．それ以降（＿＿時頃）　7．その他（　　）

(2) 就　寝　1．10時以前　2．10時台　3．11時台　4．12時台
5．それ以降（　　）　6．その他（　　）

(3) 睡眠時間　1．5時間　2．6時間　3．7時間　4．8時間　5．9時間
6．その他（　　）

II　あなたの身体状況等についてお尋ねします。

(1) 身長＿＿＿＿＿cm　体重＿＿＿＿＿kg

(2) 現在の体重についてどう思いますか。
1．痩せたい（理想体重＿＿＿＿＿kg）　2．太りたい（理想体重＿＿＿＿＿kg）
3．このままで良い

III　あなたの食生活についてお尋ねします。

(1) あなたは日常的に次の食品や料理をどれぐらい食べていますか。該当するものに○印をつけて下さい。

① 米　飯　1．ほぼ毎日　2．週3回以上　3．週1、2回
4．月1～3回　5．ほとんど食べない

② パ　ン　1．ほぼ毎日　2．週3回以上　3．週1、2回
4．月1～3回　5．ほとんど食べない

③ 肉　類　1．ほぼ毎日　2．週3回以上　3．週1、2回
4．月1～3回　5．ほとんど食べない

④ 魚介類　1．ほぼ毎日　2．週3回以上　3．週1、2回
4．月1～3回　5．ほとんど食べない

⑤ 卵　1．ほぼ毎日　2．週3回以上　3．週1、2回
4．月1～3回　5．ほとんど食べない

⑥ 大豆製品　*　1．ほぼ毎日　2．週3回以上　3．週1、2回
4．月1～3回　5．ほとんど食べない

⑦ 牛　乳　1．ほぼ毎日　2．週3回以上　3．週1、2回
4．月1～3回　5．ほとんど飲まない

⑧ 芋　類	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど食べない		
⑨ 濃い色の野菜 #	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど食べない		
⑩ 淡い色の野菜 ★	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど食べない		
⑪ 果　物	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど食べない		
⑫ 海藻類	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど食べない		
⑬ 清涼飲料水	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど飲まない		
⑭ 菓子類	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど食べない		
⑮ インスタント食品	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど食べない		
⑯ 漬　物	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど食べない		
⑰ 緑　茶	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど飲まない		
⑱ 紅　茶	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど飲まない		
⑲ コーヒー	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど飲まない		
⑳ 酒　類	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど飲まない		
㉑ ダイエット食品 ◇	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど食べない		
㉒ 栄養強化食品 ◆	1．ほぼ毎日	2．週3回以上	3．週1、2回	
	4．月1～3回	5．ほとんど食べない		

＊……豆腐・納豆・味噌など　　#……にんじん・ほうれん草・にら・かぼちゃなど
★……レタス・キャベツ・なす・玉ねぎなど　　◇……低カロリー食品など
◆……健康食品など

(2) 日常的な食事についてお尋ねします。

① 下の表に日常的な食事をする時刻、食事に要する時間を記入し、また食事の量については1から5の中から1つだけ○をつけて下さい。

	食事をする時刻	食事に要する時間	食　事　の　量
朝食	時　分	分	1．食べない　2．物足りない　3．腹八分目 4．ほどよく満腹　5．苦しくなる位
昼食	時　分	分	1．食べない　2．物足りない　3．腹八分目 4．ほどよく満腹　5．苦しくなる位
夕食	時　分	分	1．食べない　2．物足りない　3．腹八分目 4．ほどよく満腹　5．苦しくなる位

② 間食についてお尋ねします。

A 昨日した間食の量は、1～4のうちどの位でしたか。1つ○をつけて下さい。

a 起きてから昼食まで　1．食べていない　2．ほんの少し（アメ、ジュースなど）
3．腹八分目　4．お腹いっぱい食べた

b 昼食から夕食まで　1．食べていない　2．ほんの少し（アメ、ジュースなど）
3．腹八分目　4．お腹いっぱい食べた

c 夕食から寝るまで　1．食べていない　2．ほんの少し（アメ、ジュースなど）
3．腹八分目　4．お腹いっぱい食べた

B どうして間食するのですか。（あてはまるもの全てに○をつけて下さい）

1．お腹が空いた・喉が渇いた　2．口さみしかったから
3．他にすることがなかったから　4．嫌な事を忘れようとしたから
5．いらいらしたから　6．残すのがもったいなかったから
7．一緒にいる人が食べていたからつられて
8．その他（　　）

C 間食した後どんな気持ちになりますか。

1．おいしいものを食べて良かった　2．食べ過ぎて後悔する　3．スカットする
4．太るのではと不安になる　5．一応空腹が満たされた　6．別に何も思わない
7．その他（　　）

(3) 何か精神的なショックやストレスを感じた時、食欲に変化はありますか。

1．食欲が無くなることが多い　2．どちらかといえば食欲が無くなる
3．やけ食いをする　4．どちらかといえば食欲が増す　5．変化はない
6．その他（　　）

(4) あなたは朝食をきちんと食べますか。

1．毎日食べる　2．ときどき食べる　3．ほとんど食べない　4．食べない

(5) 外食についてお尋ねします。

① あなたはよく外食をしますか。

1．よくする　2．ときどきする　3．ほとんどしない　4．食べない

（1と2に○をつけた人は②、③にお答え下さい。）

② 1日のうち外食が一番多いのはどれですか。

1．朝食　2．昼食　3．夕食

③ その内容はどういったものが多いですか。

1．和食　2．洋食　3．中華　4．ファーストフード　5．コンビニ

6．その他（　　）

※ 自分が健康的な食生活をしているかどうか考えてみましょう。

下に記した番号の答えのうち1・2・3・4がそれぞれいくつあったか表に書き込み、合計点を計算して下さい。

問題番号　Ⅲ－(2)－②－A
Ⅲ－(4)
Ⅲ－(5)－①

	個　数	得　点
1（4点）	個	
2（3点）	個	
3（2点）	個	
4（1点）	個	
合計得点		点

※ 合計点の評価

合計点	評　価
16～20点	良い食生活と言えます。後は栄養状態が良ければ言うことなし！
11～15点	ボーダーをさまよっています。良い食生活を心がけましょう。
5～10点	このままの食生活では、将来健康な生活を送れるとは思えません。直ちに改善して下さい。

I　現在の住居状態をお尋ねします。

(1) ①　自宅（家族と同居）
　　②　食事付の寮・下宿（ 1．1人で　 2．2人で　 3．3人以上で ）
　　③　食事なしの寮・下宿・アパート（ 1．1人で　 2．2人で　 3．3人以上で ）
　　④　その他（　　）

(2) 同居人は何人いますか。　男性（　　）人　女性（　　）人

(3) 同居者中喫煙者は何人いますか。　男性（　　）人　女性（　　）人

II　あなたの周囲の状況についてお尋ねします。
（死亡している方の場合は生前の状態に該当する所にお答え下さい。）

(1) あなたのお父さんはタバコを吸っていますか。
　　1．吸ったことがない　2．以前は吸っていたが今は吸っていない　3．吸っている
　　4．わからない　5．父親がいないのでこの質問は自分には当てはまらない

(2) あなたのお母さんはタバコを吸っていますか。
　　1．吸ったことがない　2．以前は吸っていたが今は吸っていない　3．吸っている
　　4．わからない　5．母親がいないのでこの質問は自分には当てはまらない

(3) あなたの兄弟はタバコを吸っていますか。
　　1．誰も吸わない　2．1人だけ吸う　3．2人吸う　4．3人吸う　5．4人以上吸う
　　6．わからない　7．兄弟がいないのでこの質問は自分には当てはまらない

(4) あなたの姉妹はタバコを吸っていますか。
　　1．誰も吸わない　2．1人だけ吸う　3．2人吸う　4．3人吸う　5．4人以上吸う
　　6．わからない　7．姉妹がいないのでこの質問は自分には当てはまらない

(5) あなたの仲の良い友達は何人いますか。　男性（　　）人　女性（　　）人

(6) このうちタバコを吸う人は何人いますか。　男性（　　）人　女性（　　）人

III　あなたの喫煙状況についてお尋ねします。

(1) タバコを吸ったことがありますか。
　　1．吸ったことはない。（A群の質問にお答え下さい）
　　2．吸っていたことはあるが今は吸っていない（B群の質問にお答え下さい）
　　3．吸っている（C群の質問にお答え下さい）

A群

(1) 喫煙は健康に害をもたらすと思いますか。
　1．何らかの害はあると思う　2．多少はあるだろうが、たいしたことはないと思う
　3．思わない　4．わからない

(2) 喫煙は他人に迷惑をかけると思いますか。
　1．何らかの迷惑はかかると思う　2．多少はかかるだろうが、たいしたことはないと思う
　3．思わない　4．わからない

(3) タバコを吸いたいと思いますか。
　1．思う　2．思わない　3．わからない

(4) 喫煙者をどう思いますか。
　1．迷惑である　2．腹が立つ　3．別に何とも思わない　4．かっこいいと思う
　5．その他（　　）

(5) なぜタバコを吸わないのですか。（複数回答可）
　1．健康に悪いから　2．吸いたくないから　3．人に迷惑がかかるから
　4．タバコの匂いがつくのが嫌だから　5．1度吸うと、止められなくなりそうだから
　6．その他（　　）

B群

(1) はじめてタバコを口にしたのはいつでしたか。
1．小学生の頃　2．中学生の頃　3．高校生の頃　4．大学に入ってから

(2) 喫煙のきっかけはどんな理由からでしたか。当てはまるもの全てに○印をつけて下さい。
1．父親の影響　2．母親の影響　3．兄弟の影響　4．姉妹の影響
5．友人の影響　6．何となく好奇心で　6．かっこいいと思った
7．やせられると思った　8．悩み事があった（学業、友人関係、親子関係など）
9．TVのコマーシャルで興味を持った　10．電車の中や街角の広告で興味を持った
11．その他（　　）

(3) タバコを継続して吸うようになったのは、いつからですか。
1．小学生の頃　2．中学生の頃　3．高校生の頃　4．大学に入ってから

(4) 喫煙していた期間はどれくらいですか。
1．1度吸っただけ　2．数度吸っただけ　3．半年くらい　4．1年間
5．2年間　6．3年間　7．4年以上（　　年くらい）

(5) 何歳でタバコを止めましたか。
（　　）歳

(6) 喫煙を止めた主な理由は何ですか。
1．健康状態が悪くなったので（内容　　）
2．健康に悪いと思ったので（内容　　）
3．家族に勧められた　4．友人に勧められた　5．吸いたくなくなったので
6．お金がかかるから　7．他人に迷惑をかけると思った
8．その他（　　）

(7) 喫煙の頻度はどれくらいでしたか。
1．毎日吸っていた〔ア．5本以下　イ．6～10本　ウ．11～15本　エ．16～20本
オ．21～30本　カ．31～40本　キ．40本以上（　　）〕
2．週に数回　3．月に2～3回　4．それ以下（　　）

(8) 喫煙は自分の健康に害をもたらすと思いますか。
1．何らかの害はあると思う　2．多少はあるだろうが、たいしたことはないと思う
3．思わない　4．わからない

(9) 喫煙は他人に迷惑をかけると思いますか。
1．何らかの迷惑をかけると思う　2．多少はあるだろうが、たいしたことはないと思う
3．思わない　4．わからない

(10) あなたが禁煙された頃のことについてお尋ねします。
① 禁煙実行事に何らかの苦痛がありましたか。
1．ある　2．ない
（1に○印をつけた方のみ②にお答え下さい。）
② その時の主な苦痛を具体的に書いて下さい。

(11) 禁煙後に何らか変化が見られましたか。当てはまるものに○印をつけて下さい。
① 体　重（1．増えた　2．変わらない　3．減った）
② 間　食（1．増えた　2．変わらない　3．減った）
③ 飲酒量（1．増えた　2．変わらない　3．減った）
④ 食　欲（1．増えた　2．変わらない　3．減った）
⑤ 味　覚（1．敏感になった　2．変わらない　3．鈍感になった）
⑥ 体　調（1．良くなった　2．変わらない　3．悪くなった）
⑦ その他（　　）

C群

(1) 初めてタバコを口にしたのはいつですか。

1．小学生の頃　2．中学生の頃　3．高校生の頃　4．大学に入ってから

(2) 喫煙のきっかけはどんな理由からでしたか。当てはまるもの全てに○印をつけて下さい。

1．父親の影響　2．母親の影響　3．兄弟の影響　4．姉妹の影響
5．友人の影響　6．何となく好奇心で　7．かっこいいと思った
8．やせられると思った　9．悩み事があった（学業、友人関係、親子関係など）
10．TVのコマーシャルで興味を持った　11．電車の中や街角の広告で興味を持った
12．その他（　　）

(3) タバコを継続して吸うようになったのは、いつからですか。

1．小学生の頃　2．中学生の頃　3．高校生の頃　4．大学に入ってから

(4) 喫煙の頻度についてお聞きします。

1．毎日吸う〔ア．5本以下　イ．6～10本　ウ．11～15本　エ．16～20本
オ．21～30本　カ．31～40本　キ．40本以上（　　）〕
2．週に数回　3．月に2～3回　4．それ以下（　　）

(5) 現在のあなたの喫煙が、将来のあなたの健康に害を及ぼすと思いますか。

1．何らかの害はあると思う　2．多少はあるだろうが、たいしたことはないと思う
3．思わない　4．わからない

(6) 喫煙は他人に迷惑をかけると思いますか。

1．何らかの迷惑をかけると思う　2．多少はあるだろうが、たいしたことはないと思う
3．思わない　4．わからない

(7) タバコの嗜好程度はどのくらうですか。

1．すぐにでも止められる　2．すぐには無理だが、止められると思う
3．止める努力をしたことがないので分からないが、止められないと思う
4．止められない

(8) あなたの禁煙体験についてお尋ねします。

① 喫煙開始後、禁煙しようと思ったことはありますか。
1．ある　2．ない
（1に○印をつけた方のみ②にお答え下さい。）

② 禁煙できなかった主な理由は何ですか。思い当たるもの全てに○印をつけて下さい。
1．周囲の喫煙者の誘惑に負けた　2．太り始めてしまったので
3．勉学の能率が落ちた　4．喫煙以外にストレス解消法が見つからなかった
5．心身の状態が悪くなった　6．その他（　　）
（5に○印をつけた方のみ③にお答え下さい。）

③ その時の症状を具体的に書いて下さい。

(9) 主な喫煙場所はどこですか。当てはまるもの全てに○印をつけて下さい。

1．学校の休息室　2．自宅　3．友人宅　4．喫茶店・ファーストフード店等
5．公共交通機関等の待合室　6．歩きながら　7．自家用車の中　8．居酒屋
9．カラオケBOX・ゲームセンター・パチンコ店等　10．その他（　　）

(10) なぜタバコを吸うのですか。当てはまるもの全てに○印をつけて下さい。

1．口さみしいから　2．ダイエットのため　3．ストレス解消法の1つ
4．気が付いたら吸っている　5．みんなが吸っているから　6．ただ何となく
7．吸わずにはいられない　8．タバコが好きだから
9．その他（　　）

資料6

飲酒とストレス・健康に関する調査

学籍番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 氏　名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

年　齢 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 性　別 ＿＿＿＿＿＿＿＿

出 身 校（1．国立　2．府立　3．県立　4．市立　5．私立）高等学校

通学方法（1．自宅通学　　2．学　寮　　3．下　宿）

クラブ活動（1．運動系　2．文化系　3．同好会・サークル　4．所属なし）

あなたの飲酒経験や飲酒に対する考え方などをお尋ねしますので、ありのままを答えて下さい。該当するものを○で囲んで下さい。

（注：酒とはアルコール類を含むものを示す）

Ⅰ．飲酒に関してお聞きします。

(1) あなたは酒を飲むことが好きですか。

1．好き　2．どちらとも言えない　3．好きではない

(2) あなたは現在酒を飲みますか。

1．よく飲む　2．付き合い程度に飲む　3．全く飲まない

(3) あなたはいつ頃より飲み始めましたか。

1．大学生頃　2．高3頃　3．高2頃　4．高1頃　5．中3頃
6．中2頃　7．中1頃　8．小学生頃　9．未だ飲んだことがない

(4) あなたが酒を飲み始めたきっかけは何でしたか。

1．付き合い　2．コンパ　3．好奇心より　4．親のすすめ
5．その他（　　）

(5) あなたは主に何を飲みますか。

1．日本酒　2．ビール　3．ウイスキー　4．ワイン　5．焼酎
6．ブランデー　7．カクテル　8．果実酒　9．その他（　　）

(6) あなたは付き合いで多量に飲むことがありますか。

1．毎日ある　2．週1～2回ある　3．月1～2回ある　4．年1～2回ある
5．ほとんどない

その時に飲む量を書いて下さい。

日本酒＿＿＿合位　ビール＿＿＿本位　ウイスキーW＿＿＿杯　焼酎＿＿＿合位

(7) あなたがこの1年で最高に飲んだ時の種類と量を書いて下さい。

（例：ウイスキー水割り13杯）

(8) あなたは二日酔いで学校を休んだり、遅刻したことがありますか。

1．よくある　2．たまにある　3．ない

(9) あなたは酒を飲んで事故を起こしたことがありますか。

1．交通事故を起こした　2．ケガをした　3．他人に迷惑をかけた
4．家族に迷惑をかけた　5．ない

(10) あなたはなぜ酒を飲むのですか。その理由を2つ選んで下さい。

1．酒の味が好きだから　2．食欲増進のため　3．疲れを取るため
4．気分転換のため　5．酔うため　6．付き合いに必要だから
7．大人だから飲むのが当然　8．特に理由はないが飲みたいから飲む
9．その他（　　）

(11) あなたはこの1週間の内で何日酒を飲みましたか。

1．毎日　2．6日　3．5日　4．4日　5．3日　6．2日　7．1日　8．全くなし

(12) あなたは学生としては、多く飲む方だと思いますか。

1．多く飲む方と思う　2．普通　3．少ない方と思う　4．わからない

(13) あなたは主にどこで酒を飲みますか。

1．自宅　2．下宿　3．友人・知人宅　4．一杯飲み屋（居酒屋を含む）

5．スナック　6．バー・キャバレー　7．その他（　　）

(14) あなたは酒を飲むとどんな状態になりますか。

1．陽気で朗らかになる　2．沈む　3．眠くなる　4．気が大きくなる

5．乱暴になる　6．意識が霧らぐ　7．頭が冴える　8．変わらない

(15) あなたは酒に強いと思いますか。

1．強いと思う　2．普通　3．弱いと思う　4．分からない

(16) あなたは酒を飲むと顔が赤くなりますか。

1．赤くなる　2．少し赤くなる　3．変わらない　4．青くなる

(17) あなたはどれくらいの頻度で酒を飲みますか。

1．毎日飲む　2．週4回以上飲む　3．週2～3回位飲む　4．週1回位飲む

5．ほとんど飲まない　6．不規則だが飲む時は片寄る

(18) あなたの1カ月当たりの飲酒の費用はどれくらいですか。

1．10,000円以上　2．10,000～5,000円　3．5,000～3,000円

4．3,000～1,000円　5．1,000～500円　6．500円未満

(19) あなたは学生生活の上で、酒は必要と思いますか。

1．必要と思う　2．時に必要　3．必要ではない　4．分からない

(20) あなたの人生で酒は有益と思いますか。

1．有益と思う　2．時に有益　3．思わない　4．分からない

(21) あなたは酒を飲む時にタバコを吸いますか。

1．吸う（1．普通より本数が多くなる　2．いつもと同じくらい　3．少くなる）

2．吸わない

(22) クラブ活動やサークル活動で酒を飲む機会がありますか。

1．ある（1年にどれ位ですか＿＿＿回位）　2．ない

(23) 最近酒を飲む女子学生が増えてきましたが、あなたはどう思いますか。

1．良いことだと思う　2．良くないことだと思う　3．やめるべきだ

4．なんとも言えない　5．分からない

(24) あなたは急性アルコール中毒の症状を知っていますか。

1．知っている　2．知らない

(25) 最近学生のなかでイッキ飲みが流行しているようですが、あなたはその経験がありますか。

1．ある　2．ない

—2—

(26) あなたと一緒に飲んでいる友が、イッキ飲みで意識不明のような状態になった経験がありますか。

1．ある　　2．ない　　3．分からない

(27) あなたの身近な人でアルコール中毒と思われる人がいますか。

1．ある　　2．ない　　3．分からない

(28) あなた自身、酒を飲んだために身体に異常が起き病院へ行ったことがありますか。

1．　ある　　2．　ない

(29) あなたの父母は酒を飲みますか。

父 …… 1．飲む　　2．飲まない　　3．分からない

母 …… 1．飲む　　2．飲まない　　3．分からない

(30) 現在あなたの健康状態はどうですか。

1．健康である　　2．普通　　3．あまり良くない　　4．悪い　　5．分からない

自分が健康的な酒の飲み方をしているかどうか考えてみましょう。下に記した番号の問題について選んだ答えの数字を表に書き写し、合計値を計算して下さい。

（ 例 ：(2)の問題で 3 に○をつけた場合、(2)の欄の下に 3 と書く ）

問　題　番　号	例 (2)	(2)	(6)	(8)	(11)	(12)	(17)	(18)	(25)	(28)	計
○をつけた番号	3										

※　合計点の評価

合 計 点	評　　価
9 ～ 14点	気をつけて下さい。このままでは体をこわします。健康のためもう少し飲むのを控えましょう。
15 ～ 26点	飲み方としては良い飲み方でしょう。これからも無茶な飲み方はしないようにしましょう。
27 ～ 39点	あまり酒を飲まない人ですか。付き合い程度の酒が一番おいしいものです。これからもこのペースでいきましょう。

II　ストレスについてお聞きします。現在あなたはストレスを感じていますか。

1．感じていない　　2．少し感じる　　3．ストレスがたまっていると感じる

4．相当のストレスがたまっていると感じる

III　あなたは下のような自覚症状はありますか。当てはまるものを○で囲んで下さい。

1．頭がスッキリしていない（頭が重い）

2．目が疲れる（以前に比べると目が疲れることが多い）

3．ときどき鼻づまりすることがある（鼻の具合がおかしいことがある）

4．目まいを感じることがある（以前は全くなかった）

5．ときどき立ちくらみしそうになる（一瞬、クラクラッとすることがある）

6．耳鳴りがすることがある（以前はなかった）

7．しばしば口内炎ができる（以前と比べて口内炎ができやすくなった）

8．のどが痛くなることが多い（のどがヒリヒリすることがある）

9．舌が白くなっていることが多い（以前は正常だった）

10．今まで好きだったものをそう食べたいとも思わなくなった（食物の好みが変わって来ている）

11．食物が胃にもたれるような気がする（何となく胃の具合がおかしい）

12．腹がはったり、痛んだりする（下痢と便秘を交互にくり返したりする）

13．肩がこる（頭も重い）

14．背中や腰が痛くなることがある（以前はあまりなかった）

15．なかなか疲れがとれない（以前に比べると疲れがたまりやすくなった）

16．このごろ体重が減った（食欲がなくなる場合もある）

17．何かするとすぐ疲れる（以前に比べると疲れやすくなった）

18．朝、気持ちよく起きられないことがある（前日の疲れが残っているような気がする）

19．仕事に対してやる気がでない（集中力もなくなってきた）

20．寝つきが悪い（なかなか眠れない）

21．夢をみることが多い（以前はそうでもなかった）

22．夜中の1時、2時頃に目がさめてしまう。（そのあと寝つけないことが多い）

23．急に息苦しくなることがある（空気が足りないような感じがする）

24．ときどき動悸をうつことがある（以前はなかった）

25．胸が痛くなることがある（胸がギュッとしめつけられるような感じがする）

26．よくカゼをひく（しかも治りにくい）

27．ちょっとしたことでも腹がたつ（イライラすることが多い）

28. 手足が冷たいことが多い（以前はあまりなかった）

29. 手のひらや脇の下に汗の出ることが多い（汗をかきやすくなった）

30. 人に会うのがおっくうになっている（以前はそうでもなかった）

あなたが囲んだ○の数を合計して下さい。

＿＿＿＿＿＿＿＿ 点

この値があなたのストレス度となります。あなたの得点は下の１～４のどの区分に相当しますか。当てはまる番号に○をつけて下さい。

ストレス区分	ストレス度	評　　価
1	0 ～ 5	ストレスはたまっていないようです。これからもこの調子でリラックスしていきましょう。
2	6 ～ 10	少々ストレスがたまっているようです。ストレスを解消するため外で運動でもしてみましょう。
3	11～20	ストレスがたまっているようです。医師との相談が必要です。気をつけて下さい。
4	21～30	相当ストレスがたまっているようです。直ちに病院へ行って下さい。受診が必要です。

Ⅳ　問題Ⅱで選んだ番号と上の表のストレス区分の自分の番号は一致しましたか。

1．一致した　　2．一致しなかった

上記の質問で２を選んだ人はなぜ一致しなかったと思いますか。

Ⅴ　あなたのストレス解消法を教えて下さい。

1．運動をする　2．食べる　3．買い物をする　4．カラオケ

5．趣味（　　）　6．タバコを吸う　7．酒を飲む

8．寝る　9　友人・知人に相談する

10．その他（

Ⅵ　この調査があなたの健康をより良いものにする手助けとなることを願っています。御意見・御感想をどうぞ（記入自由）

資料７

学生生活に関するアンケート

<問１> フェイス・シート（省略）

学生部　、厚生委員会

<問２>つぎに東海女子大学についてお尋ねします。あなたは本学について、総合的に考えてどれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

→０～１０の１１段階評価：平均値４．２１

<問３>本学の教員・授業についてお尋ねします。あてはまるところに○をつけて下さい。

１．あなたは本学の教員や授業の内容について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。たくさんの教員・授業がありますが、全体として評価して下さい。

→０～１０の１１段階評価：平均値４．１１

２．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（１）教員、特に専門課程の教員の数が少ない。	２５％	３３％	４２％
（２）教員ともっと接する機会を持ちたい。	８％	５０％	４２％
（３）興味がもてる授業が多い。	３％	３０％	６７％
（４）授業が難しすぎる。	６％	２５％	６９％
（５）授業内容に学生の希望を反映してほしい。	１７％	４７％	３６％
（６）少人数の授業を増やしてほしい。	５％	６８％	２７％
（７）教員は勉学上のことに関してもっと学生の面倒をみるべきである。	１０％	２３％	６７％
（８）教員は生活上のことに関してもっと学生の面倒をみるべきである。	２％	６％	９２％

<問４>事務局の業務についてお尋ねします。

１．あなたは本学の事務局の職員や業務について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。全体として評価して下さい。

→０～１０の１１段階評価：平均値５．４２

２．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて

2．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）学生相談室に入りにくい。	10%	38%	52%
（2）何か問題が起こったときに学生相談室を訪れようと思う。	11%	26%	63%
（3）学生相談室の業務についてもっと知りたい。	8%	25%	67%
（4）学生相談室について知らない。	12%	44%	44%

＜問9＞本学の学生控室（1階学生食堂前のスペース）についてお尋ねします。

1．あなたは本学の学生控室について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

→0～10の11段階評価：平均値4．17

2．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）禁煙にすべきである。	37%	35%	38%
（2）もっと広いスペースがほしい。	32%	46%	22%
（3）もっと美化すべきである。	31%	42%	37%
（4）冷暖房を強化してほしい。	12%	32%	56%
（5）学習専用のスペースがほしい。	28%	37%	35%

＜問10＞本学の運動施設・クラブ棟についてお尋ねします。

1．あなたは本学の運動施設・クラブ棟について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

→0～10の11段階評価：平均値4．83

2．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）学生食堂のメニューが少ない。	73%	12%	15%
（2）料理の味がよくない。	35%	52%	13%
（3）学生食堂の席を増やしてほしい。	58%	35%	7%
（4）衛生管理をもっとしっかりしてほしい。	34%	58%	8%
（5）内装を改善してほしい。	31%	42%	27%
（6）料金が高い。	29%	37%	34%

＜問7＞本学の購買部についてお尋ねします。

1．あなたは本学の購買部について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

→0～10の11段階評価：平均値3．83

2．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）営業時間を長くしてほしい。	32%	35%	33%
（2）本・雑誌の種類・数を増やしてほしい。	12%	31%	57%
（3）文房具類の種類・数を増やしてほしい。	20%	49%	31%
（4）食品類を販売してほしい。	25%	37%	40%
（5）女性のためのものを販売してほしい。	18%	35%	47%

＜問8＞本学の学生相談室についてお尋ねします。

1．あなたは本学の学生相談室について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

→0～10の11段階評価：平均値5．01

下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）事務局職員には好感がもてる。	10%	58%	32%
（2）事務局職員の対応態度はよい。	28%	63%	9%
（3）各種証明書発行の手続きは簡単である。	3%	71%	26%
（4）各種証明書発行に時間がかかる。	22%	26%	52%
（5）各種手続きの手数料が高い。	2%	24%	74%
（6）提示物を見やすくしてほしい。	46%	42%	12%

＜問5＞本学の奨学金制度についてお尋ねします。

1．あなたは本学の奨学金制度について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。全体として評価して下さい。

→0～10の11段階評価：平均値4．75

2．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）奨学金についての情報がもっとほしい。	14%	48%	48%
（2）成績優秀者に対する奨学金を設けるべきである。	3%	36%	61%
（3）入学後にも本学の奨学金が受けられる制度が欲しい	12%	57%	31%
（4）海外留学のための奨学金制度がほしい。	11%	35%	54%
（5）日本育英会の奨学金の枠をひろげてほしい。	25%	41%	34%

＜問6＞学生食堂についてお尋ねします。

1．あなたは本学の学生食堂について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

→0～10の11段階評価：平均値3．42

2．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）本学の運動施設・クラブ棟をもっと利用したい。	12%	34%	54%
（2）本学の運動施設・クラブ棟は充実している。	11%	28%	61%
（3）運動施設・クラブ棟についてもっと知りたい。	7%	31%	62%
（4）運動施設・クラブ棟をもっと解放してほしい。	27%	39%	34%
（5）特に作ってほしい運動施設がある。	31%	34%	35%

＜問11＞本学のサークル活動についてお尋ねします。

1．あなたは本学のサークル活動について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

→0～10の11段階評価：平均値4．10

2．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）サークルの数が少ない。	41%	37%	22%
（2）サークルへの補助金を増額してほしい。	25%	27%	48%
（3）本学のサークル活動は活発である。	8%	21%	71%
（4）他大学との交流がしたい。	34%	39%	27%
（5）大学はどんなサークルでも認めるべきである。	12%	57%	31%

＜問12＞アルバイトについてお尋ねします。

1．あなたは現在のアルバイトの状況について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

→0～10の11段階評価：平均値5．33

2．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）大学がもっとアルバイトを紹介してほしい。	21%	39%	40%
（2）アルバイトは完全に自由化すべきである。	39%	40%	21%
（3）現在よりもアルバイトを増やしたい。	25%	36%	39%
（4）アルバイトは必要なことである。	38%	41%	21%
（5）アルバイト届けは廃止するべきである。	23%	43%	37%

＜問13＞保健室についてお尋ねします。

1．あなたは本学の保健室について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に()をつけて下さい。

→0～10の11段階評価：平均値5．02

2．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）保健室に入りににくい。	12%	29%	59%
（2）保健室での対応は親切である。	31%	41%	28%
（3）常駐の先生をおいてほしい。	28%	47%	25%
（4）もっと明るく広い部屋にしてほしい。	25%	38%	37%

＜問14＞就職指導についてお尋ねします。

1．あなたは本学の就職指導について、どれくらい満足していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

→0～10の11段階評価：平均値5．73

2．あなたは次のようなことを感じたことはありますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	強く感じる	やや感じる	感じない
（1）早い学年のうちから情報を提供してほしい。	39%	45%	26%
（2）就職指導の担当者は親切である。	37%	52%	11%
（3）就職情報をもっとわかりやすく掲示してほしい。	43%	35%	22%
（4）東海地区以外の情報も提供してほしい。	29%	39%	32%

＜問15＞、＜問16＞　　省略

IX 管理運営組織点検実施委員会

管理運営組織点検実施委員会は、大学の管理運営の基本的な在り方、すなわち、現状における設置者側と大学教職員側の考え方の実情を調査し、問題点が把握されれば、それを指摘し、将来の大学管理運営上に必要、有益な検討資料を整備し、管理運営の基礎とするべきである。

本学の場合、設置者側の意思決定は、理事会を中心とするのは当然であるが、大学の教職員としては、運営に当たっての、大学学部の意思決定の法的機関として「教授会」があり、両者を結ぶ役割を持たせるように、理事者側と教授会の連絡を密にし円滑に意思決定が出来るようにすることが望まれる。本学では、そのために事前に重要事項等を審議する「主任教授会」が置かれている。また、教授会の下には所管事項が明示された各種委員会があり、運営実施、あるいは教授会への議題提出や諮問に応える役割を担っている。

それ故、本委員会はそれらの組織の構成と所管事項について検討する。

1、本学の管理運営機構ならびにその運営

(1)「教授会」の機構と機能

本学の教授会は、理事長、学長、専任教員および事務部局代表者をもって組織され、必要な時はその他の職員の出席を求めることが出来ることになっている。教授会は、学長が召集してその議長となり、会議の成立は規定によって定められている。現今では、成立条件は構成員の過半数の出席とし、恒例で毎月1回開催されている。

議事事項の主なものは、学則その他の規程の制定、改廃に関する事項、教育課程に関する事項、学生の入学、退学、休学、卒業認定等の学籍移動に関する事項、

学生の厚生補導に関する事項、その他、教育研究に関する重要事項等であり、教授会の議決は出席者の過半数による。

なお、教授会の下には各種の委員会が組織されており、大学の運営機構図は、表１に示すと通りである。

（2）「主任教授会」

主任教授会は、理事長の諮問、および教育研究上の連絡調整、ならびに大学運営上の重要事項を審議するために置かれている。教授会の運営に関すること、学生の賞罰に関すること、各種委員会からの提案の連絡調整に関すること、その他大学に関する重要な事項を審議する。　主任教授会は学長が召集しその議長となり、構成員は下記の通りである。

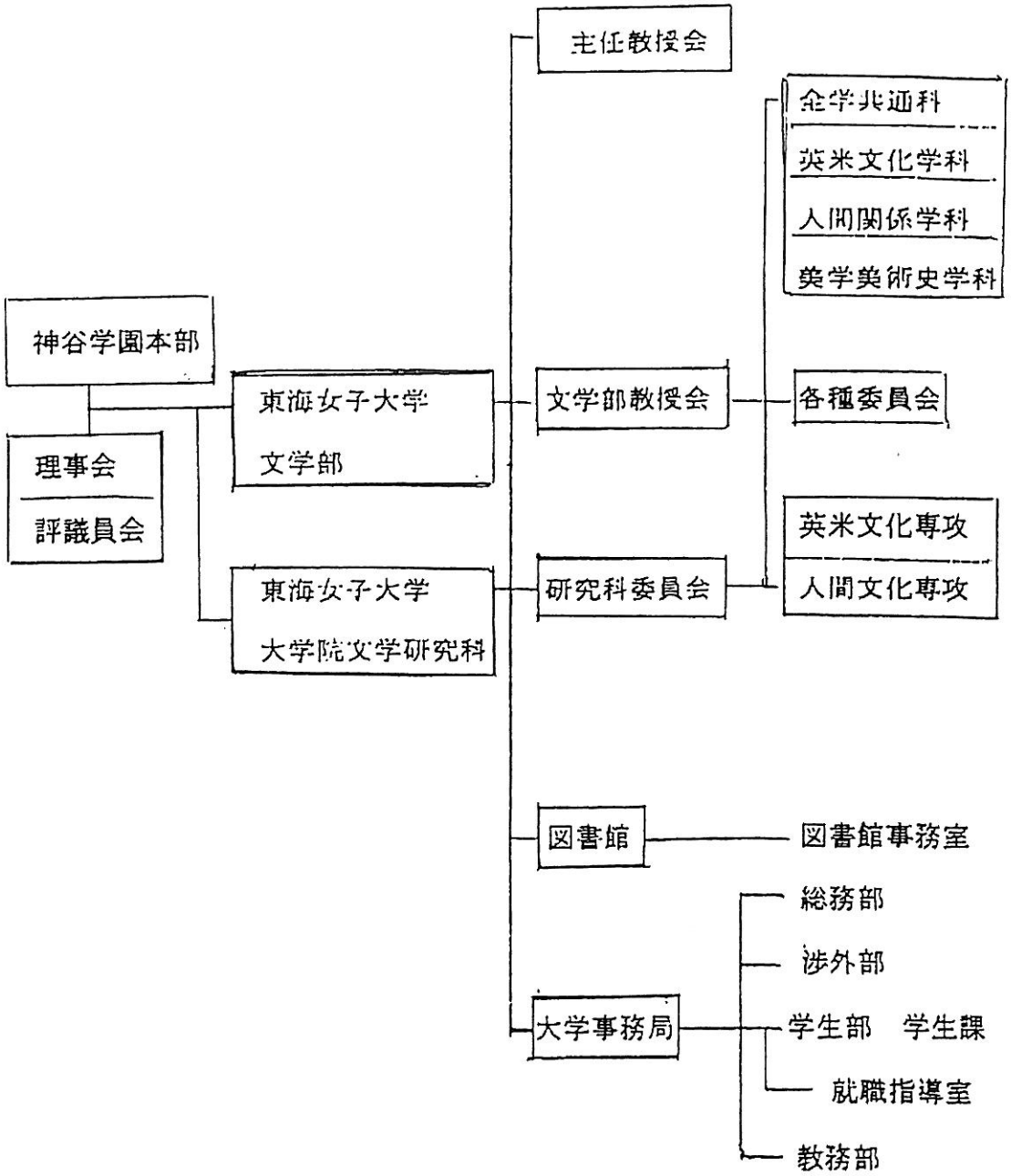
学園長、理事長、学長、副学長、学部長、図書館長、事務局長、学生部長、学科等の主任、総務部長、渉外部長、教務部長、就職部長、事務局長補佐、総務部次長等

（3）各種委員会の機構と機能

平成１１年５月現在、教授会内に設置されている常設の各種委員会の名称と構成および所管事項は表２、表３に示す通りである。

〔表 1〕

大学運営機構図


主任教授会
全学共通科
英米文化学科
人間関係学科
美学美術史学科
神谷学園本部
東海女子大学
文学部
文学部教授会
各種委員会
理事会
評議員会
英米文化専攻
人間文化専攻
東海女子大学
大学院文学研究科
研究科委員会
図書館
図書館事務室
総務部
渉外部
大学事務局
学生部　学生課
就職指導室
教務部

（表　　2）

各種委員会一覧表

名　称	委員数	審　議　事　項
教務委員会	１２	学生の教育課程、単位、入退学、卒業
厚生委員会	9	就職、課外活動、健康管理、福利厚生
教育実習委員会	9	実習計画、単位認定
紀要委員会	8	紀要の発行、運営
図書館委員会	8	図書資料の整備および運営
留学生委員会	9	ＣＡＥその他での語学研修の企画，運営
入学試験実施委員会	9	入学試験実施
社会福祉実習委員会	5	実習計画、指導、単位認定
博物館実習委員会	5	実習計画、指導、単位認定
公開講座運営委員会	7	公開講座の計画、実施
ＬＡＮ管理運営委員会	5	ＬＡＮ装置管理運営
情報処理教育委員会	5	授業計画、調整
ホームページ委員会	１１	大学公式Ｈ，Ｐ，の作成、管理

〔表　3〕(自己点検評価関係委員会)

自己点検運営委員会
基本事項検討委員会
学生受け入れ検討実施委員会
教育課程検討実施委員会
教育研究組織検討実施委員会
図書学習資源検討実施委員会
学生生活検討実施委員会
管理運営組織検討実施委員会

2、学内諸規程の整備

学校法人神谷学園における東海女子大学関係の諸規定は次の通りである。

1、法人関係

就業規則、任用規程、教員選考特別委員会規程、組織規程、給与規程規定

旅費規程、退職金支給規程

2，教学関係

学則、教授会規程、主任教授会規程、転・編入学規程

語学研究及び外国人留学生受け入れ措置の申し合わせ，

特別奨学生規程、東海女子短期大学からの編入生単位認定措置
英語英会話特奨生規程、学内奨学生規程、スポーツ奨学生規程
科目等履修生規程、研究生規程、教務委員会規程、厚生委員会規程
教育実習委員会規程、紀要委員会規程、図書館委員会規程、
留学生委員会規程、入学試験実施委員会規程、社会福祉実習委員会規程
大学院研究科委員会規程

3，人事関係

教員の停年に関する規程、事務職員の停年に関する規程

4，管理運営関係

図書館規程、図書館利用規程、図書館複写規程、体育館使用内規
体育施設管理規定、防火管理規定

5，その他

学園連絡協議会暫定規程、学科主任制度の申し合わせ、転入学暫定規程
転入学生単位読み替え暫定規程、問題行動研究センター設置要項
バイオサイエンス研究センター規則、同運営委員会規則
表彰規程内規、自己点検運営委員会規約、同点検実施委員会要領
学生会会則、教育後援会会則，東林会規約

3，就業規則、服務規程等の見直しと、勤務管理

本来、学園の就業規則、職員服務規程は教職員に通知され、周知されていたはずであるが、一部の教員に特例的に規則、規定にかかわらず変則的勤務が容認さ

れていた例もあった。平成１０年１１月より、規則、規定の遵守、励行が理事者より求められ、出勤日数や、担当時間数につき規則、規定の精神に沿って計画し、１１年度時間割作成、カリキュラムの手直しの機に、見直しを図ることとなり、止むをえざる事情を除き、服務状態、出勤簿管理等の改善が見られた。

しかし、遠距離通勤、兼職の事情等の急な変更が難しい場合もあり、教職員間の信頼関係と学生指導上の責任体制等、なお研究を要する問題もある。

もちろん、大学教員の研究と教育の任務の認識、実際上の割り振りや兼ね合いは、本学の目的や学問内容、教育の実情をもとにさらに慎重に研究すべきである、

４，管理運営体制の将来問題

１）理事長と学長の職務権限と管理運営体制

２）就業規則、職務規程の周知徹底

３）教員人事の問題

４）　主任教授会のあり方

５）　学長のリーダーシップ発揮の方策

６）　学部長、研究科長、学科主任等の任務達成に関する問題

７）　学部、大学院研究科の将来構想

あ と が き

今回の自己点検評価は、平成の世に入り我が国の大学教育が多くの点で批判的に注目され、少子化の影響や、変化の激しい時代の教育活動といった、厳しい危機的状況の下、ほとんど全ての大学が大学基準協会の指導により自己点検を実施し、将来計画や生き残り策を追求している一環であることはいうまでもない。

我々は、省みて本学では何がなされ、何が問題であったか、現状に何う対処すべきかを厳粛に検討し、広く論議し、報告書作製のためでなく、自らの将来を深く考える契機としなければならない。

前回、平成７年度に当時の永田幸雄学長の音頭取りで、各種検討項目の自己点検検討報告書が作製されたが、それ以後も大学を取り巻く情勢は大きく変わり、一層厳しくなっている。

今回は、平成９年度から１０年度にかけて点検、検討作業を続け、丁度、大学院文学研究科の設置に合わせて、大きく様変わりした情勢を分析、記述し、時宜を得た報告書作製ともいえようが、年々厳しくなる大学教育であれば、他大学とも共通の問題のみでなく、本学の特性と現状をより明瞭に打ち出した内容にすることを心がけた。

ただし、本学は、文学部であり、一部実学的な分野とも関連するが、元来が、基礎的な文化理論を主とするので、先端的な研究や新しい学問や技術の開発に繋がる分野ではなく、もっとも人間的な精神や行動や言語や文化財を追求し学習する教育機関として、円滑に教育が行われているか、学生生活が満足されているかということが期せずして重点となった。とくに、新カリキュラム関係の教育研究体制の検討と、本学バイオ・サイエンス研究所による学生生活調査の報告と資料が大きな部分を占めるのは、上記の事情によることをご理解いただきたい。

１９９９年　６月

東海女子大学文学部長　　岡本　重温

自己点検評価報告書

1999年版

発行日　1999年4月1日

編　集　東海女子大学自己点検評価運営委員会

発　行　東海女子大学

〒504-8511 岐阜県各務原市那加桐野町

電　話　0583－89－2200